

挿図 番号	掲載 番号	出土区	層	取上 番号	部位 (残存部)	分類 番号	調整		文様	色調		胎土							焼成	備考		
							外面	内面		外面	内面	白石	茶石	黄白 石	雲母	石英	黒石	赤石			角閃 石	
91	146	G50	V b	10575	口縁	III-5	-	丁寧な ナデ	貝殻条痕文, 綾杉文	にぶい赤褐	褐灰	○	○	○						良	146~148は同一	
91	147	H51	V b	8642	口縁	III-5	ナデ	丁寧な ナデ	貝殻条痕文, 綾杉文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○	○					普	146~148は同一	
91	148	H51	V b	8568	口縁	III-5	ナデ	ナデ	貝殻条痕文, 綾杉文	にぶい赤褐	褐灰	○			○					良	146~148は同一	
91	149	G50, H51	V b	10511	他 胴	III-5	丁寧な ナデ	丁寧な ナデ	綾杉文	灰褐	褐灰	○			○	○			○	良		
91	150	H51	V b, VI	8587	他 胴	III-5	丁寧な ナデ	丁寧な ナデ	綾杉文	灰褐	灰褐	○	○		○	○	○			良		
91	151	G・J51	V b	11303	他 胴	III-5	ナデ	ナデ	綾杉文	にぶい褐	にぶい褐	○			○	○				良		
91	152	H53	V b	14552	底	III-5	丁寧な ナデ	丁寧な ナデ	-	にぶい褐	にぶい褐	○			○	○	○			良	内底部欠損 底径 11.6 cm	
91	153	C51	V b	14420	底	III-5	ナデ	ナデ	-	にぶい赤褐	褐灰	○				○		○	普	底径 (15.4) cm		
91	154	H52	V b	13038	底	III-5	ナデ	ナデ	底: 圧痕	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○			○	○			普	底に白粘土 底径 9.6 cm		
91	155	D49	V b	14865	口縁	III-6	ナデ	ナデ	縦短沈線羽状文, 横貝殻押 圧文	赤褐	黒褐	○			○	○			普	口唇: 丁寧な ナデ 155~160は同一		
91	156	D51	V b	14856	口縁	III-6	ナデ	ナデ	縦短沈線波状文, 横貝殻押 圧文	赤褐	黒褐	○			○	○			普	155~160は同一		
91	157	C51	V b	14730	口縁	III-6	ナデ	ナデ	縦短沈線羽状文, 横貝殻押 圧文	赤褐	黒褐	○			○	○			普	155~160は同一		
91	158	D49	V b	14737	胴	III-6	ナデ	ナデ	縦短沈線波状文, 横貝殻押 圧文	赤褐	黒褐	○			○	○			普	155~160は同一		
91	159	D49	V b	14879	胴	III-6	ナデ	ナデ	縦短沈線波状文, 横貝殻押 圧文	赤褐	黒褐	○			○	○			良	155~160は同一		
91	160	C50	V b	-	底	III-6	ナデ	ナデ	縦短沈線波状文, 横貝殻押 圧文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○			○	○			普	底: 丁寧なナデ 底径 13.5 cm 内面コゲ		
91	161	K52・53	V b	11967	他 口縁	IV	横ナデ	横ナデ	縦流水文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○			○	普	161~164は同一	
91	162	K53	V a	11971	胴	IV	横ナデ	横ナデ	縦流水文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○			○	普	161~164は同一	
91	163	K53	V a	11972	胴	IV	横ナデ	横ナデ	縦流水文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○			○	普	161~164は同一	
91	164	J54	V b	11980	胴	IV	横ナデ	横ナデ	縦流水文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○			○	良	161~164は同一	
91	165	H52	V b	14874	胴	VIII	丁寧な 横ナデ	丁寧な 横ナデ	横連点文	にぶい褐	にぶい褐								○	良		
91	166	G42	V b	17257	口縁	VIII	ナデ	ナデ	貼付肥厚帯, 捺糸文, 口唇: 刻目	橙	橙	○			○					普		
92	167	E51・52	V a, b	8396	他 胴下半~ 底	V	-	丁寧な 横ナデ	山形押型文	赤褐	赤灰	○	○					○	○	普	器厚 5mm ~ 10mm 底径 (14.0) cm	
93	168	I53	V b	14764	胴	IX-1	ナデ	ナデ	無節縄文, 沈線	明赤褐	暗赤褐	○	○		○					良		
93	169	I53	V b	14768	他 胴	IX-1	ナデ	ナデ	無節縄文, 沈線	明赤褐	暗赤褐	○	○		○				○	良		
93	170	J51	V b	11381	胴	IX-1	丁寧な ナデ	丁寧な ナデ	無節縄文, 沈線	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○					良		
93	171	H53	V b	14759	胴	IX-1	ナデ	ナデ	無節縄文, 沈線	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○		○					不良		
93	172	I43	V b	17221	頸~胴	IX-1	-	-	横沈線, 捺糸文	明黄褐	明黄褐	○				○	○			良	風化による剥 離	
93	173	F47	V	17658	口縁~胴 上半	IX-2	-	横ナデ	貝殻押圧文, 貝殻条痕文	にぶい橙	灰褐	○	○	○		○				普	胎土の粒子大	
93	174	F47	V	17631	口縁	IX-2	-	横ナデ	貝殻押圧文, 下: 条痕文	赤黒	にぶい赤褐	○	○			○				良		
93	175	H44	V	17567	口縁	IX-2	-	横ナデ	貝殻押圧文, 下: 条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○				普		
93	176	E46	V b	17002	他 口縁	IX-2	-	横ナデ, 一部 ケズリ	貝殻刺突文, 貝殻押し様 押圧文	にぶい黄褐	明赤褐	○	○		○					良	風化による剥 落	
93	177	I43	V b	17222	胴	IX-2	丁寧な ナデ	丁寧な ナデ	貝殻押圧文, 横貝殻条痕文	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○					○	良	
93	178	F47	V	17639	胴	IX-2	丁寧な 横ナデ	丁寧な 横ナデ	横貝殻条痕文	赤灰	赤灰	○				○	○			○	普	内外スス
93	179	I52	V	7670	口縁~胴 上半	IX-2	ナデ	ナデ	口唇: 刻目, 横貝殻条痕文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○			○	○				良		
93	180	H42	V b	17286	胴	IX-3	-	斜ナデ	横貝殻条痕文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○			○					良		
93	181	G45	VI	17682	胴	IX-3	-	横ナデ	横貝殻条痕文	橙	にぶい褐	○	○			○				良	胎土に黒曜石 含む	
94	182	J20・21	V, VI	22261	他 胴	IX-4	粗いナデ	粗いナデ ・ケズリ 様	横沈線による流水文	明赤褐	黒褐	○			○			○		良		
94	183	F42	V	17854	胴	IX-4	横ナデ	横・斜 ナデ	横貝殻条痕による流水文	明黄褐	にぶい黄	○			○					良		
94	184	F44	V	17780	胴	IX-4	ナデ	ナデ	横貝殻条痕により流水文	にぶい褐	灰褐	○	○			○				良		
95	185	G44, H43	V b, VI	17246	他 口縁	IX-5	縦・横 ナデ	ケズリ様 横ナデ	口唇: 刻目, 横・斜条痕文, 爪形文	にぶい黄橙	褐灰	○	○			○				普	口径 (14.9) cm 185~187・191 は同一	
95	186	H44	V	17565	口縁	IX-5	-	横ナデ	口唇: 刻目, 横・斜条痕文	明黄褐	褐灰	○				○				良	185~187・191 は同一	
95	187	H44	V	17569	口縁	IX-5	-	横ナデ	口唇: 刻目, 横・斜条痕文	明黄褐	褐灰	○				○	○			良	185~187・191 は同一	
95	188	G47	V	17677	口縁	IX-5	横ナデ	横ナデ	横沈線, 条痕文	暗褐	暗褐	○	○			○			○	良		
95	189	F47	V	17674	口縁	IX-5	-	横ナデ	横・斜条痕文	暗褐	暗褐	○	○			○			○	良		
95	190	E45	V b	17014	口縁	IX-5	横ナデ	横ナデ	斜沈線	にぶい黄褐	褐	○	○		○					良		
95	191	H43	V	17646	胴	IX-5	-	横ナデ	条痕による斜格子文	にぶい黄橙	褐灰	○				○	○			普	185~187・191 は同一	

押込 番号	掲載 番号	出土区	層	取上 番号	部位 (残存部)	分類 番号	調整		文様	色調		胎土							焼成 角閃石	備考		
							外面	内面		外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石	赤石				
95	192	F50	V a	8204 他	胴	IX-5	横ナデ	横ナデ	条痕による斜格子文	灰褐	灰褐	○	○						○	良		
95	193	F49	V a, b	8224 他	胴	IX-5	-	横ナデ	条痕による斜格子文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	○				○	普		
95	194	G・H49	V b	8496 他	胴	IX-5	丁寧な 横ナデ	斜ナデ	条痕文	にぶい黄橙	灰白	○	○	○					○	良		
95	195	H52	V a, b	12747 他	胴	IX-5	横ナデ	横ナデ	斜条痕文	明赤褐	赤灰	○			○	○			○	普		
95	196	G44	V	17542	胴	IX-5	横ナデ	斜ナデ	貝殻刺突文, 鋸歯文, 格子文	明褐	褐	○	○		○	○				普	胴: 補修孔有り 胎土に黒曜石含む	
95	197	E44	V b	17021	口縁	IX-5	-	条痕	貝殻腹縁刺突文, 沈線による格子文	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○	○						良	
95	198	I53	V b	14771	胴	IX-5	丁寧な ナデ	丁寧な ナデ	斜沈線文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○	○						良	
95	199	F49	V b	13133	胴	IX-5	丁寧な ナデ	丁寧な ナデ	沈線による綾杉・羽状文	にぶい橙	褐灰	○	○	○	○	○					良	
95	200	F45・46	V	17694 他	胴	IX-5	-	-	横貝殻条痕文	明赤褐	明赤褐	○	○		○					良	胎土に黒曜石 含む 200・201 は同一	
95	201	F45	V	17712	底	IX-5	横ナデ	横ナデ; 一部斜め	横貝殻条痕文	赤褐	黒	○			○					良	底径 (11.2) cm 胎土に黒曜石 含む 200・201 は同一	
95	202	I52	V	7668 他	底	IX-5	ナデ	ナデ	斜貝殻条痕文	橙	灰褐	○	○							良	底径 (10.0) cm	
96	203	E47	V	7381	口縁～底	IX-5	ナデ (手 づくね風)	ナデ (手 づくね風)	貝殻条痕による斜格子文	赤・にぶい 橙	赤・褐灰・ にぶい橙		○								良	口径 (10.0) cm 底径 7.8 cm
96	204	F・G47	V	17582 他	胴	IX-5	横ナデ	ナデ	貝殻条痕による斜格子文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○	○						良	
96	205	E44	V b	17020	底	IX-5	ナデ	ナデ	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○					良	胎土に黒曜石 含む	
96	206	G45	V	17505	底	IX-5	横ナデ	横ナデ	-	明褐	明褐	○		○	○				○	良		
96	207	H42	V b	17282	底	IX-5	-	-	-	にぶい褐	明褐	○			○	○				普		
96	208	G42	II b	10972	底	IX-5	横ナデ	横ナデ	-	にぶい橙	褐灰	○			○	○				良		
96	209	H42	V b	17288 他	底	IX-5	縦ナデ	ヘラナデ	横貝殻条痕文	にぶい黄	黄灰	○	○							普	底径 7.0 cm	
96	210	F45	V, VI	17755 他	口縁～胴	IX-6	縦・横 ナデ	横ナデ	口唇: 刻目, 横貝殻刺突文	褐	にぶい黄褐	○				○				普	外面にスス 口径 (18.4) cm	
96	211	F45	VI	17758	口縁	IX-6	-	横ナデ	口唇: 刻目, 横貝殻刺突文	褐	にぶい黄褐	○				○				普		
97	212	H52	V b	14748 他	口縁	IX-7	ナデ	ナデ	貝殻押圧文	にぶい橙	にぶい褐	○	○	○						普		
97	213	F47	V	17671	口縁	IX-7	ナデ	ナデ	貝殻押圧文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	○					普		
97	214	H52	V	5884	口縁	IX-7	横ナデ	横ナデ	貝殻押圧文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○			○					普		
97	215	H53	V b	14761	口縁	IX-7	丁寧な ナデ	丁寧な ナデ	貝殻押圧文	褐	にぶい褐	○			○				○	普		
97	216	H52	V b	14744 他	口縁	IX-7	ナデ	ナデ	貝殻押圧文	にぶい橙	にぶい褐	○	○	○						普		
97	217	J52	V a	11503	口縁	IX-7	ナデ	ナデ	貝殻押圧による爪形文	にぶい橙	灰褐	○	○	○			○		○	普		
97	218	I52	V	7669	口縁	IX-7	横ナデ	横ナデ	貝殻押圧文	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○						○	普	
97	219	I52	V	7666	胴	IX-7	ナデ	ナデ	貝殻押圧による爪形文	にぶい橙	灰褐	○	○	○			○		○	普	219・220 は同 一	
97	220	I52	V	7662	胴	IX-7	ナデ	ナデ	貝殻押圧による爪形文	にぶい橙	灰褐	○	○	○			○		○	普	219・220 は同 一	
97	221	G50, H51	V b	10550 他	口縁	IX-8	横ナデ	横ナデ	貝殻押圧, 貝殻引き文	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○					普	スス	
97	222	H51	V b	8547 他	胴	IX-8	横ナデ	横ナデ	貝殻押圧文	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○					普	スス	
97	223	H51	V b	8553 他	胴	IX-8	横ナデ	横ナデ	貝殻押圧文	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○					良	スス	
97	224	H51	V b	8549	胴	IX-8	横ナデ (左→右)	横ナデ (左→右)	貝殻押圧文	橙	にぶい橙・ 黒	○	○	○	○	○					良	
97	225	H・I50	V b	8533 他	底	IX-8	ナデ	ナデ	貝殻押圧文, 底面: 植物圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○					普	底径 (12.0) cm	
97	226	E45, F47	V, V b	17023 他	底	IX-8	横ナデ	横・縦ナ デ	-	明赤褐	にぶい橙	○	○		○	○				普	底径 (9.2) cm	
97	227	F49	V b	11028	底	IX-8	ナデ	ナデ	底: 筋状圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○						普	底丁寧なナデ 底径 7.8 cm	
97	228	G49	V b	8463 他	底	IX-8	ナデ	ナデ	-	にぶい橙	褐灰	○			○	○				普	底に白粘土 底径 (11.8) cm	
97	229	G48	V b	8668 他	底	IX-8	横・斜 ナデ	横ナデ	貝殻押圧文	赤・にぶい 橙	にぶい橙	○		○	○		○		○	普	底に白粘土 底径 (15.4) cm 胎土に黒曜石 含む	
98	230	F44	VI	17827	口縁～胴	IX-9	横ナデ; 貝殻条痕	横ナデ	貝殻押圧文, 条痕文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○		○					普		
98	231	E45	II b	17011	口縁～胴	IX-9	ヘラナデ	粗いナデ	貝殻押圧文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○		○				良		
98	232	F47	V	17657	口縁	IX-9	ナデ	ナデ	貝殻押圧文, 条痕による斜格子文	にぶい褐灰	褐灰・にぶ い赤褐	○	○	○	○					良	波状口縁	
98	233	F47	V	17629	口縁	IX-9	ナデ	ナデ	貝殻押圧文	灰褐	褐灰	○	○		○					良	波状口縁	
98	234	F48	V a, b	8425 他	口縁	X	横ナデ	横ナデ	貝殻条痕による波状文, 口唇: 刻目	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○					良		
98	235	F48	V a	8252 他	口縁	X	丁寧な ナデ	丁寧な ナデ	貝殻条痕による波状文	橙	橙	○	○	○		○				良		
98	236	H51	V b	8540	口縁	X	横ナデ	横ナデ	貝殻押圧文, 貝殻条痕による波状文	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○					良	スス	
98	237	F48	V b	12722 他	胴上半	X	横ナデ	横ナデ	横・縦貼付突帯, 貝殻条痕による波状文	にぶい橙	灰褐	○	○							良	摩滅目立つ	
98	238	G44	V	17552	口縁	X	-	ナデ	縦貼付突帯 (突帯上に刻目)	にぶい橙	にぶい橙	○								良		
98	239	F48	V a	8261	胴	X	横ナデ	横ナデ	横貝殻条痕文, 縦貼付突帯	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	○	○				良	表面, 突帯摩滅	

挿図 番号	掲載 番号	出土区	層	取上 番号	部位 (残存部)	分類 番号	調整		文様	色調		胎土							焼成	備考				
							外面	内面		外面	内面	白石	茶石	黄白 石	雲母	石英	灰石	黒石			赤石	角閃石		
98	240	F48	V a・b	8280	他	胴	X	横ナデ	ナデ	貝殻押圧文, 条痕文, 横押 圧文のある瘤状突起	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○						良	雲母が多い 240・241は同一		
98	241	F48	V a・b	8290	他	口縁～胴	X	横ナデ	ナデ	貝殻条痕文, 貝殻押圧文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○						良	雲母が多い 240・241は同一		
99	242	K52	V b	11956	他	口縁～胴	XI	貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻押圧文, 貝殻条痕文	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○							普		
99	243	K52	V b	11950	他	胴	XI	貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻条痕文	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○							普		
99	244	K52	V b	11948	他	胴	XI	貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻条痕文	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○							普		
99	245	K52	V b	11951	他	胴下半	XI	貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻条痕文	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○							普		
99	246	J52	V a・b	11491	他	胴	XI	縦条痕	貝殻条痕	横・斜条痕文	にぶい褐・ 褐灰	にぶい褐・ 褐灰	○	○	○							普		
100	247	G42	IV	17115	他	口縁	XI	横条痕	横条痕	緩やかな波状口縁 口縁下径1.1cmの補修孔(ドリル)	黒褐	黒褐	○	○							良	口径(24.6)cm IV層(アカホヤ)		
100	248	J・K52	V a	11535	他	胴	XI	条痕	縦・横 ナデ	条痕による曲線文, 直線文	橙	赤灰	○	○	○							普		
100	249	K55	V b	11977		口縁	XI	貝殻条痕	貝殻条痕	口唇: 刻目, 条痕文	にぶい橙	明赤褐	○	○	○					○		良		
100	250	J51・52	V a	11369	他	口縁	XI	貝殻条痕	横ナデ	条痕文, 低い波状口縁	にぶい橙・ 一部に黒褐	にぶい橙・ 一部に黒褐	○				○	○			○	良	250・251は同一	
100	251	K52	V a	11533		口縁	XI	ナデ・ 条痕	横ナデ	条痕文, 低い波状口縁	にぶい橙・ 部分的に褐 灰	にぶい橙・ 部分的に褐 灰	○				○				○	良	250・251は同一	
100	252	F49	V a	8232	他	口縁	XI	ナデ	ナデ	横・斜沈線文	灰褐	灰褐	○	○	○							良	口径(13.8)cm	
100	253	H42	V a	17284		口縁	XI	-	横ナデ	横条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○							良		
100	254	F47	V	17633		口縁	XI	条痕	横ナデ	横沈線文, 条痕文	にぶい褐	にぶい褐	○	○			○					良		
100	255	K53	V b	12994		口縁	XI	横ナデ	粗い横 ナデ	縦沈線文	にぶい褐	にぶい褐	○			○						良		
100	256	F50	V b	14081		口縁	XI	横ナデ・ 条痕	横ナデ	刻目, 横・斜条痕文	灰褐	灰褐	○	○	○			○				普		
100	257	E51	V b	13140		胴	XI	ナデ	ナデ	刺突文, 右下がり沈線文	にぶい橙	にぶい橙	○	○						○		普		
100	258	K52・54	V a・b	11970	他	胴～底	XI	縦条痕	縦ナデ	条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			○	○					良	内外面剥落	
101	259	F42, G41・45	V, V b	17260	他	完形	XI	ナデ・ 条痕	貝殻条痕 (横主体 斜方向あり)	貝殻押圧文, 貝殻条痕斜格 子文, 縦条痕文	赤褐・上部 はススにより 黒色化	赤褐	○	○	○	○					良	口径36.6cm 底径7.2cm 器高34.6cm 底面ナデ		
103	260	G36	V b	17076		胴	I	ナデ	ナデ	貝殻腹縁刺突文	にぶい橙	黒	○			○	○					良		
103	261	K36	VI	33643		口縁	III-1	横ナデ	横ナデ	横貝殻押圧文	明褐	赤褐	○			○	○					良		
103	262	K32	VI	35620		口縁	III-1	-	斜ナデ	横貝殻押圧文	浅黄	にぶい黄橙	○	○			○					良		
103	263	I34	V	40891		口縁	III-1	-	ナデ	横貝殻押圧文, 綾杉状の貝 殻押圧文	にぶい赤褐	黒褐	○	○			○					良	口唇丁寧なナ デ	
103	264	G35	V	17586		口縁	III-1	-	横ナデ	貝殻押圧文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○			○	○					良		
103	265	H35, K33	V	34279	他	口縁～胴	III-1	ナデ	斜ナデ	横・斜貝殻押圧文	黒褐・褐	にぶい褐	○	○			○					良	波状口縁	
103	266	J33, K34	VI	34333	他	口縁	III-1	ナデ	横縦ナデ	横・斜貝殻押圧文	にぶい黄橙	橙	○			○	○			○		良	波状口縁, 口 唇: 丁寧なナ デ指頭痕	
103	267	J31, K32	V, VI	32435	他	口縁	III-1	横ナデ	丁寧な 横ナデ	横貝殻押圧文	灰褐	褐	○			○	○					良	波状口縁	
103	268	J34	I	-		口縁	III-1	ナデ	ナデ	横貝殻押圧文	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○			○	○				良	貼付突起して 波状口縁風	
103	269	H36	V	41078		口縁	III-1	ナデ	ミガキ様 ナデ	横・斜貝殻押圧文	明褐	黒	○			○						良		
103	270	J31, L33	V, VI	29801	他	口縁	III-1	横ナデ	ナデ	横・斜貝殻押圧文	明黄褐	明黄褐	○	○				○				良	胎土のキメ細 かい	
103	271	K31	VI	32442		口縁	III-1	横ナデ	横ナデ	横・縦貝殻押圧文	明黄褐	明黄褐	○			○	○					良		
103	272	J34	VI	40711		胴	III-1	ナデ	ナデ	貝殻押圧文, 貝殻押圧による 鋸歯文	褐	にぶい褐	○	○			○					良		
103	273	K36	V, VI	33631	他	胴	III-1	横ナデ	横ナデ	貝殻押圧による鋸歯文	明赤褐	明赤褐	○	○			○	○				良		
103	274	J33	VI	38570		胴	III-1	ナデ	ナデ	貝殻押圧文	褐	暗褐	○	○			○					良	器壁薄い	
103	275	G34	VI	36381		胴	III-1	-	丁寧な 斜ナデ	貝殻押圧文(重複施文)	褐	灰黄褐	○			○						良		
103	276	K30	VI	34359		胴	III-1	横ナデ	丁寧な 横ナデ	貝殻押圧文(重複施文)	明褐	灰褐	○			○	○					良		
103	277	J31・32	V, VI	32420	他	胴	III-1	ナデ	斜ナデ	貝殻腹縁による斜連続刺突 文	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○						○			良		
103	278	K34・35	VI	34302	他	底	III-1	ミガキ様 ナデ	ミガキ様 ナデ	貝殻押圧文	赤褐・褐	赤褐・灰黄 褐	○			○							良	底径(15.1)cm
103	279	J33	VI	37978	他	胴～底	III-1	ナデ	斜ナデ 横ナデ	貝殻押圧による綾杉文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○					良	底径(12.4)cm	
103	280	J34	VI	40707		胴	III-1	縦ナデ	斜ナデ	貝殻腹縁による斜刺突文	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○				普		
103	281	J・K23	V	33624	他	胴	III-1	ナデ	横ミガキ 様ナデ	貝殻腹縁による縦連続刺突 斜突	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○					普		
103	282	F32	II b	36669		底	III-1	底面の形 に沿ナデ	横ナデ	-	明褐	黒褐	○	○					○			良	底径(11.9)cm	
103	283	I37, K34	VI	34326	他	底	III-1	丁寧な 横ナデ	横ナデ	-	にぶい褐	灰褐	○	○			○					良	底径(10.0)cm	
103	284	G40	V b	17266		底	III-1	ナデ	-	貝殻押圧文	明褐	褐	○	○			○					良		
104	285	H35・37	V	39722	他	胴	III-5	ナデ	丁寧な ナデ	短沈線羽状文	にぶい褐	黒褐	○	○			○					良		
104	286	G33	VI	40931		胴	III-5	ナデ	斜ナデ	縦貝殻刺突による羽状文	明赤褐	にぶい黄橙	○									普		
104	287	J37	V	33329		口縁	III-5	-	横ナデ	口唇: 刻目, 貝殻条痕文	灰黄褐・口 縁上端は黒	黄褐	○			○						良		
104	288	I35	V	-		口縁	IV	ナデ	ナデ	貝殻刺突文, 条痕による鋸 歯文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			○					普		
104	289	J36	VI	33327		胴	IV	-	ナデ	貝殻条痕による羽状文	にぶい黄褐	褐	○	○			○					良		

4 遺構外出土石器

(1) 概要

当該期の遺構外石器類は総数 496 点であり、その殆どが包含層である V・VI 層から出土したものである。早期を主体とした遺構の占地性及び土器分布域を踏襲し、調査区の東部、中央部、西部の各分布を示し内訳を述べる。剥片・碎片の大多数を除き、原形を留める石器をほぼ全て、188 点図示した。なお、石材鑑定は肉眼観察による。

(2) 調査区東部 (第 109 図)

B～L-41～55 区を一括する。出土石器類は合計 374 点である。器種別の内訳は、石鏃 29 点、尖頭状石器 1 点、石錐 1 点、異形石器 1 点、石匙 2 点、削器・搔器類 9 点、二次加工剥片 11 点、剥片・碎片 215 点、石核 3 点、打製石斧 7 点、磨製石斧 3 点、石錘状石器 1 点、敲石 1 点、磨石類 54 点、石皿類 20 点、砥石 12 点、軽石製品 3 点、その他に棒状礫 1 点である。

分布状況は、早期出土石器の約 3/4 を占めるが全体として密ではなく、D-52 区を頂部とする微高地から西側の緩斜面に比較的広く纏まっている。この内、剥片石器類は偏りなく分布し、打製石斧・磨製石斧は分布域の周辺部に点在する。磨石類は集石の多い微高地頂部付近からの西側斜面一帯と、南北の崖線に挟まれた G-46 区付近に多くみられ、石皿類では F-47 区から近接して出土した大型品 2 点 (444・445) が注目される。他に完形 1 点 (443) が G-49 区より出土している。剥片類では、黒曜石が約 1/2、黒色安山岩が約 1/4 を占め、黒曜石は J-52 区を中心に全域に、黒色安山岩は微高地周辺にほぼ分布が限られている。異形石器 (358) については、J-52 区の崖線際に位置し、その周囲 2 m の範囲に姫島産黒曜石製の石鏃 1 点 (342) と調整剥片 70 点程によるブロックが存在する。また、この西側約 4 m より、特異な磨石 1 点 (442) が出土している。

以下、個々の特徴について述べる。実測図の並びは出土区での分布状況に関係なく、順不同である。

石鏃 (第 110・111 図 331～355)

25 点図化した。全て打製石鏃であり、類型は基部形状から、いわゆる平基の 1 類と凹基の 2 類に大別される。

331～334 は平基である。二等辺三角形を呈して、長幅比がやや縦長のものから、334 の大型に 2 : 1 のものがみられる。この内 332・333 は非常に先鋭な先端をもつが、いずれも表裏の一部に素材面を留めている。

335～352 は凹基である。全体的に素材改変度が高く、335～342 は長幅比がほぼ等しく、343～352 は長幅比が 1.5 : 1 の縦長に形作られている。これらの内、347～349 は基部の挟り込みが比較的深く、348 では 1 点のみ鉄石英を石材として精密な調整が施されている。また、

350～352 の 3 点は直線側縁にして脚部に「肩」を持つ特徴的な形態を呈する。

欠損については、339・344・349・350・352 が脚部を欠き、342・345～347 は先端部と脚部を欠いている。特に 342 は二次加工によって損なわれており、裏面の基部中軸への調整により先端部まで剥離されている。また、346 の表面には砕けた先端方向からの剥離が生じており、使用による衝撃剥離痕と見受けられる。その他に 353～355 は先端側上半部の欠損品としてみられる。

石材は、黒色安山岩と黒曜石が大半を占めるが多様である。黒色安山岩製が 10 点 (334・337・338・341・344・345・347・351・353・355)、黒曜石製が 8 点 (332・333・335・342・343・350・352・354)、チャート製が 4 点 (339・340・346・349)、ホルンフェルス製が 1 点 (331)、頁岩製が 1 点 (336)、鉄石英製が 1 点 (348) であり、石材による形態差といった傾向はみられない。

尖頭状石器 (第 111 図 356)

1 点図化した。356 は素材剥片の末端側に尖頭となる二次加工を施すが、やや厚く左右非対称形にして、石鏃とするには曖昧な整形にある。基部の片側に折れ面を残置している。黒色安山岩製。

石錐 (第 111 図 357)

1 点図化した。357 は三角に不整形を呈し、摘み部から突き出した短い錐先部をもつ。二次加工は素材剥片の折れ面を左側縁に取り込み、残る縁辺に表裏から粗い調整剥離を施している。黒色安山岩製。

異形石器 (第 111 図 358)

1 点図化した。358 はチャート製の薄手の剥片を素材とし、表裏から剥離された挟入によって、石匙の摘み状の突起が三叉に形作られている。また、上端は折れ面をあて、下縁は細かな調整剥離により整形されている。なお、この種の異形石器について、雁股状に上下が逆向きとなる可能性がいわれている。

石匙 (第 111 図 359・360)

2 点図化した。359 は小さな摘み部が形作られた小型品である。周縁部への比較的丁寧な二次加工により、横長楕円形の整った形状を呈する。

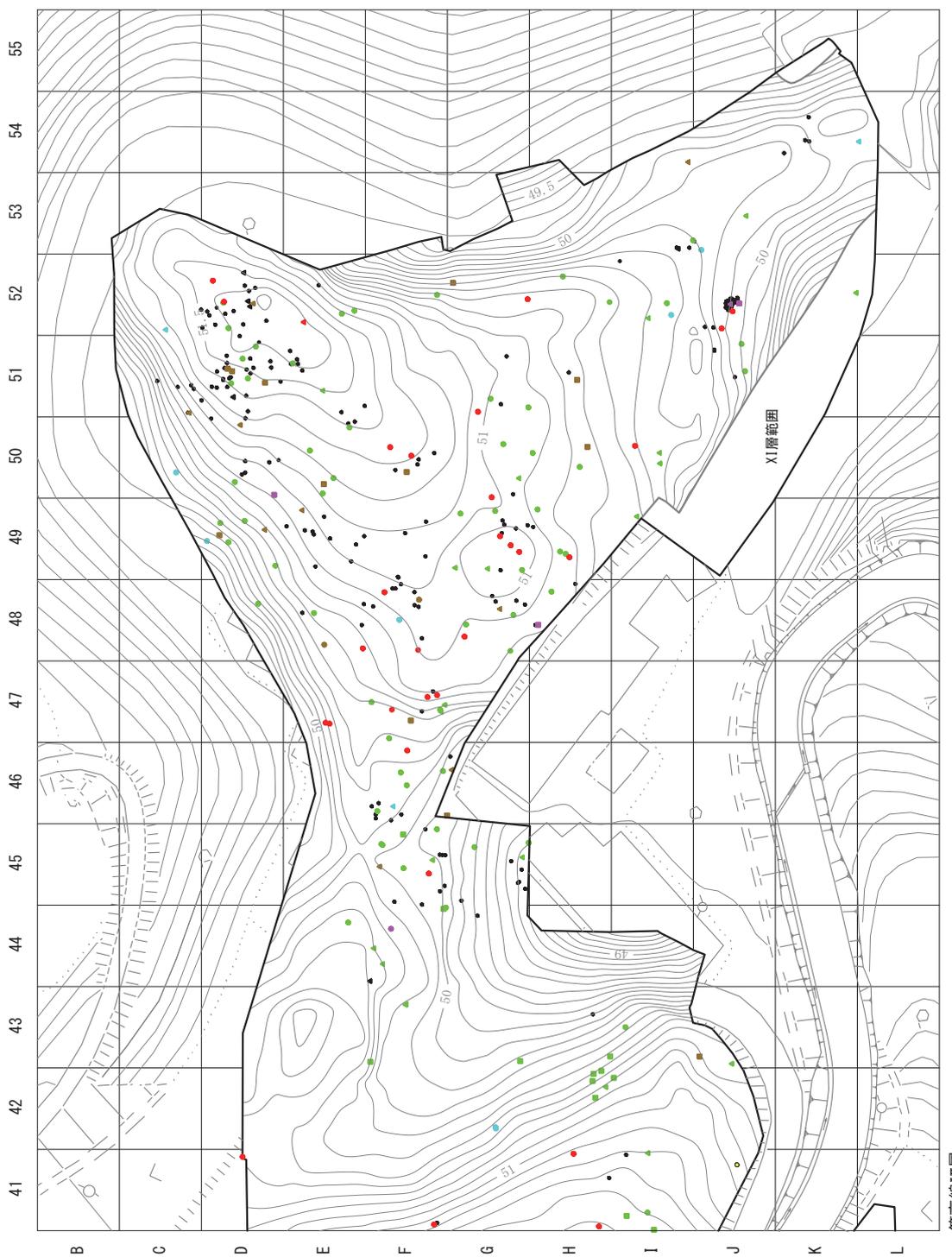
360 は不整形に簡単な二次加工によって形作られており、摘み部の挟入にのみ調整剥離を施して、両側縁は素材打面と折れ面を残置している。下縁の刃部は非常に鋭く、表裏に微小剥離痕が連続してみられる。石材は 359・360 のどちらも黒色安山岩である。

削器・搔器類 (第 112・113 図 361～369)

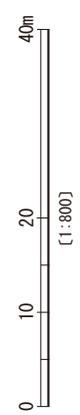
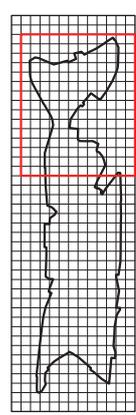
9 点図化した。361～365 は直線状の刃部が器体の一边に作出されたものである。

361 は板状長方形の礫片を用いており、浅い調整剥離を加えた下縁の刃部に磨滅が生じている。安山岩製。

362 は砂岩、363 は黒色安山岩の幅広剥片を素材とし、



- 凡例—
- 石鏃
 - ▲ 尖頭狀石器
 - 石錐
 - 石匙
 - ▲ 削器・攝器類
 - 二次加工剥片
 - 打製石斧
 - ▲ 磨製石斧
 - 磨石・敲石類
 - ▲ 石皿類
 - 砥石
 - 石錘狀石器
 - ▲ 異形石器
 - 磨石製品
 - ▲ 剥片・碎片
 - 石核



第 109 図 縄文時代早期 東部出土石器分布図

二等辺三角形の似通った形状を呈する。下縁刃部の二次加工は、362は背面からやや急斜度に、363は折れ面を残置して背腹両面から部分的に行われている。

364も三角形状を呈するとみられるが欠損している。表裏からの刃部調整は比較的丁寧である。黒色安山岩製。

365は不定形剥片の腹面に連続した刃部調整がみられ、下半部を欠損している。黒色安山岩製。

366～369は略円形として、刃部が作出された小型のものである。

366は角張った形状に浅い周縁調整が全周する。薄い右側縁は片面からの調整とし、頂部に小さく素材打面を残置する。珪質頁岩製。

367も二次加工が全周するが、一部側縁に素材折れ面が取り込まれている。拇指状に整った刃縁を呈する。黒色安山岩製。

368は粗い調整剥離を背腹両面から施して、左側縁を弧状の刃縁に形作っている。上面に表皮、右側縁に折れ面を残置する。黒色安山岩製。

369も調整が粗く、大振りな剥離面によって整形されており、一部背面に表皮を留める。上部を幾らか欠損する。珪質頁岩製。

二次加工剥片（第113図370～372）

3点図化した。370は三船産黒曜石の剥片を用いている。調整は粗く背腹両面から行われ、右側縁のほかは折れ面を呈する。

371は薄い横長剥片を用いており、片方の側縁に幾らかの調整剥離がみられ、加えて連続した微小剥離痕が生じている。反対側縁は折れ面である。黒色安山岩製。

372は日東系黒曜石の比較的大きな横長剥片である。縁辺の所々に不規則な剥離がみられるが、偶発的に意図した加工ではない可能性もある。

剥片（第113・114図373～375）

3点図化した。373は珪質頁岩製の末端側が肥厚した縦長剥片であり、鋭い側縁の一部に微小剥離痕が生じている。石材別の単独個体である。

374は姫島産黒曜石を用いた剥片であり、打面を除く全縁に微小剥離痕が生じている。

375は表皮をもつ珪質頁岩製のやや大きな縦長剥片であり、石材別の単独個体である。

石核（第114図376～378）

3点図化した。376は黒色安山岩製の石核で、打面転移を行って不規則に小型の不定形剥片を剥離した残核である。裏面に表皮を留め不整な板状を呈する。

377はチャート製の石核であり、表皮と節理面に覆われた、縦断面が三角形を呈する分割礫を用いている。剥片剥離は節理面を打面として主に正面で行われており、底面側を除いた周縁部に数枚の不定形な剥離痕を留める。まだ石核原形の段階にあるともいえる。

378は珪質頁岩製の石核である。正面に一枚大振りな剥片剥離面を留め、平らな表皮を打面としている。石核はその後の作業によって幾つかに破碎し、その内4点の破片が接合したものである。

打製石斧（第115・116図379～385）

7点図化した。形態は一定しておらず、礫器状のものをも含めている。

379は表裏に平坦な表皮と節理面をもつ頁岩製の剥片を用いており、素材形状をそのままに幅広の胴部をもつ。二次加工は粗く背腹両面から行われ、刃部のほか、周縁に部分的な整形剥離を加えている。調整による縁辺は鋭く、加撃による潰れはみられない。

380は楔形の断面をもつホルンフェルス礫を素材として、その一端を刃部側にあてている。加工は両側縁の調整剥離を切る大きな剥離面によって、器体の厚みを減じさせている。しかし、刃部の末端は未調整で礫面のままに鈍く、おそらくは未製品であるとみられる。

381はホルンフェルス製の剥片を素材とした小型品である。加工は厚みのある一方の側縁に行われており、使用によるものか刃部を欠く。

382は長楕円の扁平なホルンフェルス礫を素材としている。加工は素材形状を活かし、刃部から一方の側縁にかけて片面への粗い調整剥離が施されており、刃部の整形が弱い礫器的な製品かとみられる。

383も382同様、加工による改変が弱い器体であり、ホルンフェルスの扁平礫を用いている。下端に表裏からの粗い剥離による斜行した刃部を留める。

384は砂岩製の剥片を素材として、台形に厚みのある形状を呈する。加工はやや粗く、主に腹面側の周縁に整形剥離を施しており、縁辺にジグザグの稜線を留める。

385は基部側に挟り部をもつ定形的な形態を呈し、尖頭状の刃部を有する。ホルンフェルス製の剥片を素材として、周縁に整形剥離を施しており、下半部は腹面側を未調整として形作られている。

磨製石斧（第116図386～388）

3点図化した。386は比較的小型のもので、加工は厚みをもたせた表面に対して裏面を平坦に研磨しており、側縁への研磨はなく、調整剥離痕を留める。被熱赤化が著しい。安山岩製。

387はやや広い刃部の撥形を呈する。打製石斧同様の粗い調整剥離によって形作られており、整った刃部から器体の中軸にかけて部分的に研磨が施されている。基部の末端には敲打調整による整形がみられる。ホルンフェルス製で、著しく風化している。

388は胴部から基部を欠損した刃部側であるが、おそらくは再生品とみられる。全面に丁寧な研磨が施されており、整った刃部に横方向の研磨痕が顕著である。また、折れ面から生じた表裏の剥離面にも微弱的な研磨が認めら

れる。石材は重量感のある砂岩である。

石錘状石器 (第 116 図 389)

1 点図化した。389 は砂岩の扁平長方形の破片であり、短軸の両極に簡単な剥離の加工がみられるものである。

敲石 (第 117 図 390)

1 点図化した。390 は長楕円形の扁平な礫を用いており、上下両端を作業面として後退した著しい敲打痕が生じている。また裏側は平らな磨り面としている。砂岩製。

磨石類 (第 117 ~ 123 図 391 ~ 442)

52 点図化した。図上、凡そ大きい物順に並べ、最大径 13 cm までの 8 cm 以上あるものを大～中型品、それ未満のものを小型品として便宜的に大別した。また、これらには、磨り痕・敲打痕・凹痕にみる各機能を併せ持ったものが存在することから、磨石・敲石・凹石を一括して扱った。以下に分類する。

1 類：磨り面のみで、片面か両面、全面に及ぶもの

2 類：磨り面と敲打痕をもつもの

3 類：磨り面と表裏中央に凹痕をもつもの

4 類：磨り面と敲打痕、表裏中央に凹痕をもつもの

391 ~ 425 の大～中型の磨石類は、1 類 21 点、2 類 9 点、3 類 2 点、4 類 3 点となっており、1 類が全体の 2/3 を占めている。1 類は、391 ~ 394 等の磨りが表裏にみられるものが大半で、その中で 391・392 のように円礫の表裏の作業面が平坦なものと、396 や 400 などの丸みを帯びているものに分かれる。他方 395 は、全周磨り面とみられるが、被熱による剥落が著しい。2 類は、397・399・405・409 ~ 411・417・424・425 の 9 点である。411 は欠損品であるが、表裏の磨りと全周に及ぶ著しい敲打により石鱗形を呈するものとみられる。その他は、敲打の痕跡が弱く、原礫の不整な形状を留めている。405 は細長く連なる敲打痕が上面、側面にみられる。3 類は、412・413 の 2 点で、磨りによる平坦な表裏面を持つ円ないし楕円礫で、凹痕は顕著ではない。4 類は、414 ~ 416 の 3 点で、416 は全周の磨りと側面の敲打により石鱗形を呈している。凹痕は 3 点とも顕著ではない。

426 ~ 441 の小型の磨石類は、1 類 12 点、2 類 3 点、4 類 1 点と、1 類が 3/4 を占めている。426 ~ 428 等の 1 類は、円ないし楕円礫を用いており、磨りは概ね表裏にみられるが、436 を除き丸みを帯びた原礫の形状を留めている。2 類は 429・432・438 で、敲打が側面又は下面にみられる。磨り、敲打ともに顕著ではなく、やはり原礫の形状を留めている。4 類は 434 の 1 点のみで、表裏の磨りと側面の敲打により石鱗形を呈する。四隅に残る原礫面から、小ぶりの円礫を用いたとみられる。表面の凹痕は比較的深い。被熱により著しく赤化している。

442 は黒光りした表裏の中心部に黄褐色斑が目立ち、1 点のみ特殊である。角の落ちた算盤玉のような形状を呈し、滑らかな全面に短く放射状に生じた擦痕がみられ

る。石材は夾雑物を含まず重量感がある。透閃石岩とするが、黄褐色斑の貫入があり検討を要する。

石材は多いものから、安山岩 (25 点 48%)、花崗岩・花崗閃緑岩 (13 点 25%)、砂岩 (9 点 17%)、ホルンフェルス (2 点 4%)、玄武岩・凝灰岩・透閃石岩 (各 1 点 6%) の利用がみられる。花崗岩・花崗閃緑岩は大型～中型品に多く、また、1 類が 10 点と偏っている。安山岩は小型品の 2/3 を占めている。なお、原礫の形状もしくは石材の硬度によるものか、花崗岩類、砂岩は扁平な円形を呈するものが多く、安山岩、ホルンフェルスでは不整形もしくは断面形が曲面のものが多くみられる。

なお、赤化や黒色付着物など、被熱のみみられるものは半数に近い 24 点である (392・395・399・402 ~ 405・410 ~ 414・416・419 ~ 421・424・426・427・433 ~ 435・440・441)。

石皿類 (第 123 ~ 126 図 443 ~ 462)

20 点図化した。大小、不定形なものや台石の類いも含めて一括した。磨り窪みの顕著なもの 443 が 1 点ある他、444 ~ 462 はいずれも平石を用いた扁平石皿である。

443 は略長方形を呈し、表裏に比較的深く磨り窪んだ作業面を有する。図上、上方が掻き出し口とみられ、なだらかな磨り面が端部に及ぶ。石材は安山岩を用いる。

444 ~ 450 は不整形にして比較的大きく、欠損品であっても使用可能なものといえ、いずれも表裏両面を作業面としている。445 は敲打痕の凹面が広くみられ、作業面再生の可能性がある。449 は略三角形を呈して台石といえ、表面の磨り面中央に著しい敲打痕がみられる。また、三方の端部に敲打による粗い剥離が生じている。

451 ~ 462 は 460 を除いて欠損品である。その内 460 ~ 462 は小型品に入り、461 と 462 は同一個体片である。

なお、これらの約半数の 9 点には被熱赤化がみられている (445・447・450 ~ 452・455・456・461・462)。

石材は、砂岩 (11 点 58%)、花崗岩 (6 点 31%)、安山岩 (2 点 11%) の利用がみられる。

砥石 (第 126 図 463)

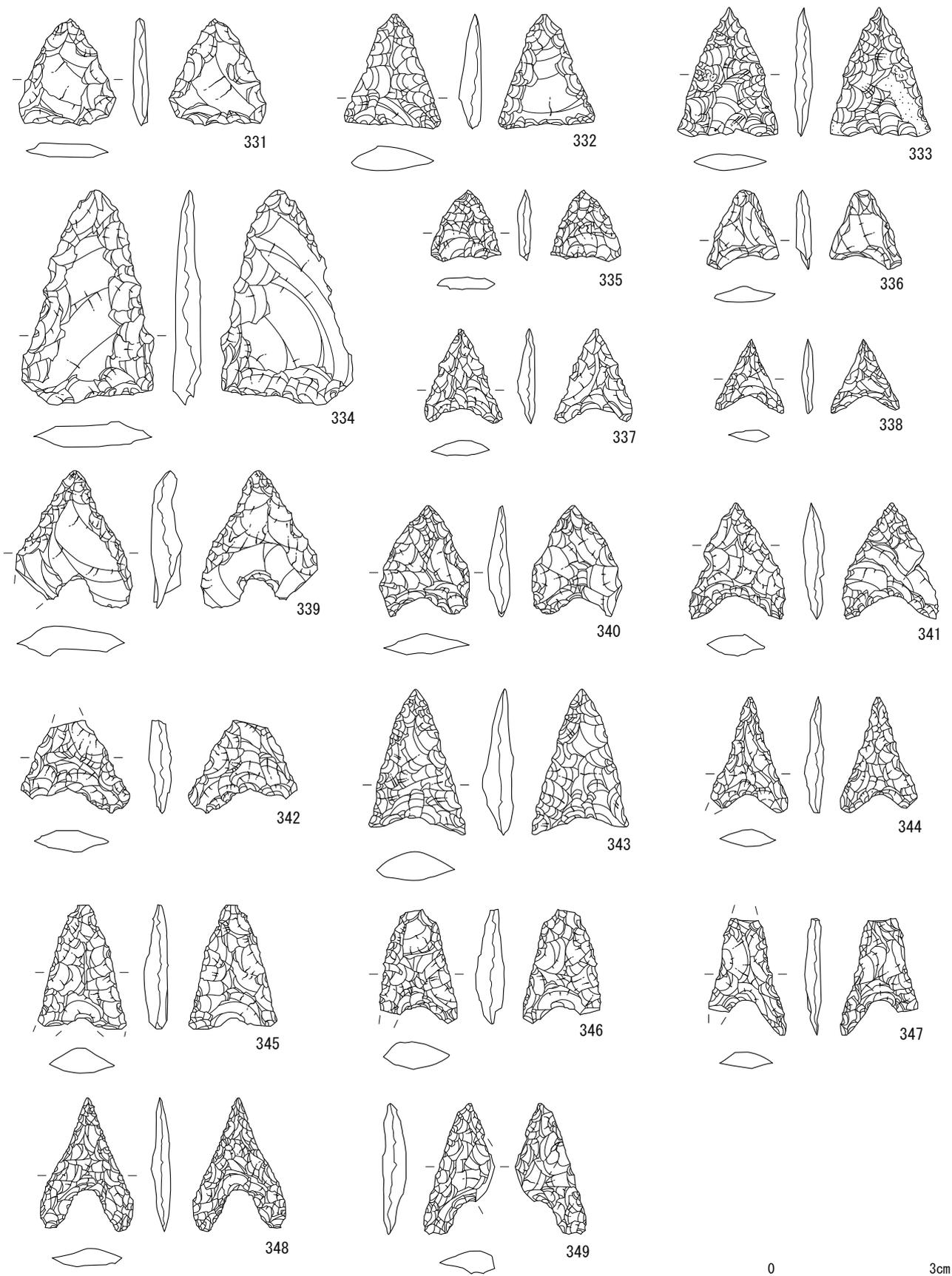
1 点図化した。463 は上部を欠損する。作業面を離れた平滑な砥面をもち、長軸方向に複数の線状痕が生じたものである。石材は花崗閃緑岩である。

軽石製品 (第 126 図 464)

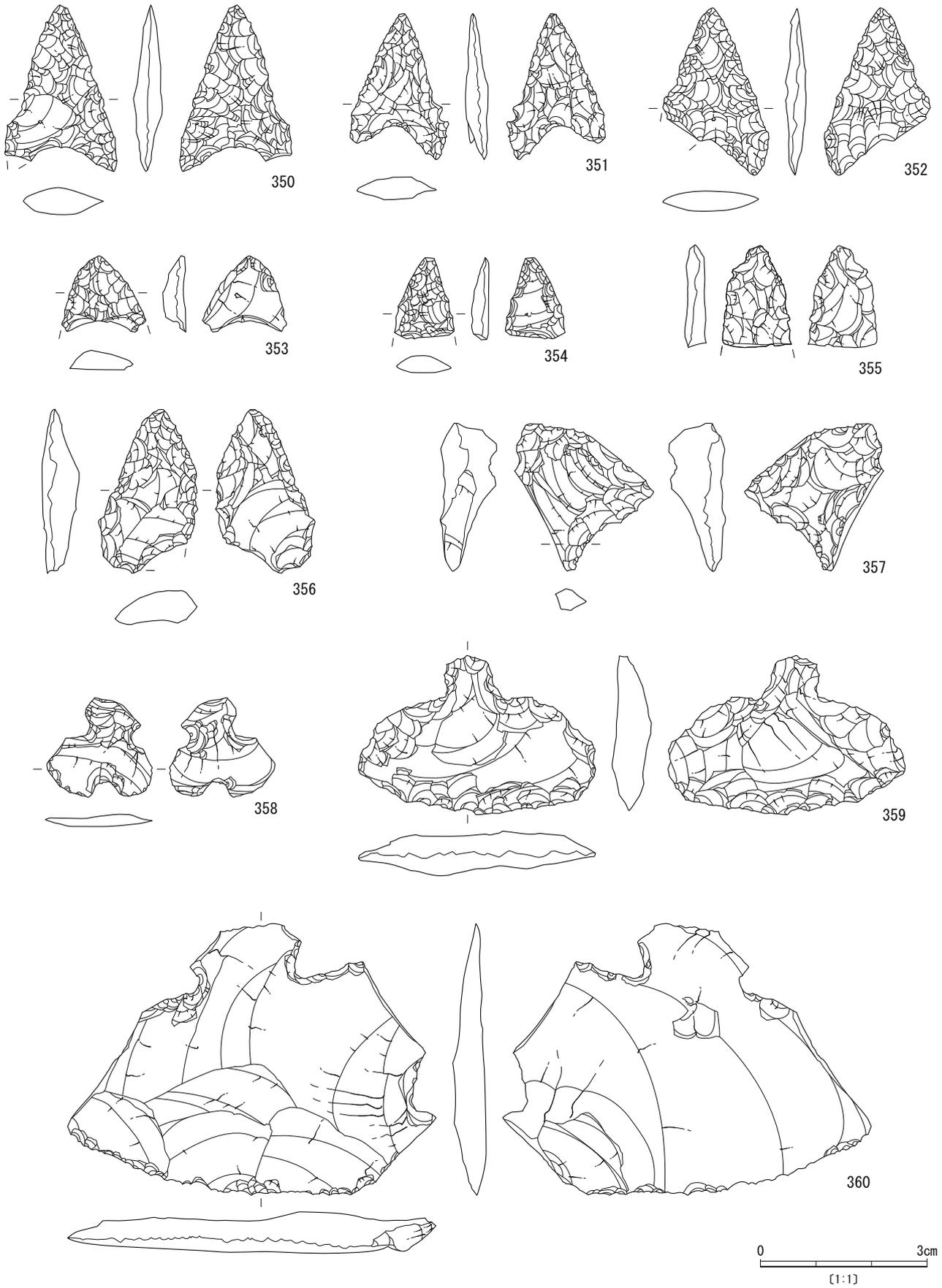
1 点図化した。464 は不整な形態を呈し、整形痕は判然とししない。ほぼ中心部に穿孔をもち、石材面から製品とみたが、孔が内部で深く横に逸れた形状にあることから、検討を要する。

棒状礫 (第 126 図 465)

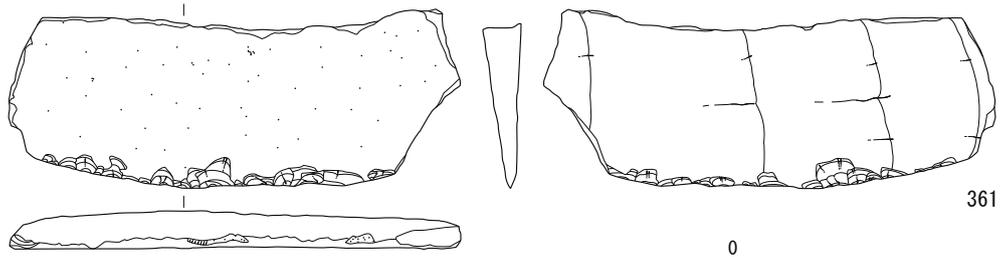
1 点図化した。465 は横断面が菱形を呈する、稜線の通った棒状の砂岩礫である。これといった使用痕跡はないものの、形状から敲石の欠損品である可能性を持つ。被熱赤化している。



第110図 縄文時代早期 東部出土石器(1)

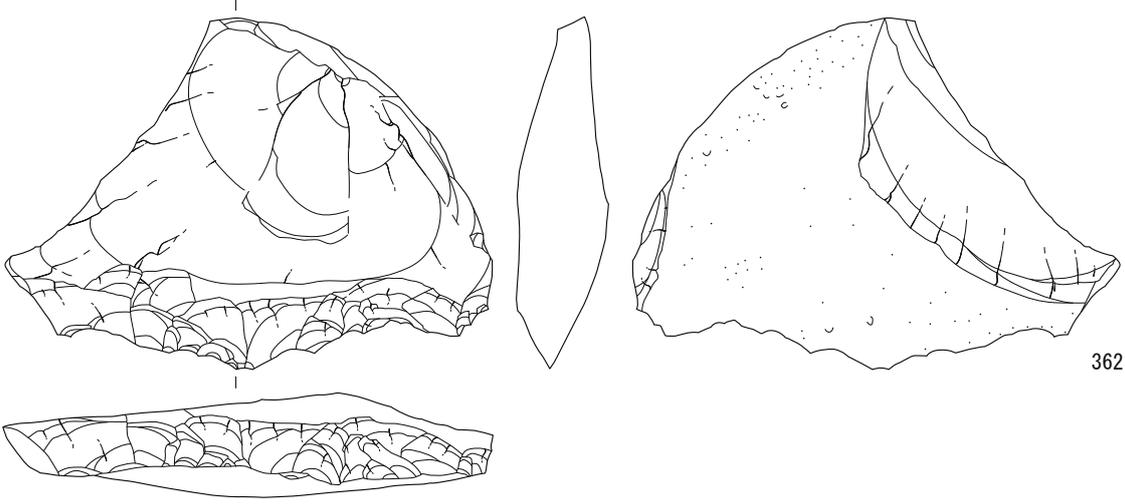


第111図 縄文時代早期 東部出土石器(2)

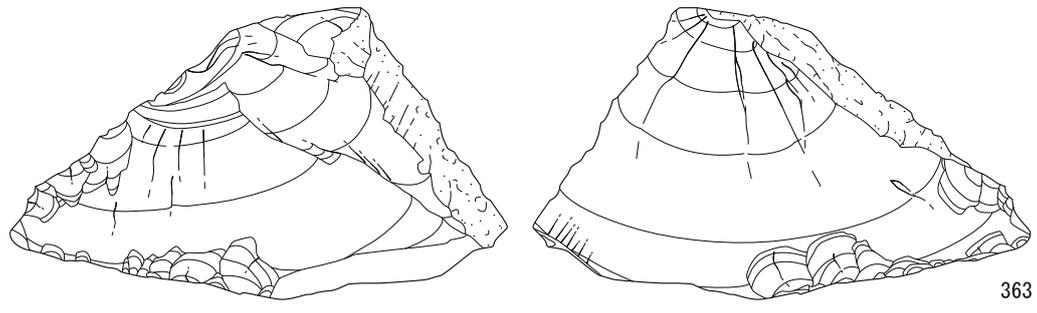


361

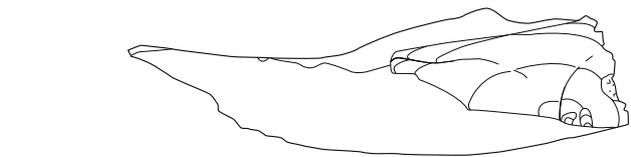
0 10cm
[1:2]



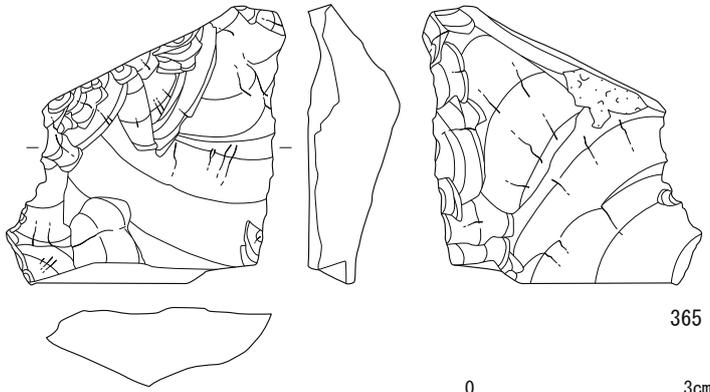
362



363



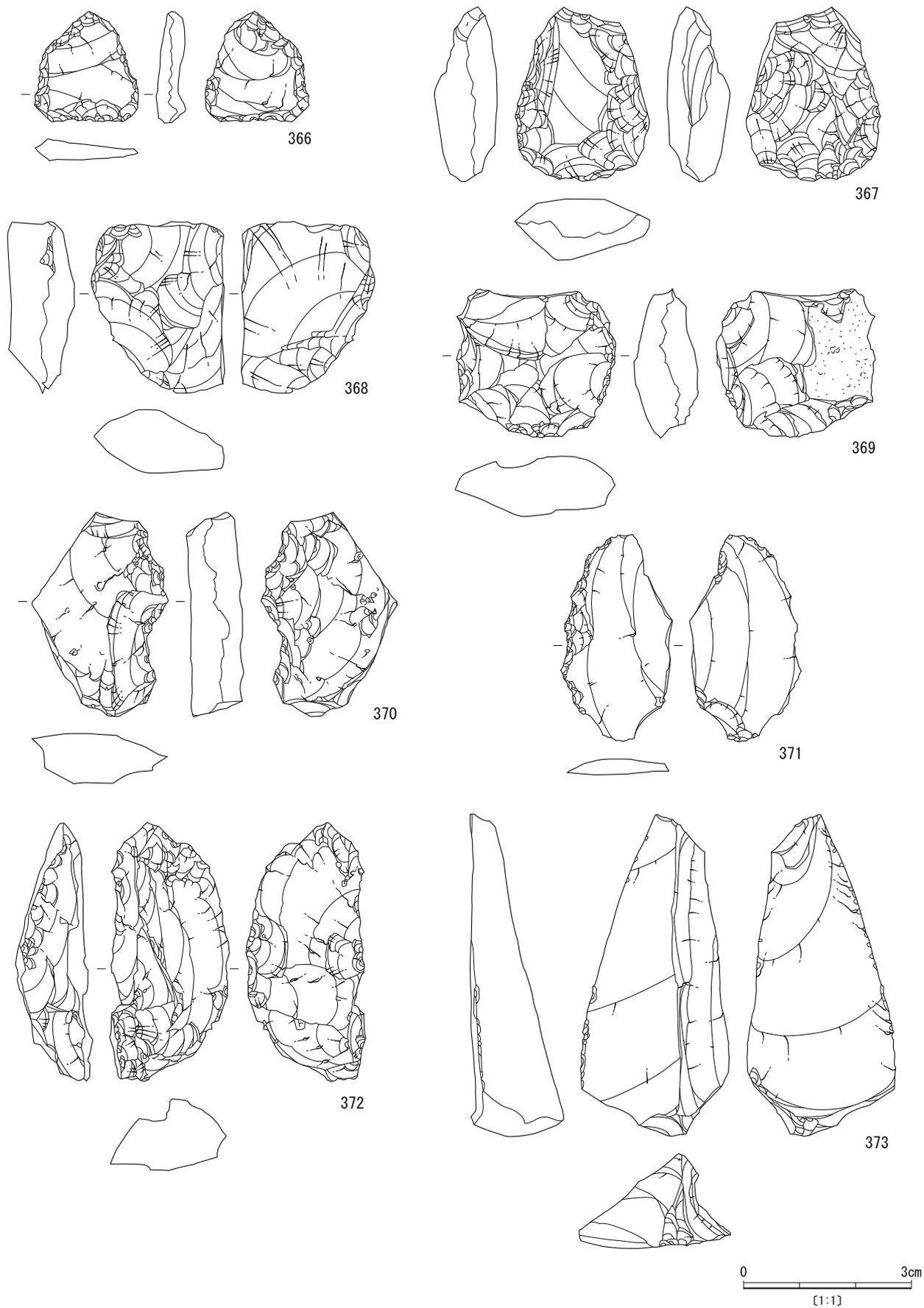
364



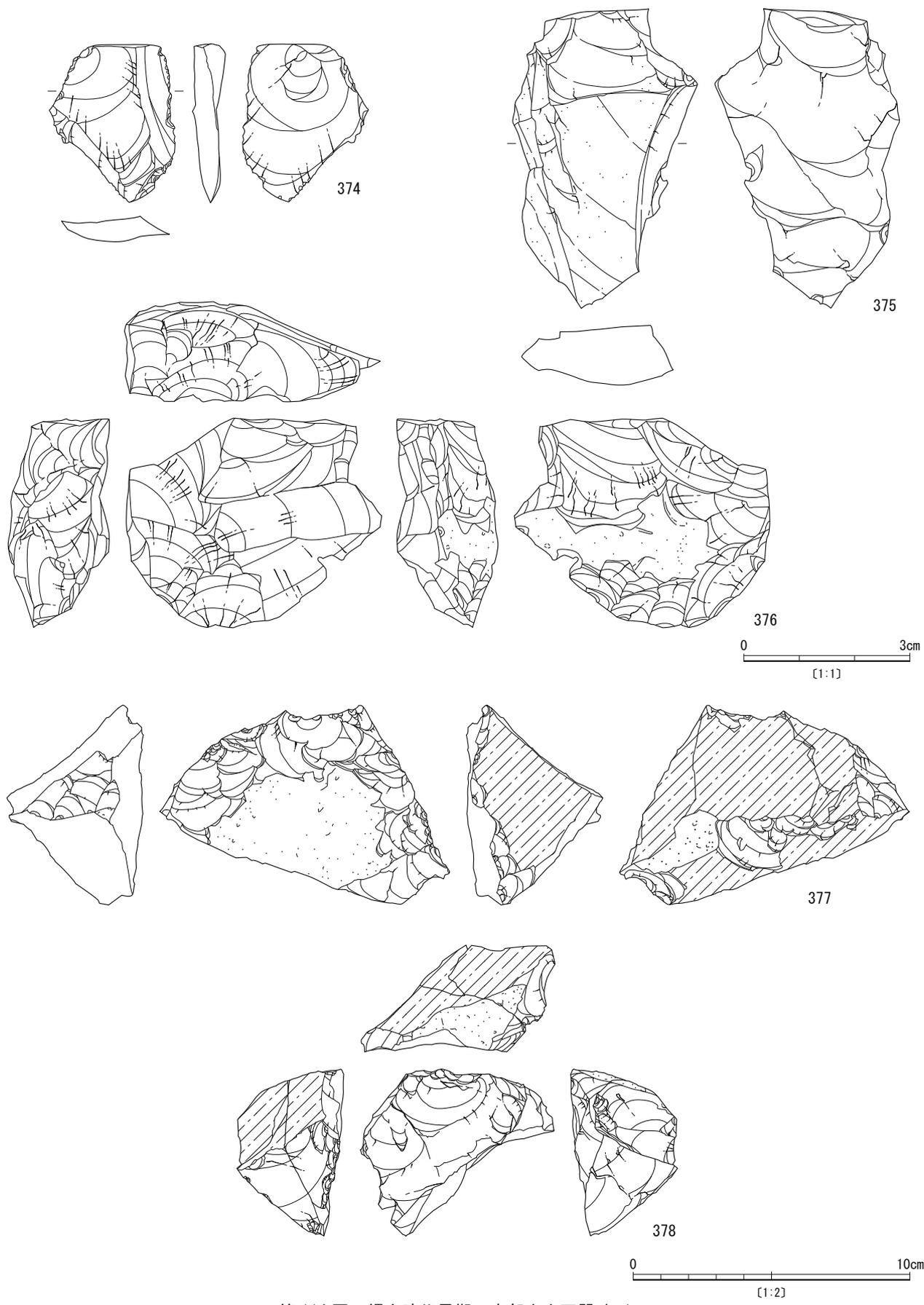
365

0 3cm
[1:1]

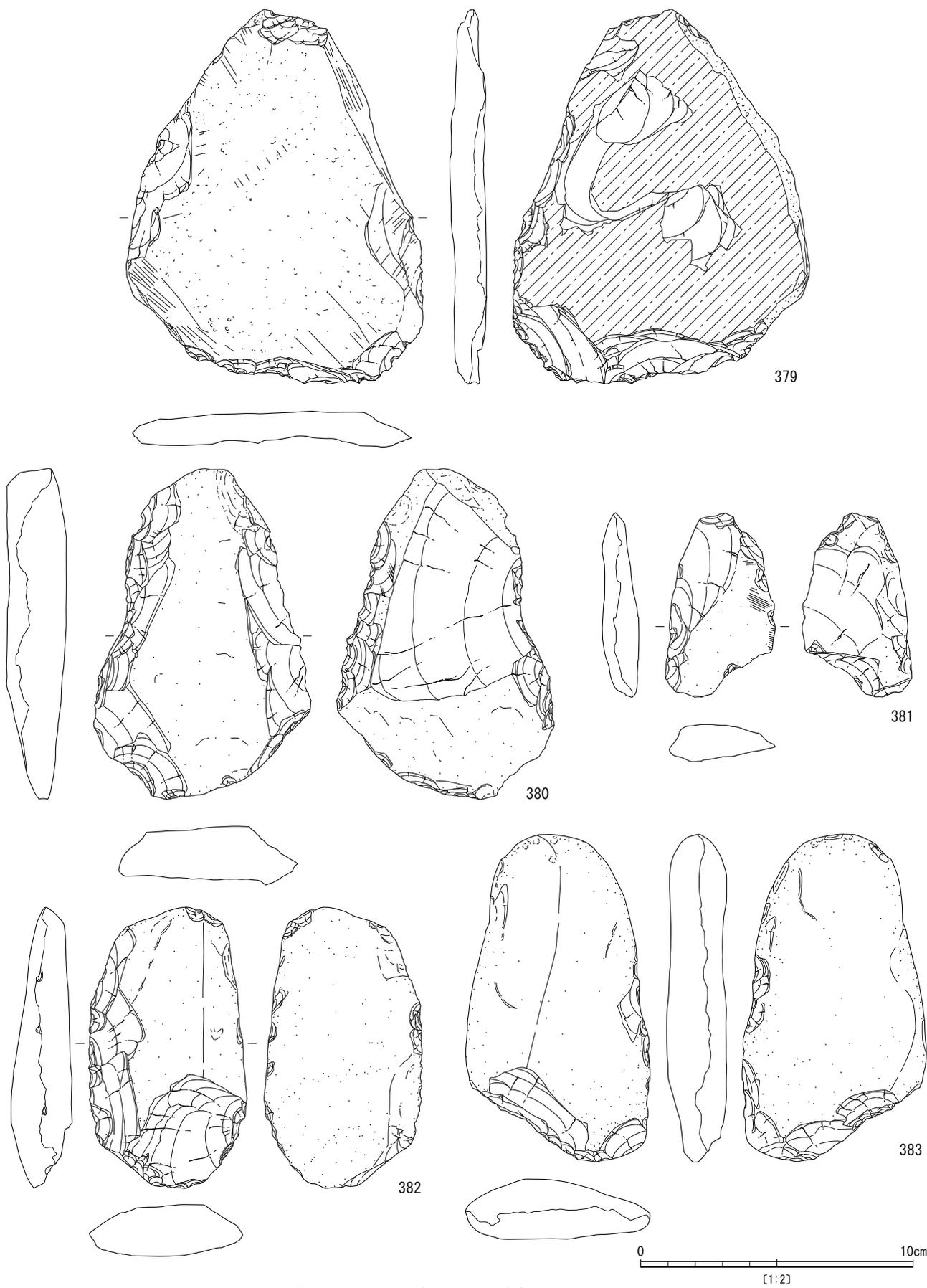
第 112 図 縄文時代早期 東部出土石器 (3)



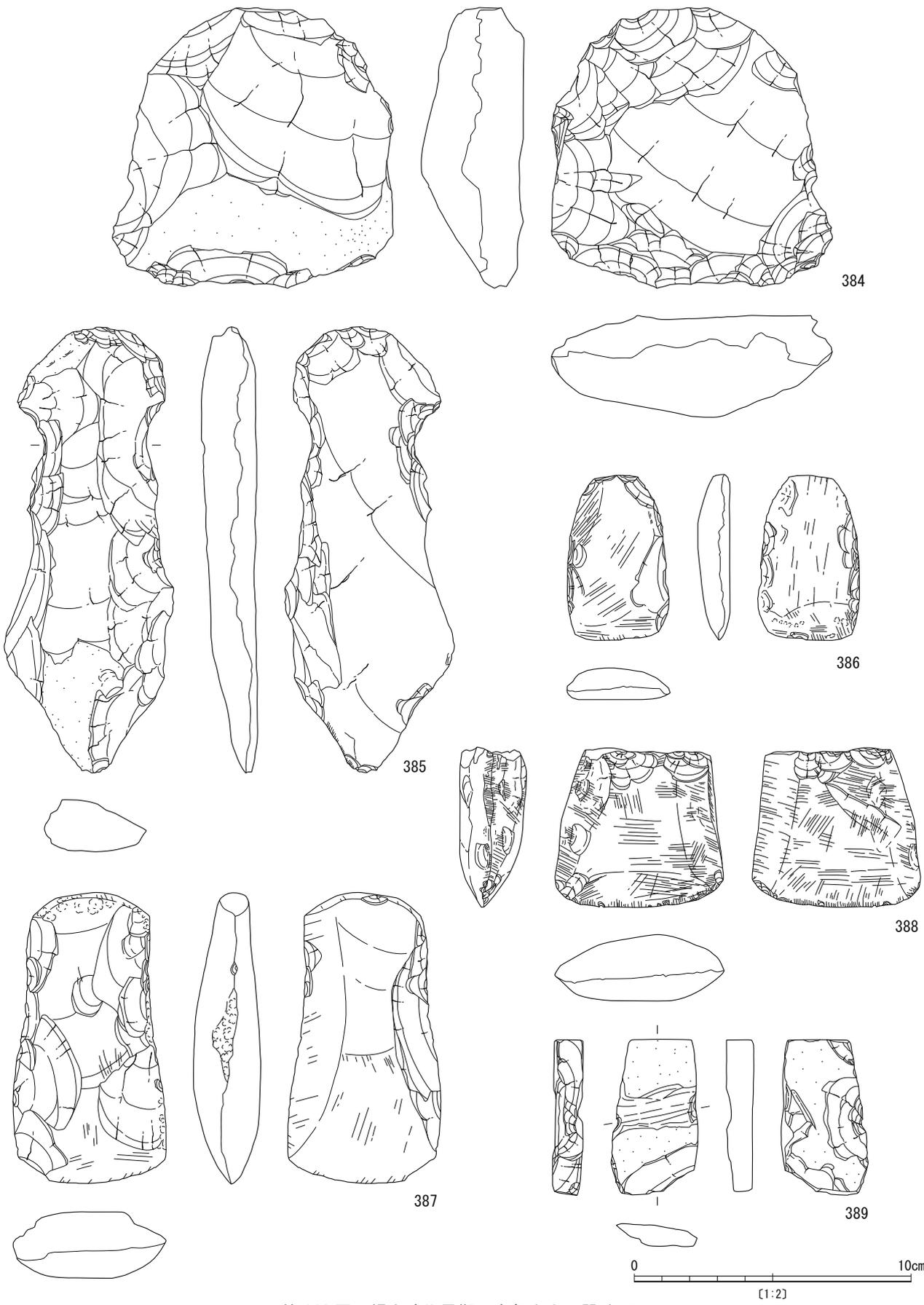
第113図 縄文時代早期 東部出土石器(4)



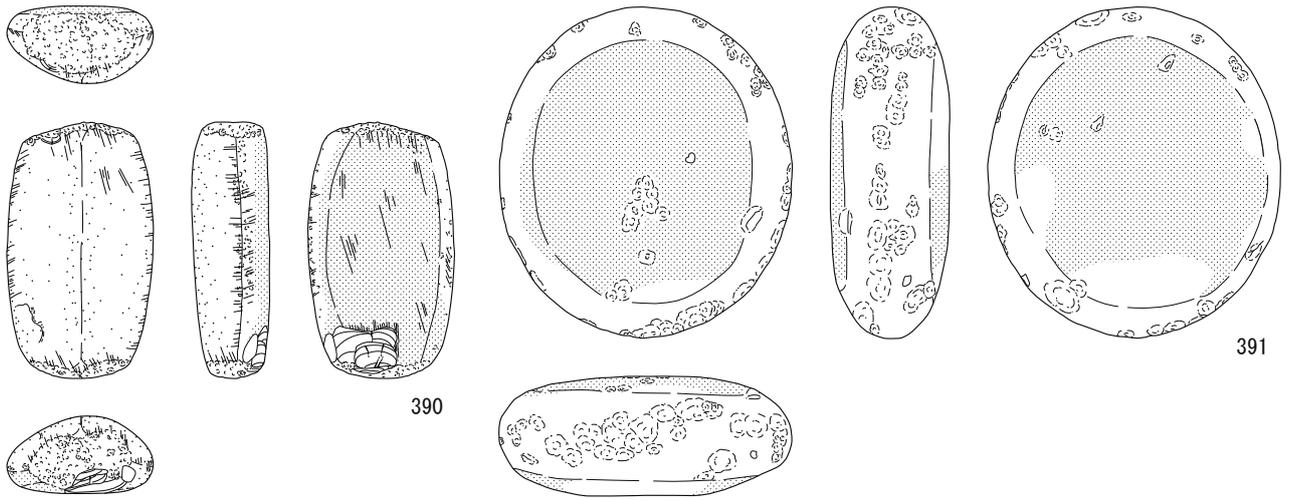
第 114 図 縄文時代早期 東部出土石器 (5)



第 115 図 縄文時代早期 東部出土石器 (6)

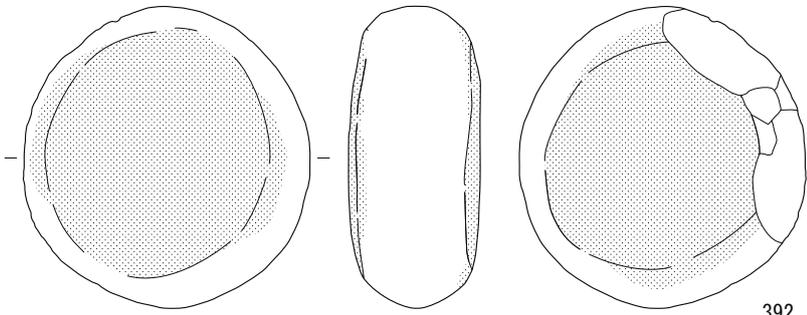


第 116 図 縄文時代早期 東部出土石器 (7)

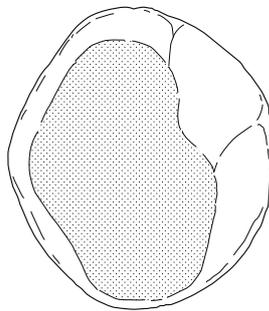
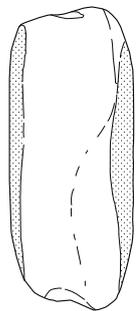
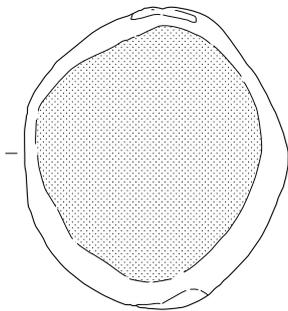
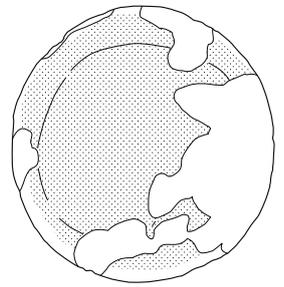
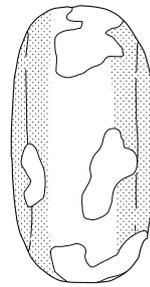
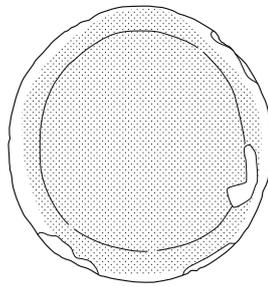
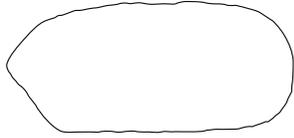


390

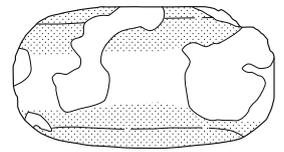
391



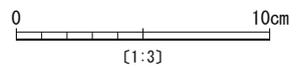
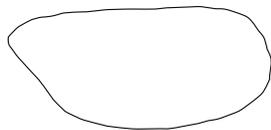
392



394



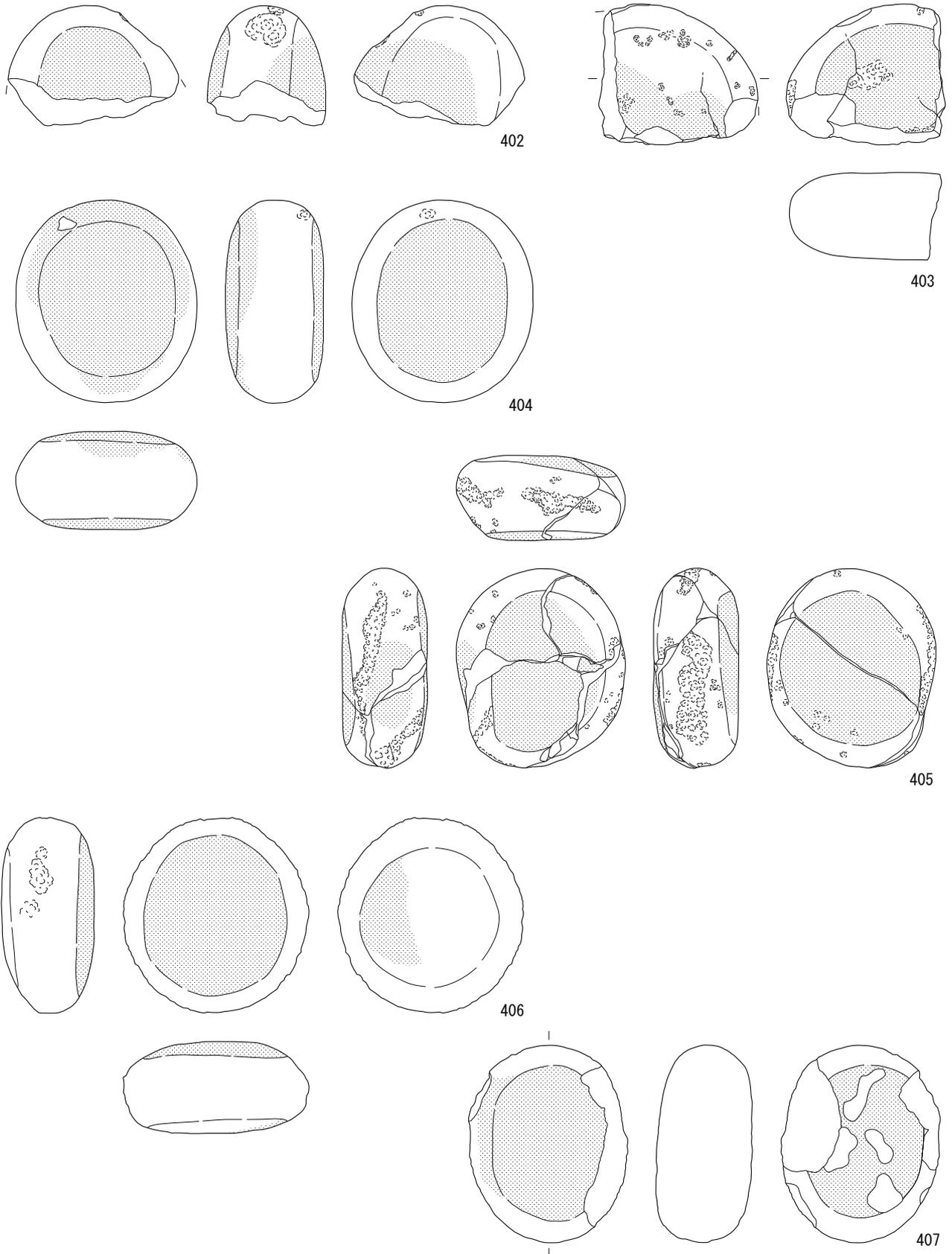
393



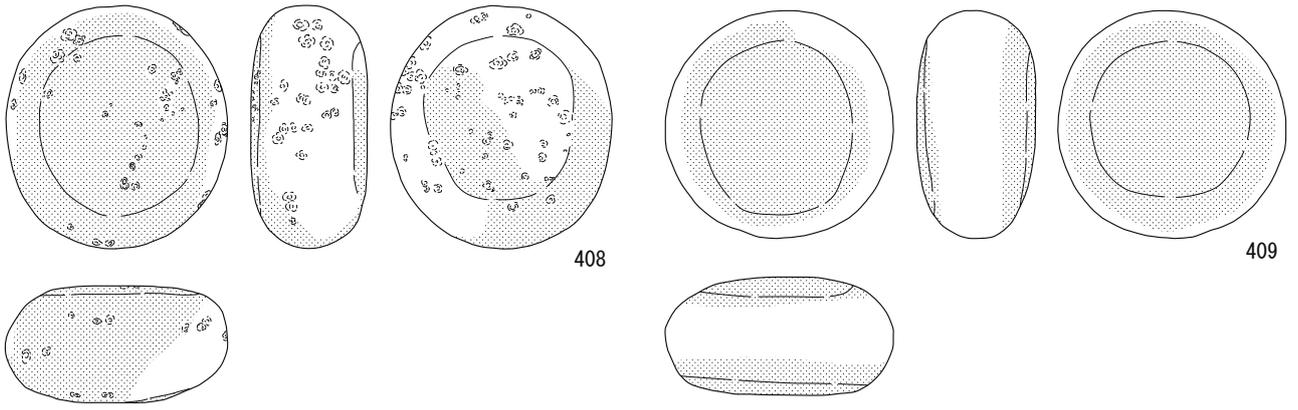
第117図 縄文時代早期 東部出土石器(8)



第 118 図 縄文時代早期 東部出土石器 (9)

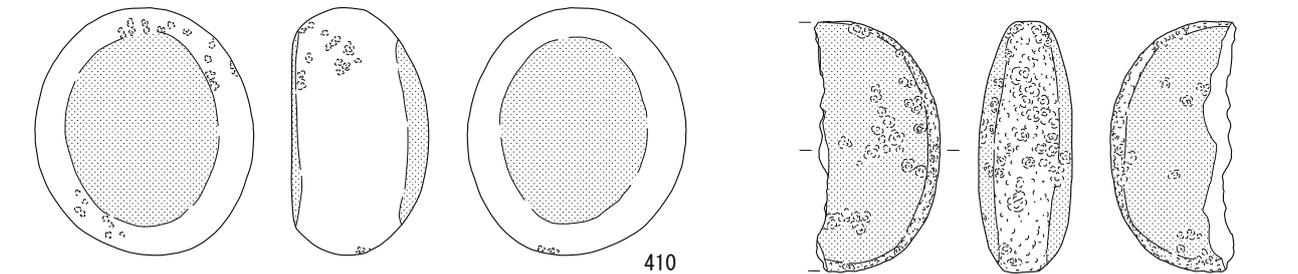


第 119 図 縄文時代早期 東部出土石器 (10)



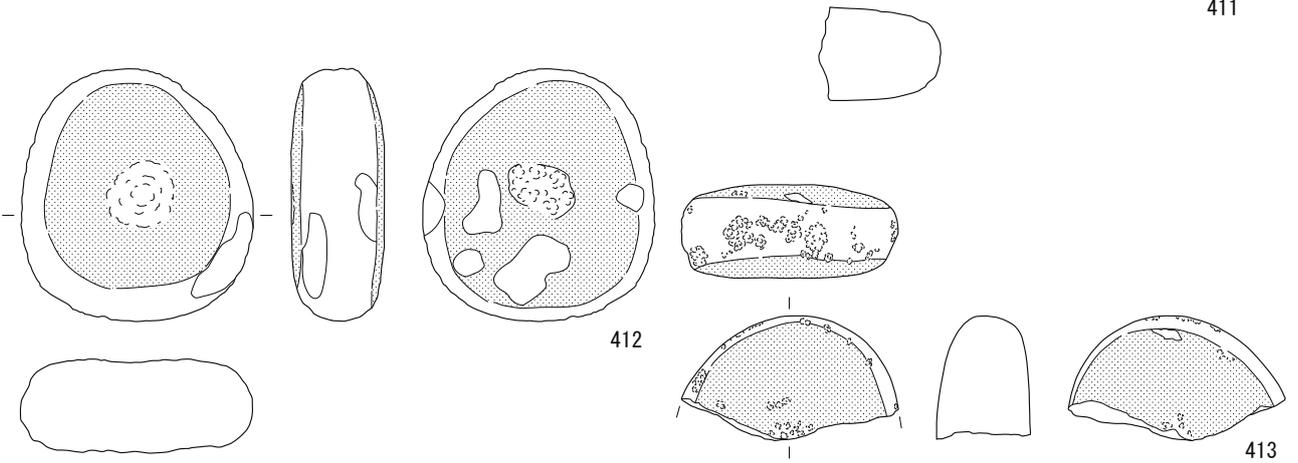
408

409



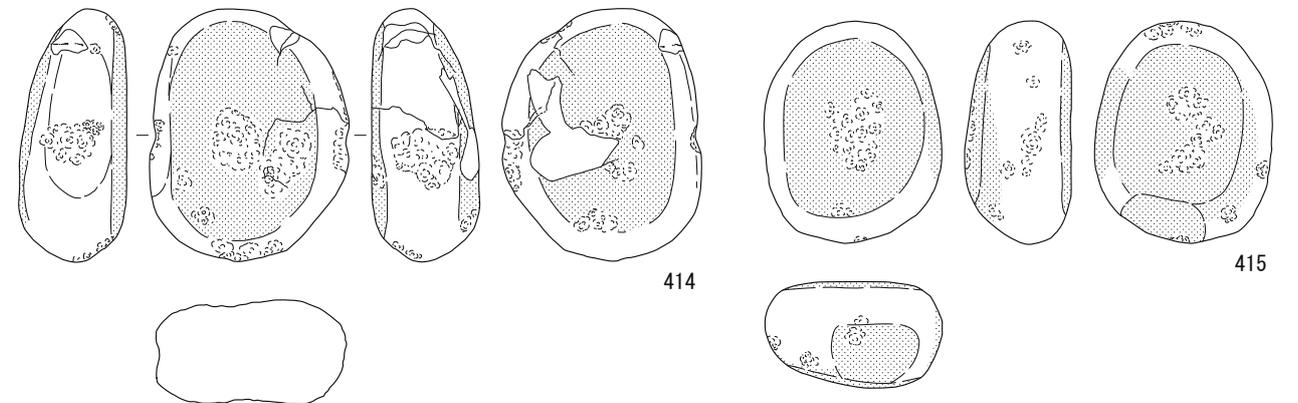
410

411



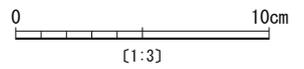
412

413

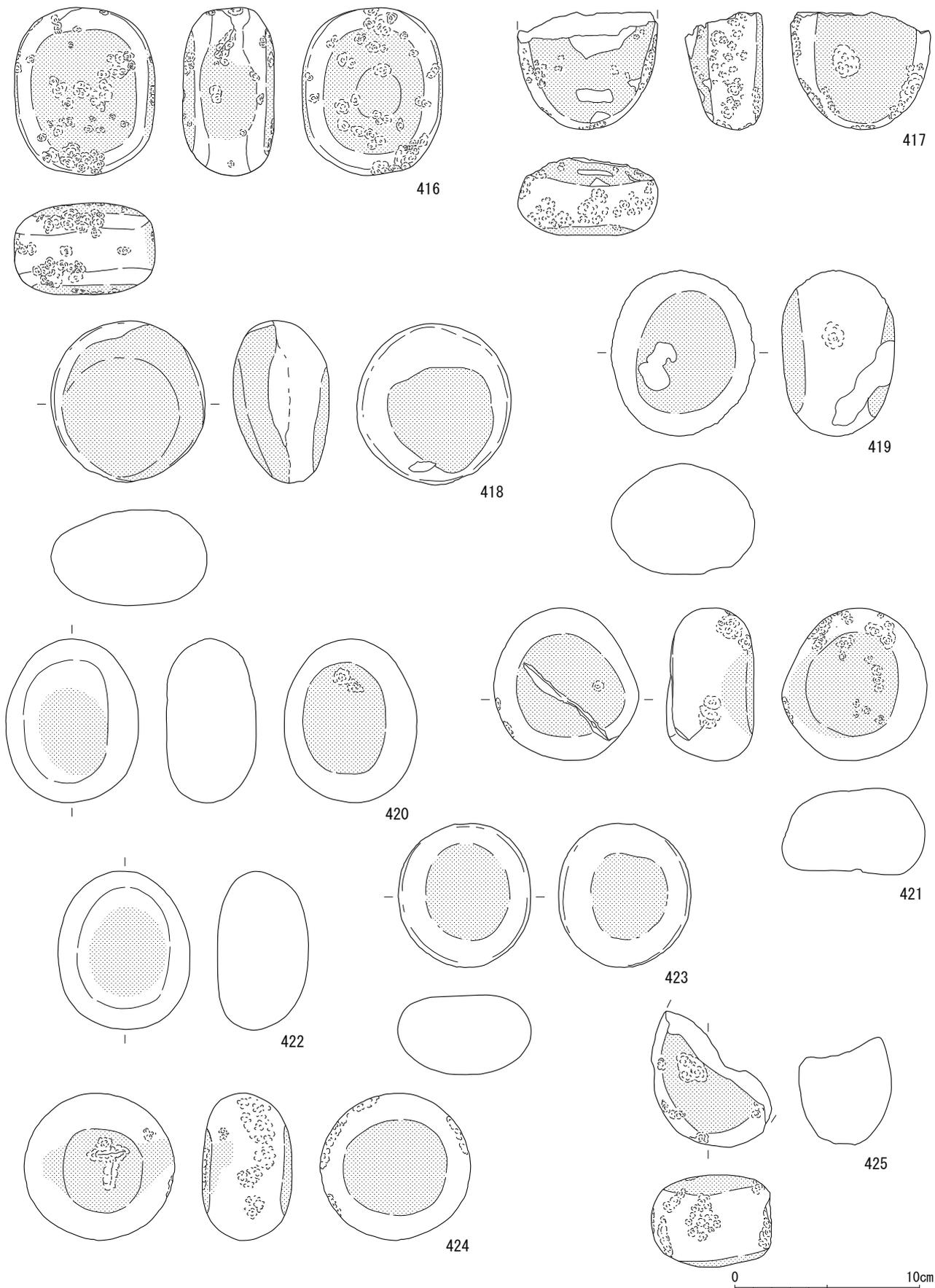


414

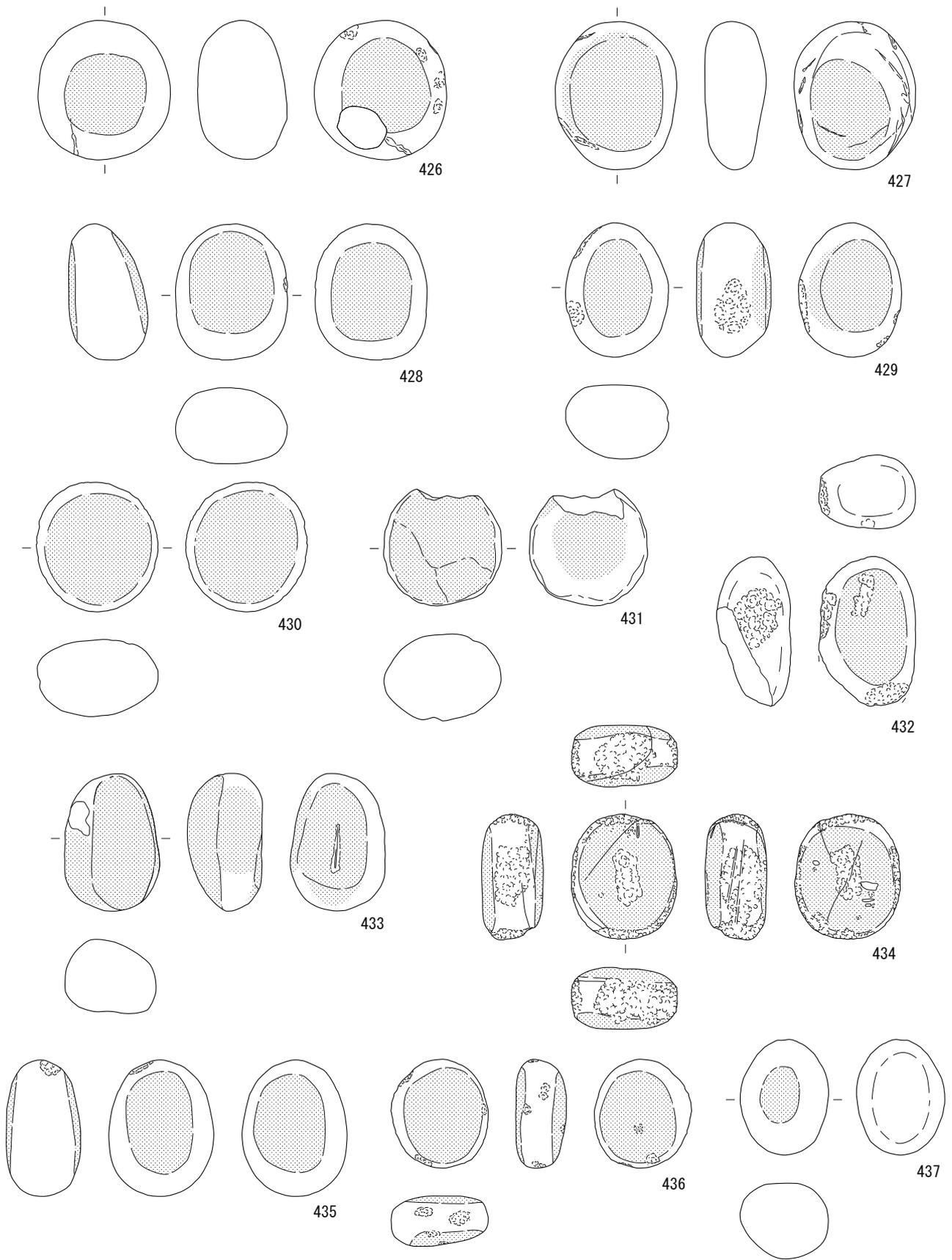
415



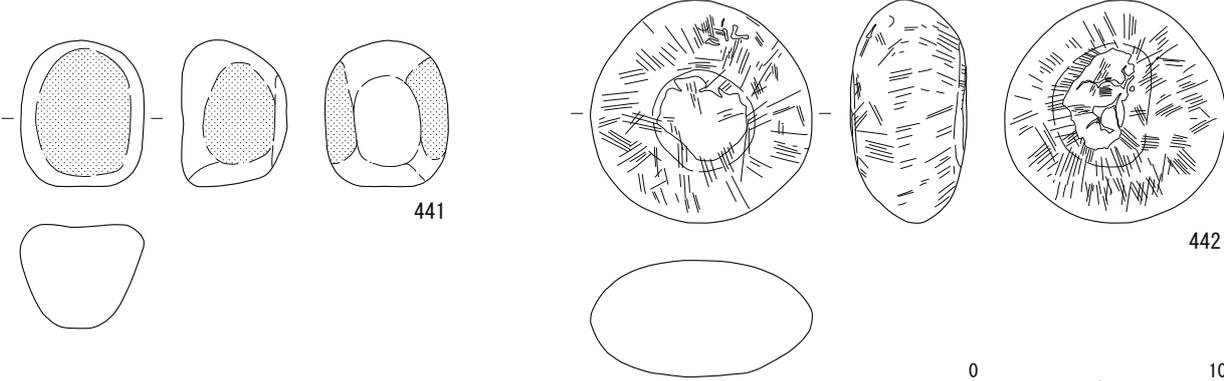
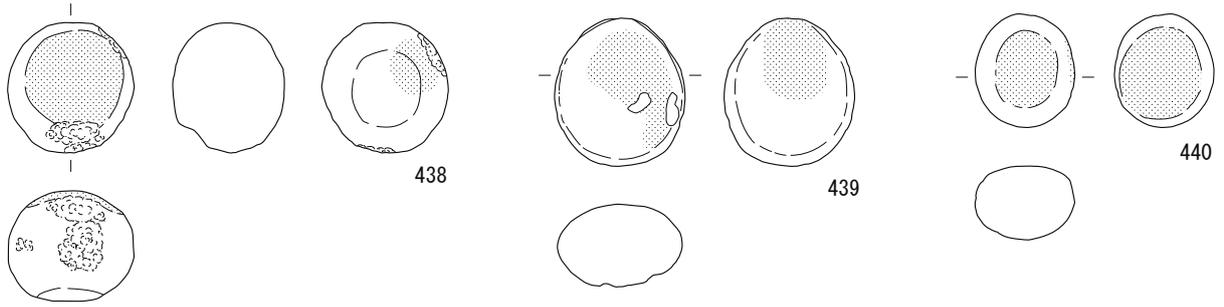
第120図 縄文時代早期 東部出土石器(11)



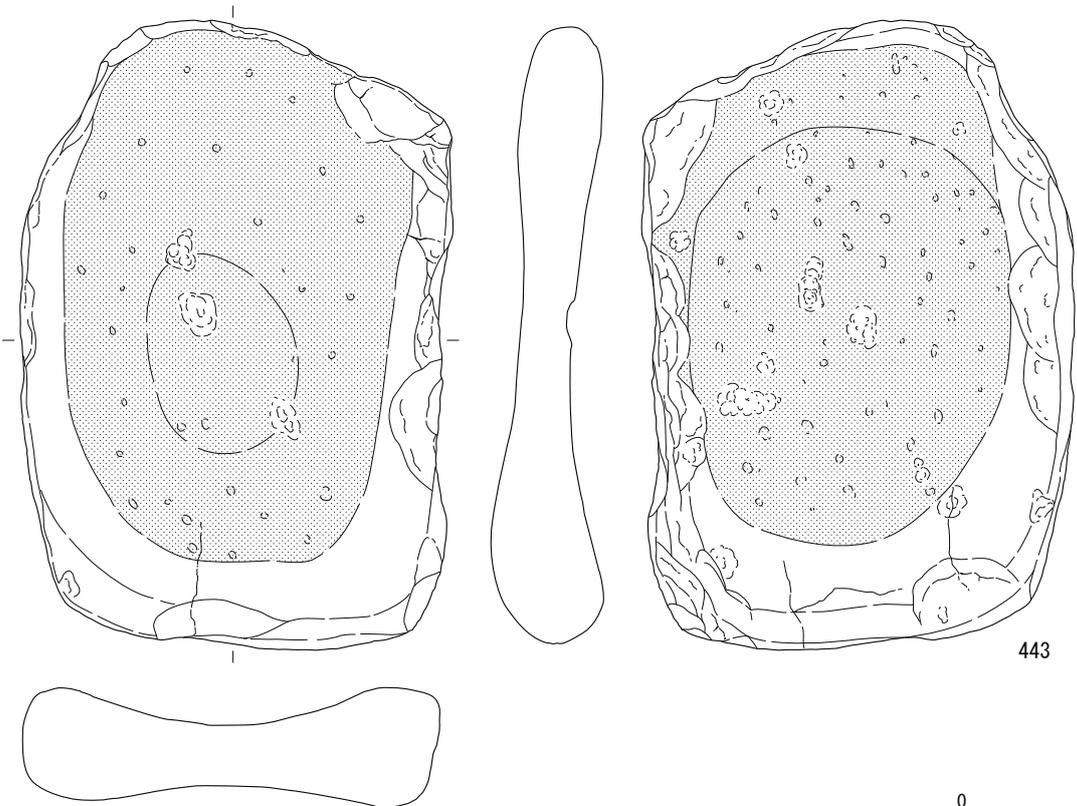
第 121 図 縄文時代早期 東部出土石器 (12)



第 122 図 縄文時代早期 東部出土石器 (13)

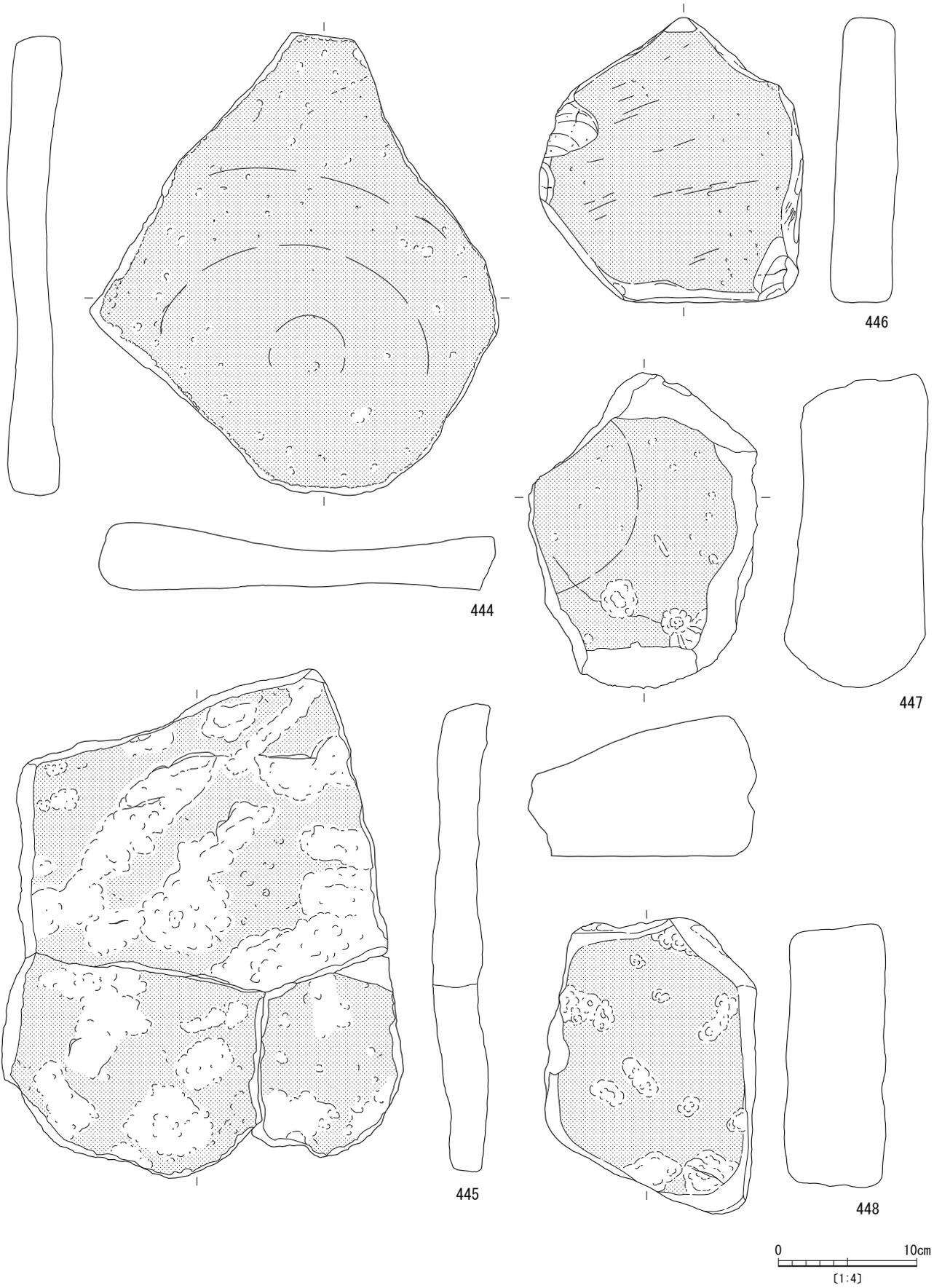


0 10cm
[1:3]

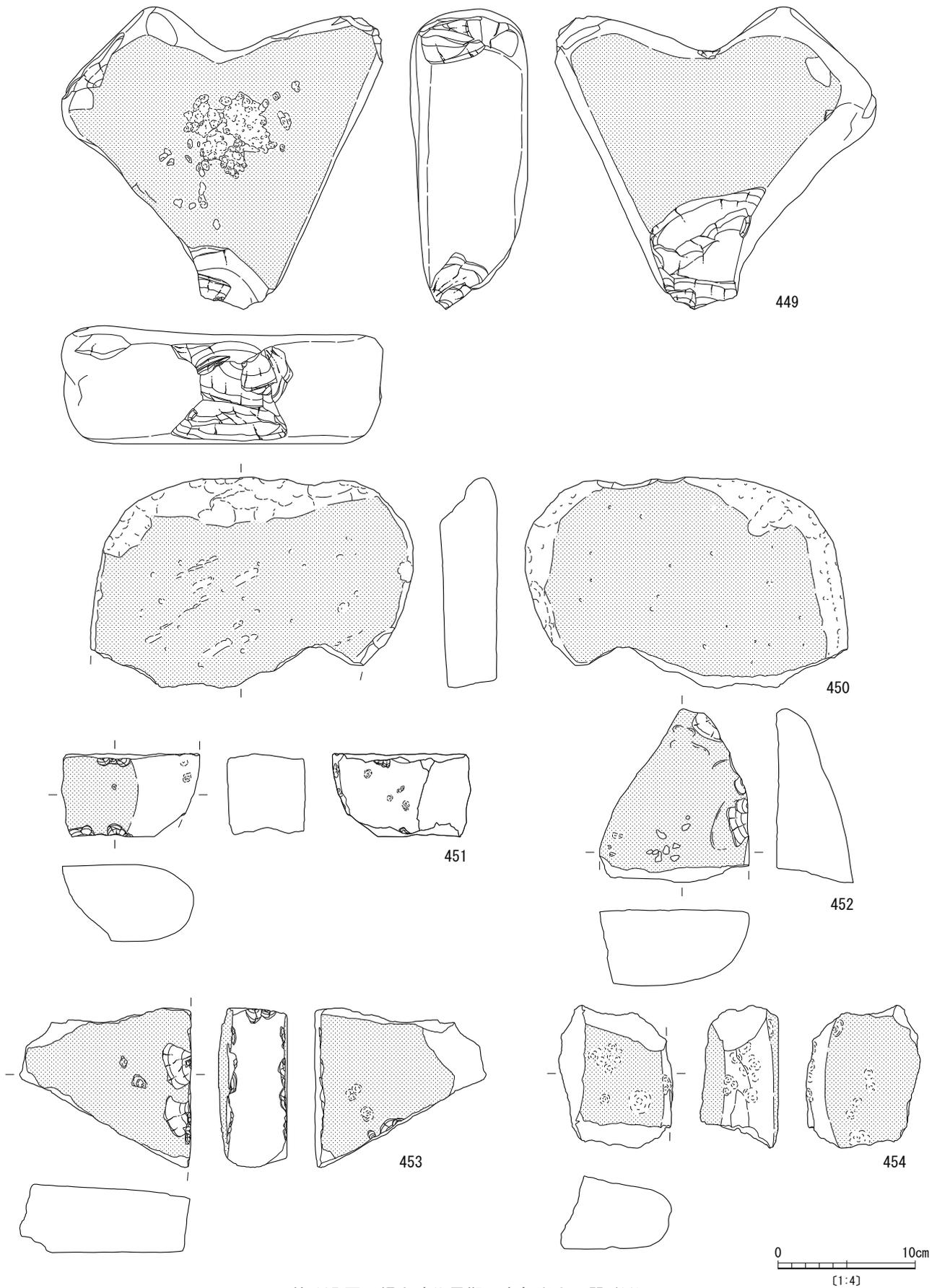


0 10cm
[1:4]

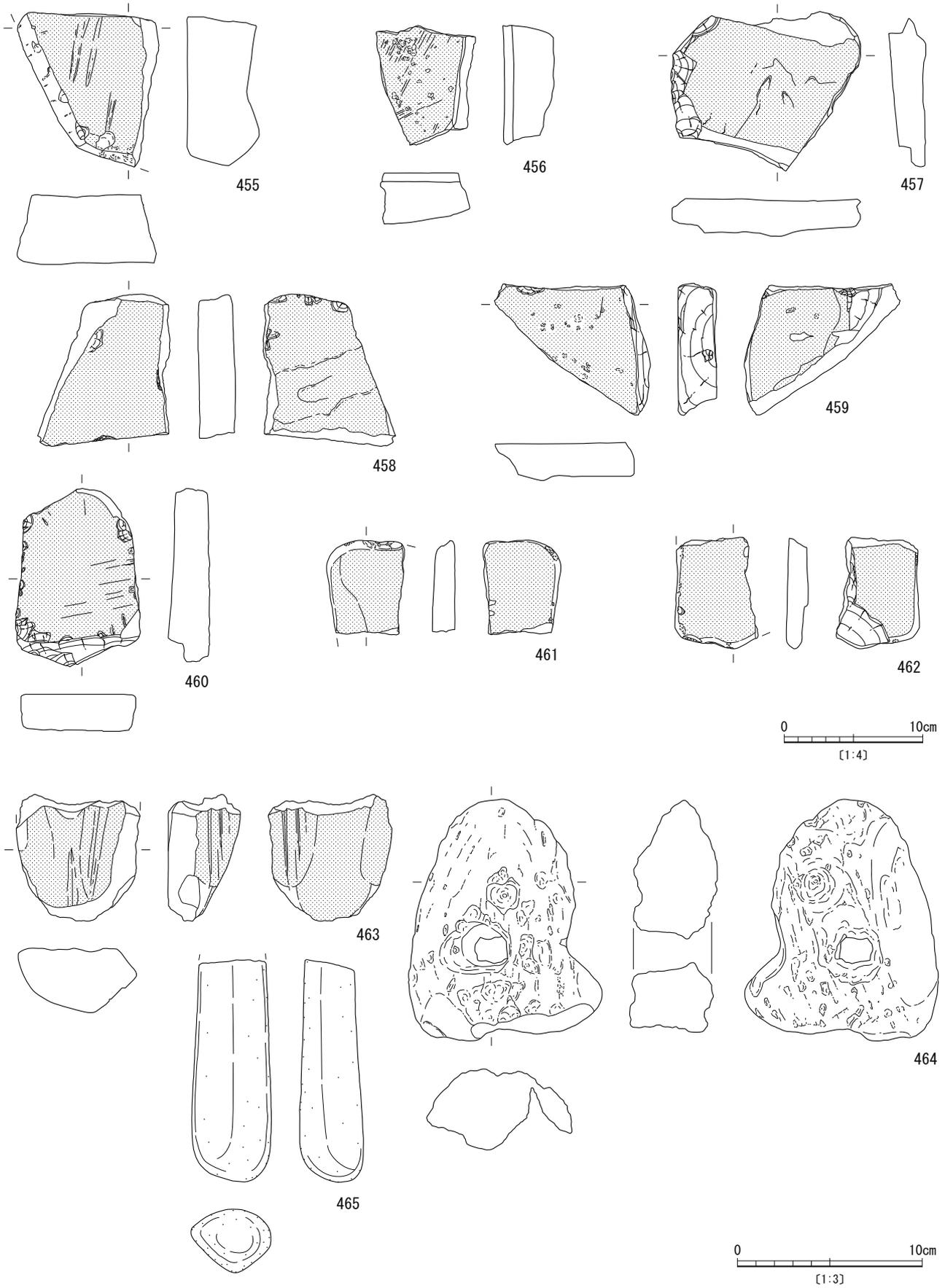
第 123 図 縄文時代早期 東部出土石器 (14)



第 124 図 縄文時代早期 東部出土石器 (15)



第 125 図 縄文時代早期 東部出土石器 (16)



第 126 図 縄文時代早期 東部出土石器 (17)

(3) 調査区中央部 (第 127 図)

D～L－30～40 区を一括する。出土石器類は合計 89 点である。器種別の内訳は、石鏃 10 点、尖頭状石器 1 点、石錐 2 点、石匙 2 点、削器・搔器類 1 点、二次加工剥片 1 点、剥片・碎片 45 点、石核 3 点、打製石斧 3 点、磨製石斧 4 点、敲石 2 点、磨石類 13 点、石皿類 2 点である。

分布状況は、東部に比べて散漫となり、I－33 区を中心とする微高地の東側の斜面に多い。このうち剥片石器類は点在しており、磨製石鏃 1 点 (475) は G－38 区から出土した。磨石類と石皿類は、K－33 区と H－37 区周辺に纏まっている。剥片類では微高地東西のやや急傾斜の地点に多く、石材は約 2/3 を占めるチャートを主体とする。また、黒曜石剥片が 1 点あり、J－34・K－36 区から黒曜石製の石核 2 点 (481・482) が出土している。

石鏃 (第 128 図 466～475)

10 点図化した。打製石鏃の他、磨製石鏃が 1 点含まれる。平基の 1 類と凹基の 2 類に大別される。

466・467 は平基である。466 は部分的な調整により素材剥片の形状を留めている。

468～475 は凹基である。改変度の高いものが多く、468・469 は長幅比 1：1.5 のやや幅広、470～474 はやや縦長に形作られている。

475 は頁岩製の磨製石鏃である。1.5：1 の長幅比にあり、抉りの浅い基部をもつ。中軸に稜線を残した研磨がみられ、両側縁に鋸歯状剥離の刃縁を残置している。

欠損は、467 は先端部を、471・472・474 は脚部を欠き、468 は先端部と脚部を若干欠く。特に 474 には、先端から側縁片方に生じた極状剥離の使用痕が認められる。

石材は多様である。黒曜石製が 4 点 (466・468・471・474)、チャート製が 3 点 (469・470・472)、黒色安山岩製が 2 点 (467・473)、頁岩製が 1 点 (475) である。

尖頭状石器 (第 128 図 476)

1 点図化した。476 は中心部が肥厚した二等辺三角形を呈する。二次加工は素材面を残さず、粗い調整剥離が全面に及び、細部調整は一切みられない。赤色頁岩製。

石錐 (第 128 図 477)

1 点図化した。477 は摘み部から突き出した短い錐先部をもつ。二次加工は素材形状を活かして、錐先側縁に折れ面を取り込み、部分的な調整剥離で摘み部の整形を行っている。錐先部の先端を欠損する。チャート製。

石匙 (第 128 図 478・479)

2 点図化した。478 はチャート製の非常に小さな石匙である。碎片を素材としてその割れ口を背縁としており、二次加工は背縁からの調整、刃部への調整を行い、厚みのある一端をやや抉って摘み部としている。

479 は摘み部に対して斜刃となる形態を呈する。二次加工は表裏からやや粗い調整剥離を行い、細部調整を加えることなく、鋸歯状に比較的整った刃縁が形作られている。背縁に表皮を留めている。黒色安山岩製。

削器・搔器類 (第 129 図 480)

1 点図化した。480 は桑ノ木津留系とみられる黒曜石を用いた小型品であり、台形に整った平面形を呈する。二次加工は素材の背腹両面から全縁に施され、特に腹面からの調整剥離を急斜度に行う。鈍い刃縁をもつ。

石核 (第 129 図 481・482)

2 点図化した。481・482 は桑ノ木津留系とみられる黒曜石製の石核で、打面転移を繰り返して極限まで小片を剥離した不整形を呈する残核である。上位打面に平らかな表皮を留める。

打製石斧 (第 129 図 483)

1 点図化した。483 は胴部から破損した欠損品である。加工途上の未製品である可能性があり、やや不整形な形状を呈して、刃部か、基部側であるのか不明である。ホルンフェルス製。

磨製石斧 (第 129 図 484～486)

3 点図化した。484 は比較的小型のもので、刃部と基部が丸みを帯びた短冊形を呈する。加工は刃部を主として表裏に研磨を施し、研ぎ残した周縁部に粗い調整剥離痕と敲打調整痕を留めている。ホルンフェルス製。

485 も 484 と似通った形態のものであるが、やや先細りの刃部をもち、主に胴部から基部を欠損している。研磨は片面に施されており、先行する調整剥離痕と敲打調整痕を留めている。ホルンフェルス製。

486 は薄身に形作られた器体の基部側の破片である。板状を呈して、表裏の研磨はやや弱く、側縁及び基部末端に面的な研磨を施している。頁岩製。

敲石 (第 129 図 487・488)

2 点図化した。487 は周縁調整によって形作られており、下縁に細長く敲打作業面を有する。また、敲打面に接する右側縁の一部に研磨面を留めており、おそらくは破損した刃部磨製石斧を転用したものとみられる。

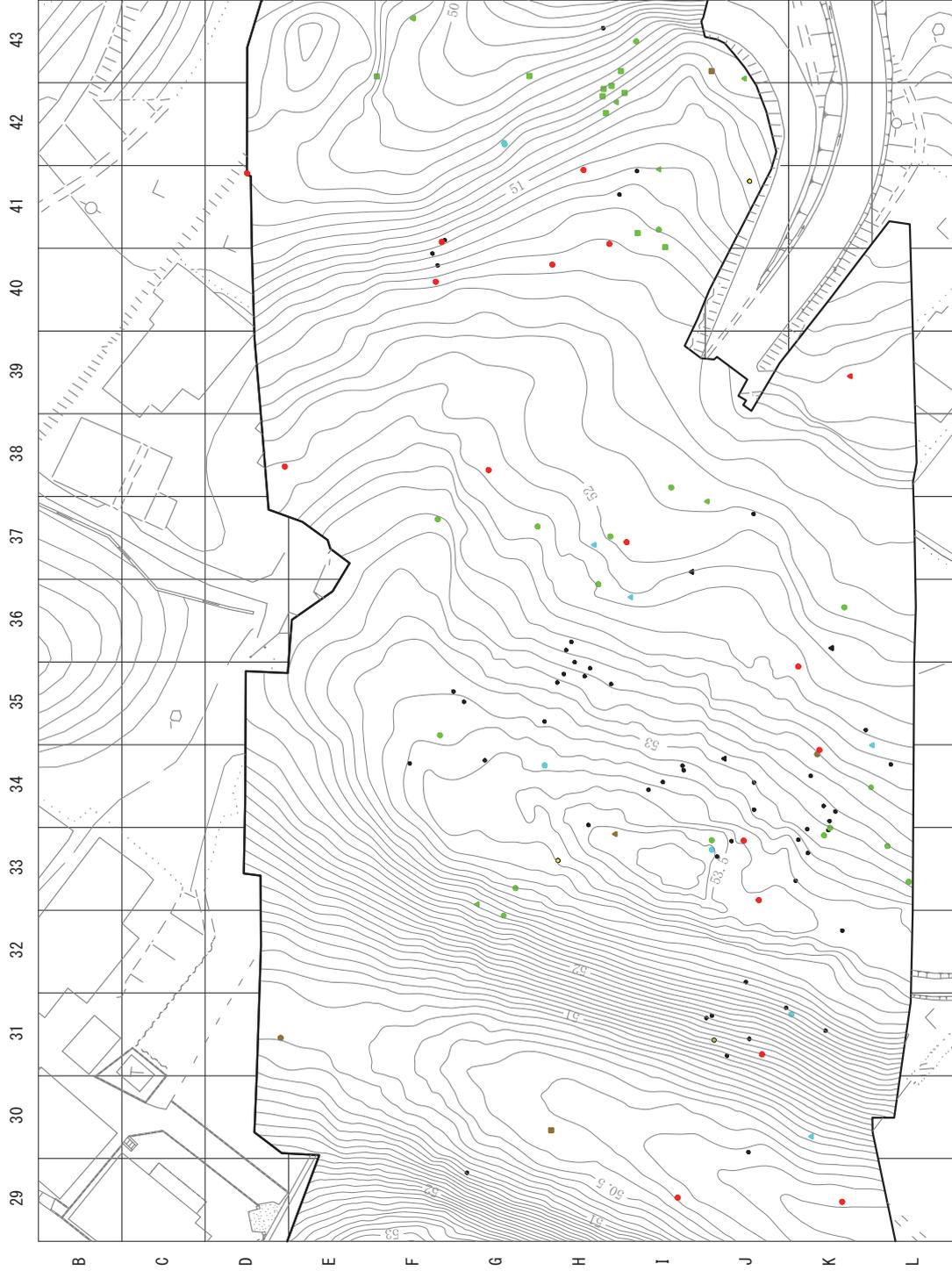
488 は樽形を呈するとみられる欠損品である。丸みを帯びた器体の末端から側縁にかけて、滑らかな敲打面が形成されており、表面にも弱い研磨がうかがわれる。

石材は 487・488 のどちらもホルンフェルス製である。

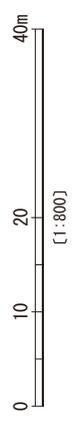
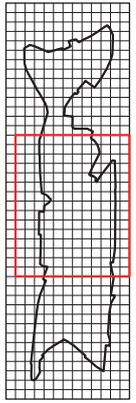
磨石類 (第 130・131 図 489～498)

10 点図化した。大型の 497 を除き、径 7～10 cm の中～小型品である。1 類は 492・493・496 の 3 点で、494 は磨りが全周に及ぶ。その他は 2 類で、496・498 は石鹼形を呈しており、498 の右側面は著しい敲打により作業面が後退している。これらの内、半数の 5 点に被熱赤化がみられている (489・493～495・497)。

石材は、安山岩 (6 点) が多く、花崗岩・花崗閃緑岩

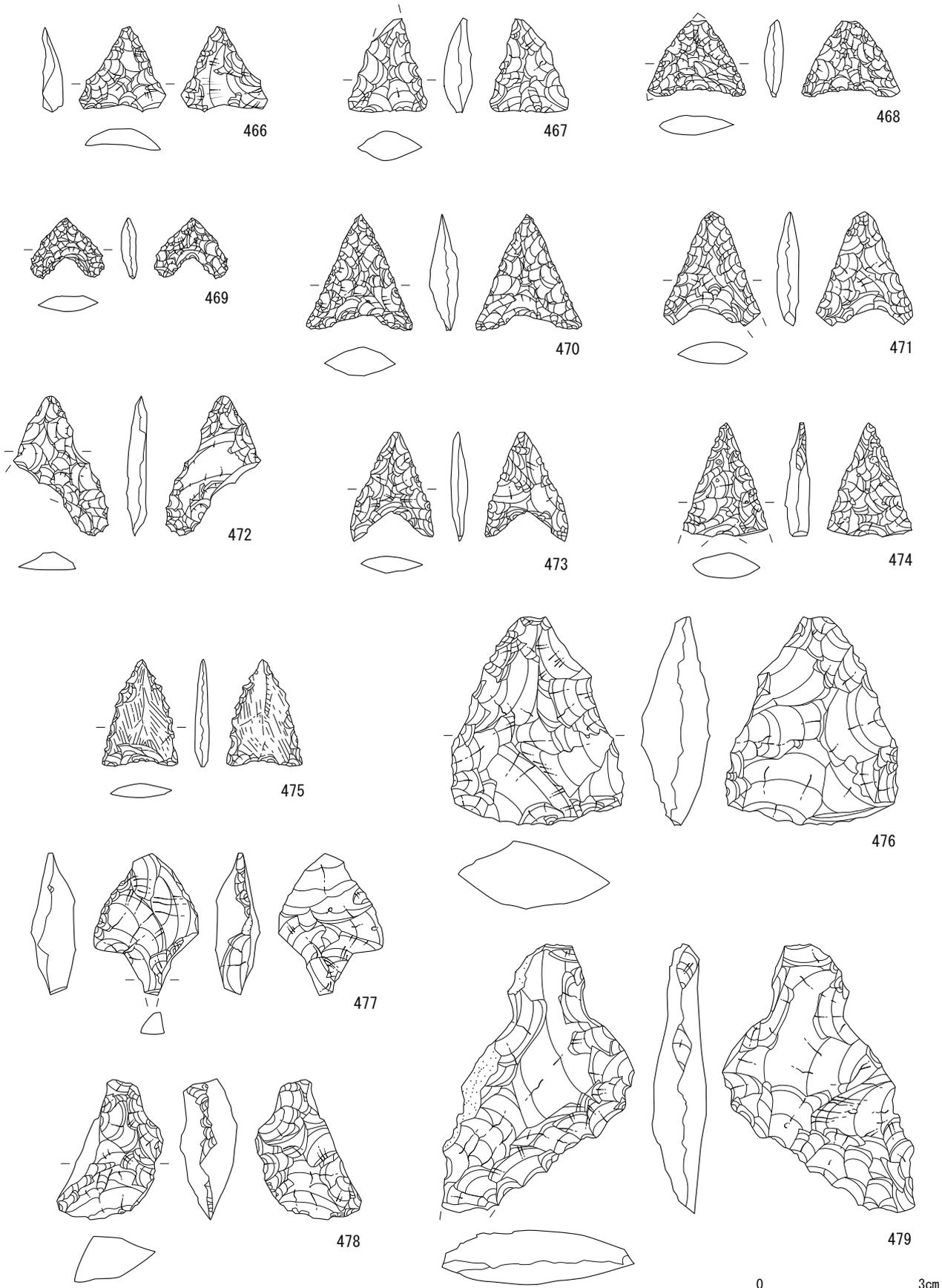


- 凡例—
- 石鏃
 - ▲ 尖頭狀石器
 - 石錐
 - 石匙
 - ▲ 削器・搔器類
 - 二次加工剝片
 - ▲ 打製石斧
 - ▲ 磨製石斧
 - 磨石・敲石類
 - ▲ 石皿類
 - 砥石
 - 剝片・碎片
 - ▲ 石核

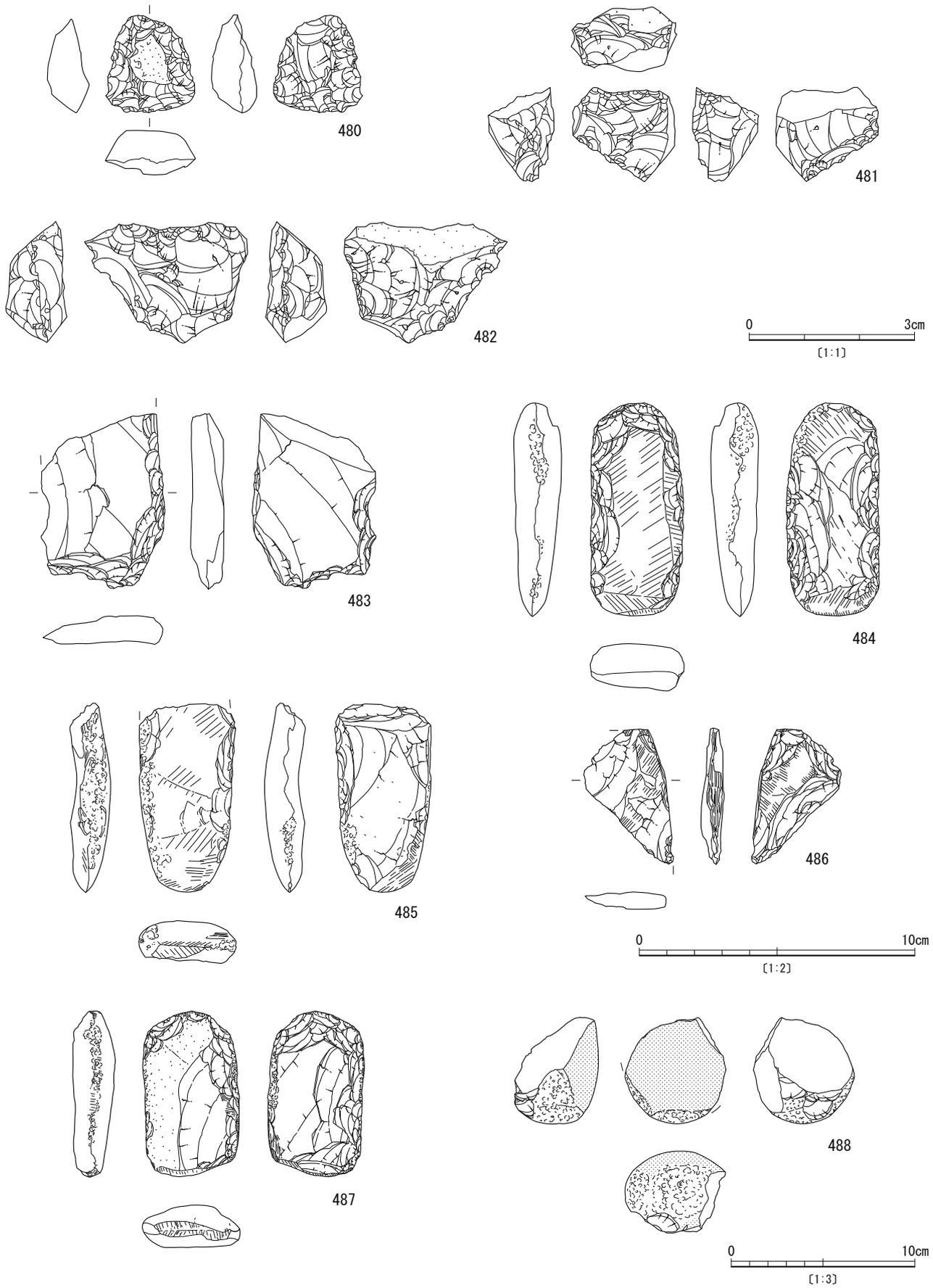


第 127 図 縄文時代早期 中央部出土石器分布図

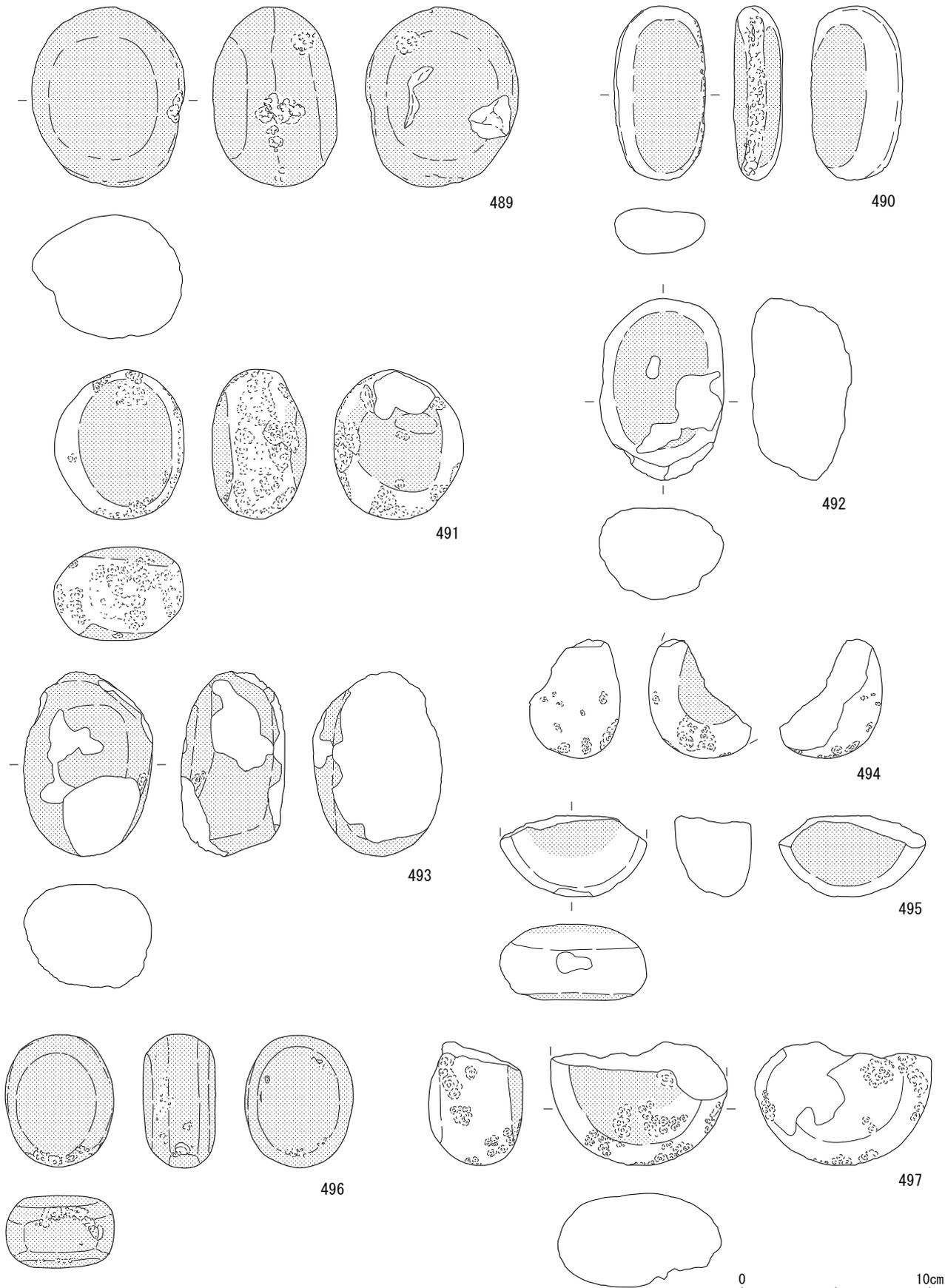
等高線VI層



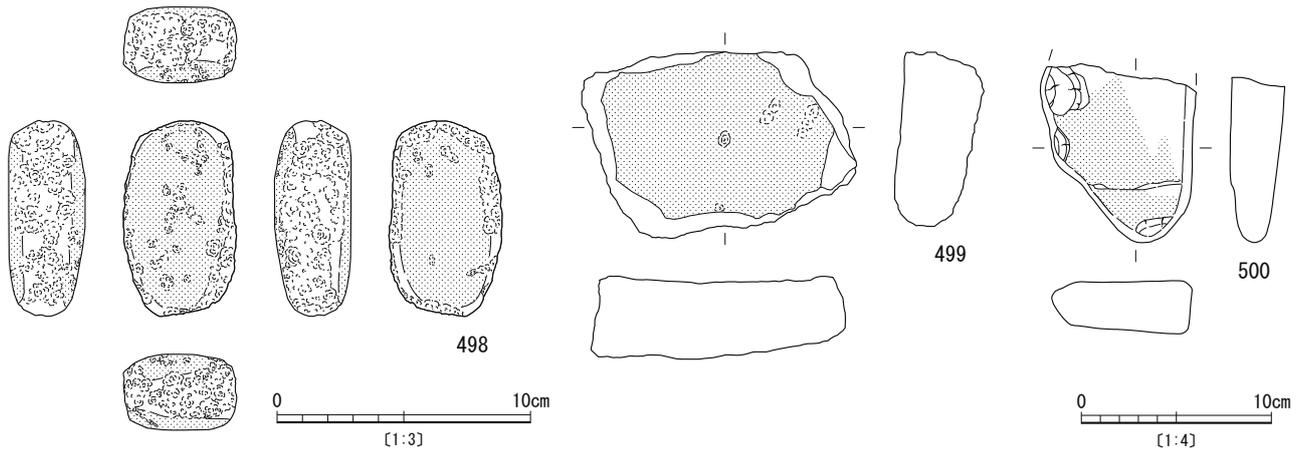
第128図 縄文時代早期 中央部出土石器(1)



第 129 図 縄文時代早期 中央部出土石器 (2)



第130図 縄文時代早期 中央部出土石器(3)



第131図 縄文時代早期 中央部出土石器(4)

(2点), 砂岩・玄武岩(各1点)であり, 東部とほぼ同じ石材利用の傾向を示している。

石皿類(第131図499・500)

2点図化した。499は花崗岩, 500は砂岩を用いた扁平石皿片の欠損品である。499は片面を作業面とする。

(4) 調査区西部(第132図)

C～L-19～29区を一括する。出土石器類は合計33点である。器種別の内訳は, 石鏃7点, 尖頭状石器1点, 石錐1点, 二次加工剥片2点, 剥片・碎片10点, 石核4点, 磨製石斧3点, 磨石類3点, 石皿類2点である。

分布状況は, 出土数も少なく散漫であるが, 西側崖線付近の斜面部I～K-19～21区でやや密である。特にI・J-21区には, 姫島産と上牛鼻産の黒曜石製石核4点が分布し, 石核1点(511)の他, 2cmに満たない残核である。また, 石鏃は25～27区の微高地から東側の谷部にかけて偏りなく点在し, I-29区の1点(507)は磨製石鏃である。この一帯では他の器種が希薄である。

石鏃(第133図501～507)

7点図化した。打製石鏃の他, 磨製石鏃が1点含まれ, 類型の基部形状は全て凹基の2類である。

501～503はやや縦長の長幅比にあり, 曲線側縁と挟り込みの浅い基部が形作られている。504～506の3点は長幅比が1.5:1以上となり, 改変度が高く, 東部の350～352同様に脚部に「肩」をもち特徴的である。

507は頁岩製の磨製石鏃であり, 長幅比1.5:1の二等辺三角形に形作られている。二次加工は全面に研磨が施されており, 周縁部では角度をつけて面を違えた整形を行っている。

欠損については, 501・503・505・506が脚部を欠く。特に503の裏面には先端部からの剥離も認められ, 使用による衝撃剥離痕の可能性がある。

石材は多様である。黒色安山岩製が2点(501・505),

黒曜石製が2点(503・504), 玉髓製が1点(502), チャート製が1点(506), 頁岩製が1点(507)である。

尖頭状石器(第133図508)

1点図化した。508は左右非対称に二等辺三角形を呈する。二次加工は素材剥片の背腹両面から行われ, 刃縁の稜線がジグザグとなる粗い調整がみられる。基部末端に平坦な素材面を残置する。黒色安山岩製。

石錐(第133図509)

1点図化した。509は摘み部から先細る短身の左右対称形を呈する。日東系黒曜石の剥片を素材としており, 二次加工は縁辺に折れ面を取り込んで, 部分的に浅い調整剥離が施されている。

二次加工剥片(第133図510)

1点図化した。510は姫島産黒曜石の横長剥片を用いている。その打面側の側縁に幾らかの調整剥離を加えており, 弧状の反対側縁に微小剥離痕が生じている。

石核(第133図511)

1点図化した。511は姫島産黒曜石を用いた石核であり, 特に打面を設けることなく臨機的に不定形な小剥片が剥離された残核である。

磨製石斧(第133図512・513)

2点図化した。512・513は薄身の形状を呈する磨製石斧の刃部側の破片である。刃部は弧を描いて丁寧に研磨されており, 使用によって剥離破損したとみられる。

石材は512がホルンフェルス, 513が頁岩である。

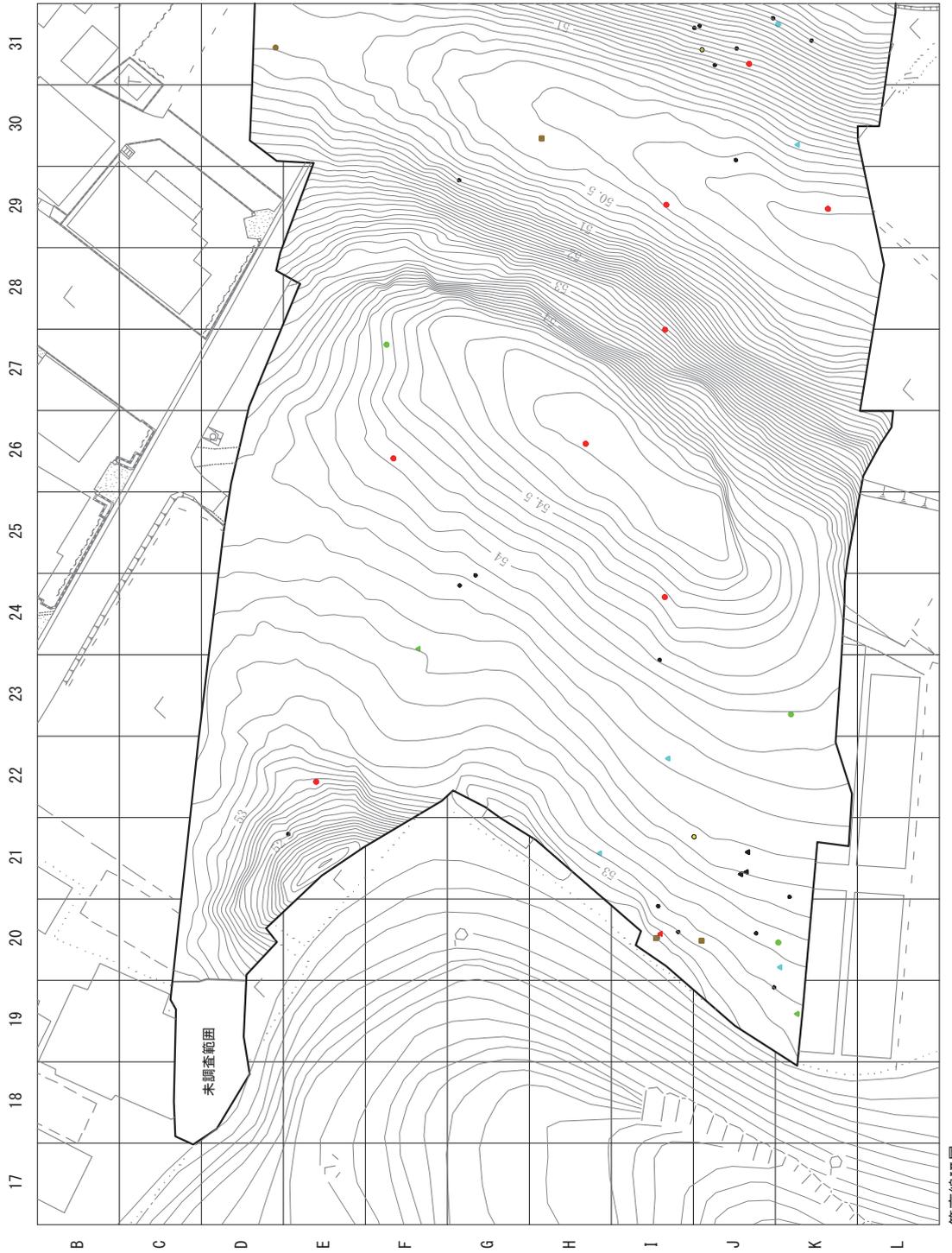
磨石類(第134図514～516)

3点図化した。514は2類に含まれる。安山岩製。515・516は破損する。515は被熱赤化が著しく, 516は比較的大型で, 弱い磨り面を留める。砂岩と安山岩製。

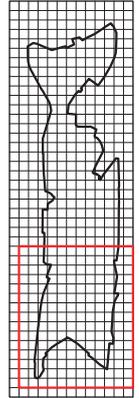
石皿類(第134図517・518)

2点図化した。517は扁平石皿で, 平坦な片面を作業面としている。花崗岩を用いる。

518は略長方形の砂岩礫を用いており, 主に片面を窪めた作業面とするが, 平坦な裏面も磨り面としている。

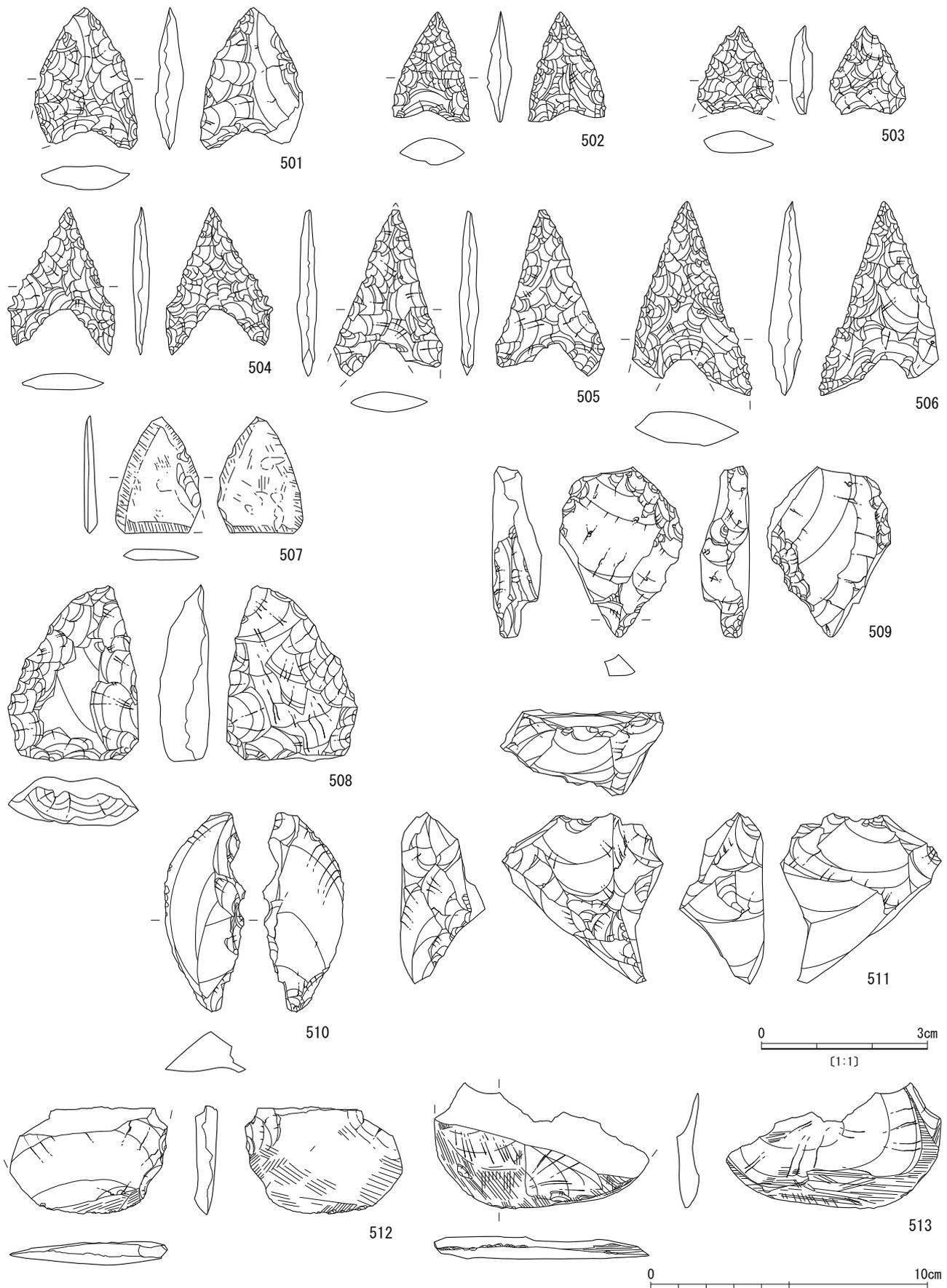


- 凡例—
- 石鏃
 - ▲ 尖頭狀石器
 - 石錐
 - 二次加工剥片
 - ▲ 磨製石斧
 - 磨石・敲石類
 - 石皿類
 - 剥片・碎片
 - ▲ 石核

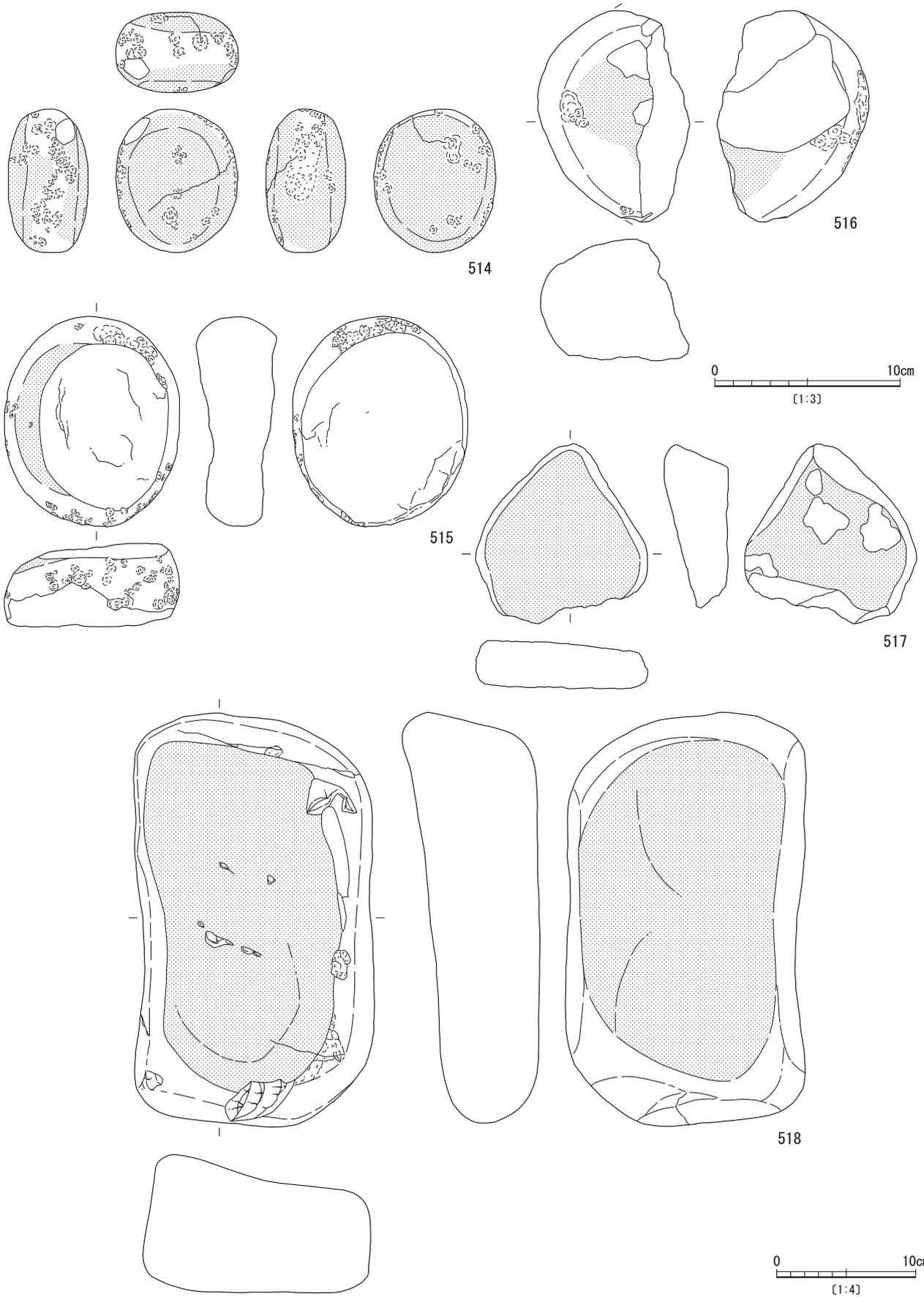


0 10 20 40m
[1:8000]

第 132 図 縄文時代早期 西部出土石器分布図



第133图 縄文時代早期 西部出土石器(1)



第 134 図 縄文時代早期 西部出土石器 (2)

第7表 縄文時代早期出土石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	出土区	層	取上番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
110	331	打製石鏃	I50	V b	10655	1.9	1.7	0.3	1.0	ホルンフェルス	
110	332	打製石鏃	F46	VI	16968	2.0	1.7	0.4	0.8	黒曜石	姫島産
110	333	打製石鏃	D41	V b	17028	2.3	1.8	0.3	0.9	黒曜石	上青木・桑ノ木津留系
110	334	打製石鏃	G49	V b	8481	3.8	2.4	0.5	4.1	黒色安山岩	
110	335	打製石鏃	H49	V b	10666	1.3	1.3	0.2	0.4	黒曜石	上青木・桑ノ木津留系
110	336	打製石鏃	F47	V	17663	1.4	1.3	0.3	0.4	頁岩	
110	337	打製石鏃	F47	V	17662	1.7	1.4	0.3	0.5	黒色安山岩	
110	338	打製石鏃	F48	V a	8309	1.3	1.2	0.2	0.2	黒色安山岩	
110	339	打製石鏃	G51	V b	11313	(2.5)	(2.1)	0.6	2.0	チャート	
110	340	打製石鏃	E47	V	7380	2.0	1.6	0.4	0.9	チャート	
110	341	打製石鏃	G52	V b	12990	2.1	1.7	0.4	0.9	黒色安山岩	
110	342	打製石鏃	J52	V a	11532	(1.7)	(2.0)	0.4	0.8	黒曜石	姫島産
110	343	打製石鏃	F45	V	17768	2.6	1.7	0.5	1.4	黒曜石	姫島産
110	344	打製石鏃	G48	V b	10681	(2.1)	(1.4)	0.3	0.6	黒色安山岩	
110	345	打製石鏃	D52	V b	12924	(2.2)	(1.6)	0.4	1.2	黒色安山岩	
110	346	打製石鏃	G50	V b	11323	(2.0)	(1.4)	0.5	1.3	チャート	
110	347	打製石鏃	E48	V b	13146	(2.1)	(1.4)	0.3	0.6	黒色安山岩	
110	348	打製石鏃	D52	V b	14302	2.4	1.7	0.4	0.9	鉄石英	
110	349	打製石鏃	G49	V b	8484	(2.4)	(1.3)	0.4	0.9	チャート	
111	350	打製石鏃	H41	V b	17281	(3.0)	(2.0)	0.5	1.7	黒曜石	針尾・淀姫系
111	351	打製石鏃	E47	V	7379	2.6	1.8	0.4	1.3	黒色安山岩	
111	352	打製石鏃	F41	V	17859	(3.0)	(1.9)	0.3	1.3	黒曜石	針尾・淀姫系
111	353	打製石鏃	G49	V b	8482	(1.4)	(1.5)	0.4	0.7	黒色安山岩	
111	354	打製石鏃	H41	V b	17277	(1.4)	(1.1)	0.3	0.4	黒曜石	針尾・淀姫系
111	355	打製石鏃	F50	V a	8215	(1.2)	(1.9)	0.4	0.9	黒色安山岩	
111	356	尖頭状石器	E52	V a	12908	(3.0)	(1.8)	0.7	2.9	黒色安山岩	
111	357	石錐	J41	V a	17307	2.7	2.5	1.0	4.4	黒色安山岩	
111	358	異形石器	J52	V a	11576	1.8	1.9	0.2	0.8	チャート	
111	359	石匙	E48	V b	13099	2.9	4.3	0.8	7.7	黒色安山岩	
111	360	石匙	F48	V b	13088	4.9	6.6	0.8	18.1	黒色安山岩	
112	361	削器・搔器類	G46	V	17833	4.7	11.9	1.0	67.4	安山岩	
112	362	削器・搔器類	I54	V b	12996	4.7	6.4	1.3	36.3	砂岩	
112	363	削器・搔器類	E49	V b	13104	3.9	6.6	2.0	37.0	黒色安山岩	
112	364	削器・搔器類	D49	V a	8353	(2.8)	(3.2)	(0.7)	5.2	黒色安山岩	
112	365	削器・搔器類	D50	V a	8355	3.7	3.7	1.2	12.6	黒色安山岩	
113	366	削器・搔器類	D52	V a	12928	2.0	1.8	0.5	1.8	珪質頁岩	
113	367	削器・搔器類	F45	V	17770	3.1	2.4	1.1	8.4	黒色安山岩	
113	368	削器・搔器類	G48	V b	8686	3.1	2.4	1.2	10.0	黒色安山岩	
113	369	削器・搔器類	C51	V b	14424	2.5	2.8	1.1	8.7	珪質頁岩	
113	370	二次加工剥片	J43	V b	17239	3.7	2.4	1.0	9.0	黒曜石	三船産
113	371	二次加工剥片	E50	V a	8422	3.7	2.0	0.3	2.5	黒色安山岩	
113	372	二次加工剥片	G52	V b	14551	4.7	2.2	1.4	11.7	黒曜石	日東・五女木系
113	373	微小剥離痕剥片	D51	V a	14714	5.8	2.7	1.7	14.7	珪質頁岩	
114	374	微小剥離痕剥片	J52	V a	11526	2.8	2.2	0.6	2.4	黒曜石	姫島産
114	375	剥片	I53	V b	14562	5.5	3.4	1.1	18.5	珪質頁岩	
114	376	石核	F44	V	17800	3.8	4.6	1.8	28.9	黒色安山岩	
114	377	石核	I53	VI	14565	7.2	10.6	5.0	327.6	チャート	
114	378	石核	D52	V b	12926	6.0	7.0	3.9	87.2	珪質頁岩	
115	379	打製石斧	J52	V b	11580	13.8	11.0	1.3	238.3	頁岩	
115	380	打製石斧	G42	V b	17309	12.1	7.9	2.1	241.3	ホルンフェルス	
115	381	打製石斧	C50	V b	14742	6.8	4.0	1.4	38.1	ホルンフェルス	
115	382	打製石斧	G42	V b	17308	10.3	5.8	2.2	151.6	ホルンフェルス	
115	383	打製石斧	I52	V b	14560	12.1	6.8	2.2	238.9	ホルンフェルス	
116	384	打製石斧	F48	V b	13084	10.2	10.2	3.7	408.3	砂岩	
116	385	打製石斧	D49	V b	14735	16.2	6.1	2.0	195.5	ホルンフェルス	
116	386	磨製石斧	C52	V b	14740	6.0	3.7	1.2	35.4	安山岩	
116	387	磨製石斧	L54	V b	11990	10.6	5.5	2.4	177.4	ホルンフェルス	
116	388	磨製石斧	F46	V	17704	(5.8)	6.1	2.4	125.2	砂岩	
116	389	石錘状石器	F44	V	17798	5.6	3.1	1.1	31.4	砂岩	
117	390	敲石	G48	V b	11032	10.2	5.8	3.1	282.3	砂岩	
117	391	磨石類	I41	V b	17299	13.1	11.5	4.7	1,035.6	砂岩	
117	392	磨石類	F46	VI	17708	11.9	11.3	5.2	979.1	安山岩	

挿図 番号	掲載 番号	器種	出土区	層	取上番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
117	393	磨石類	H49	V b	10662	11.0	10.3	5.6	962.2	花崗岩	
117	394	磨石類	E52	V b	12899	12.0	10.5	4.9	879.8	安山岩	
118	395	磨石類	F44	VI	17796	11.8	9.1	5.0	839.5	花崗閃緑岩	
118	396	磨石類	D49	V b	14862	10.8	7.7	5.3	627.8	ホルンフェルス	
118	397	磨石類	D52	V b	12923	(10.1)	(10.1)	(6.7)	980.3	安山岩	
118	398	磨石類	H49	V b	10664	(6.1)	(10.0)	(7.9)	542.1	安山岩	
118	399	磨石類	G45	V	17537	12.0	6.6	7.3	681.1	安山岩	
118	400	磨石類	E50	V b	13106	10.6	8.4	7.1	905.8	ホルンフェルス	
118	401	磨石類	D48	V b	14883a	(5.9)	(8.8)	(6.3)	338.9	安山岩	
119	402	磨石類	D48	V b	14883b	(6.4)	(9.1)	(6.3)	411.9	安山岩	
119	403	磨石類	E44	V b	17022	(7.5)	(8.4)	(4.7)	404.8	砂岩	
119	404	磨石類	J53	V b	14564	10.8	9.6	5.2	845.0	花崗岩	
119	405	磨石類	H50	V b	10657	10.6	9.0	4.5	594.8	砂岩	
119	406	磨石類	E52	V a	12907	10.4	9.9	4.9	718.2	花崗閃緑岩	
119	407	磨石類	F47	V	17668	10.5	(8.4)	5.1	699.3	花崗閃緑岩	
120	408	磨石類	F46	V	17707	9.6	8.7	4.6	590.1	花崗岩	
120	409	磨石類	D52	V a	12921	9.0	9.0	4.7	553.8	砂岩	
120	410	磨石類	J51	V a	11344	9.8	8.7	5.4	664.6	砂岩	
120	411	磨石類	G51	V b	12414	9.9	(4.9)	(3.7)	248.8	安山岩	
120	412	磨石類	H49	V b	10665	10.0	9.1	3.7	540.6	花崗閃緑岩	
120	413	磨石類	F47	V	17670	(4.9)	(8.5)	(3.7)	202.0	砂岩	
120	414	磨石類	G45	V	17528	10.0	8.0	4.0	329.3	透閃石岩	
120	415	磨石類	F46	V	17702	8.8	7.0	4.2	390.8	花崗閃緑岩	
121	416	磨石類	I43	V b	17237	9.1	7.6	5.0	525.4	砂岩	
121	417	磨石類	D50	V b	14878	(6.4)	(7.6)	(4.2)	227.1	安山岩	
121	418	磨石類	G49	V b	10685	8.8	8.3	5.2	538.3	安山岩	
121	419	磨石類	F47	V	17851	9.1	7.8	6.1	546.8	花崗閃緑岩	
121	420	磨石類	G50	V b	11338	8.9	7.2	4.9	483.0	安山岩	
121	421	磨石類	F45	V	17771	8.3	7.8	4.7	445.1	花崗閃緑岩	
121	422	磨石類	G51	V b	11336	8.6	7.1	4.9	418.3	安山岩	
121	423	磨石類	E50	V b	13035	7.9	7.2	4.3	325.7	安山岩	
121	424	磨石類	G49	V b	13277	8.0	8.2	4.9	430.7	安山岩	
121	425	磨石類	G48	V b	10679	(7.4)	(6.5)	(5.0)	271.7	安山岩	
122	426	磨石類	F52	V a	12896	7.5	7.1	4.8	386.3	安山岩	
122	427	磨石類	F46	V	17706	8.0	6.5	3.3	246.6	砂岩	
122	428	磨石類	H48	V b	10674	7.5	6.0	4.2	253.7	安山岩	
122	429	磨石類	G48	V b	10680	7.3	5.6	4.0	236.7	花崗岩	
122	430	磨石類	E48	V b	13100	7.1	6.6	4.2	237.6	安山岩	
122	431	磨石類	H50	V b	10659	(6.4)	6.4	4.7	220.0	玄武岩	
122	432	磨石類	G49	V b	11339	(8.1)	(5.2)	(4.0)	206.2	安山岩	
122	433	磨石類	F45	V	17815	7.4	5.1	4.0	210.3	花崗閃緑岩	
122	434	磨石類	I52	V b	14561	6.8	5.7	3.3	198.5	砂岩	
122	435	磨石類	D49	V b	14882	7.4	5.7	4.0	244.7	安山岩	
122	436	磨石類	D51	V b	13036	5.9	5.2	2.7	105.1	安山岩	
122	437	磨石類	D49	V b	13114	6.3	4.8	4.2	176.6	安山岩	
123	438	磨石類	E50	V b	13105	5.2	5.0	4.4	152.0	安山岩	
123	439	磨石類	F45	VI	17765	5.9	5.2	3.3	128.9	安山岩	
123	440	磨石類	D51	V b	13016	4.5	4.0	3.0	75.7	安山岩	
123	441	磨石類	F45	V	17816	5.8	4.8	4.1	175.0	花崗閃緑岩	
123	442	磨石類	J51	V b	11346	8.8	8.8	4.6	540.3	凝灰岩	
123	443	石皿類	G49	V b	11034	33.5	22.9	6.4	5,718.6	安山岩	
124	444	石皿類	F47	V	17850	33.2	29.3	4.9	5,331.6	花崗岩	
124	445	石皿類	F47	V	17852	37.2	29.1	3.8	6,073.9	花崗岩	
124	446	石皿類	G49	V b	11033	20.8	19.2	4.5	3,172.7	砂岩	
124	447	石皿類	G50	VI	10660	(23.0)	(16.5)	11.2	5,447.0	花崗岩	
124	448	石皿類	E51	V b	13147	21.5	15.4	7.4	4,116.7	花崗岩	
125	449	石皿類	F44	VI	17797	22.2	23.4	8.6	5,212.8	砂岩	
125	450	石皿類	J53	V	7694	(15.5)	23.6	4.2	2,599.4	花崗岩	
125	451	石皿類	F45	VI	17772	(6.1)	(10.1)	(5.7)	516.8	砂岩	
125	452	石皿類	F43	V	17878	(12.7)	(10.9)	(5.6)	822.3	砂岩	
125	453	石皿類	K52	V a	11981	(11.7)	(12.5)	(5.0)	787.8	安山岩	
125	454	石皿類	I49	V b	8518	(10.5)	(8.4)	(5.7)	608.1	花崗岩	
126	455	石皿類	F43	V	17877	(11.2)	(10.2)	(5.2)	793.9	砂岩	

挿図 番号	掲載 番号	器種	出土区	層	取上番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
126	456	石皿類	J43, I41	V a・b	17241・17301	(8.7)	(7.1)	(3.7)	274.5	砂岩	
126	457	石皿類	G45	V	17529	(11.6)	(13.6)	(2.7)	485.5	砂岩	
126	458	石皿類	I52	V a	12752	(11.1)	(9.6)	(2.7)	412.5	砂岩	
126	459	石皿類	H42	V b	17293	(9.5)	(11.2)	(2.8)	307.5	砂岩	
126	460	石皿類	F44	V	17799	(12.9)	(9.0)	(3.0)	519.2	砂岩	
126	461	石皿類	I50	V b	10656	(6.8)	(5.6)	(1.6)	103.6	砂岩	
126	462	石皿類	I50	V b	8525	(8.1)	(6.0)	(1.6)	125.1	砂岩	
126	463	砥石	F43	V	17876	(6.9)	(6.7)	(3.9)	192.8	花崗閃緑岩	
126	464	軽石製品	H48	V b	10676	13.2	10.5	4.6	123.3	軽石	
126	465	棒状礫	H52	V b	14554	(12.1)	4.3	3.4	243.9	砂岩	
128	466	打製石鏃	D38	V b	16504	1.5	1.5	0.3	0.4	黒曜石	針尾・淀姫系
128	467	打製石鏃	F40	V	17862	(1.7)	1.4	0.5	0.8	黒色安山岩	
128	468	打製石鏃	H37	V	40603	(1.4)	(1.8)	0.3	0.7	黒曜石	針尾・淀姫系
128	469	打製石鏃	J33	V	37715	1.1	1.3	0.3	0.3	チャート	
128	470	打製石鏃	J33	V	37716	2.1	1.9	0.5	1.1	チャート	
128	471	打製石鏃	K35	VI	34291	(2.0)	(1.7)	0.4	1.0	黒曜石	姫島産
128	472	打製石鏃	J31	VI	32455	(2.5)	(1.7)	(0.3)	1.0	チャート	
128	473	打製石鏃	H40	V b	17276	1.9	1.5	0.3	0.6	黒色安山岩	
128	474	打製石鏃	K34	VI	34327	(2.0)	(1.5)	0.4	1.0	黒曜石	日東・五女木系
128	475	磨製石鏃	G38	VII b	219	1.9	1.3	0.3	0.6	頁岩	
128	476	尖頭状石器	K39	VI a	22962	3.7	3.0	1.2	11.5	赤色頁岩	
128	477	石錐	J31	V	32450	(2.5)	(1.8)	(0.8)	2.5	チャート	
128	478	石匙	K34	VI	34328	2.5	1.9	1.0	3.5	チャート	
128	479	石匙	E31	V a	17102	(4.8)	(3.4)	0.9	10.7	黒色安山岩	
129	480	削器・搔器類	H33	VI	40595	1.8	1.6	0.8	2.3	黒曜石	上青木・桑ノ木津留系
129	481	石核	J34	V	40712	1.7	1.9	1.2	3.3	黒曜石	上青木・桑ノ木津留系
129	482	石核	K36	V	33652	2.2	3.0	1.1	5.4	黒曜石	上青木・桑ノ木津留系
129	483	打製石斧	H34	VI	39170	(6.4)	(4.5)	(1.2)	45.3	ホルンフェルス	
129	484	磨製石斧	H37	V	40600	7.8	3.4	1.8	65.6	ホルンフェルス	
129	485	磨製石斧	K34	VI	34311	(6.8)	(3.5)	(1.6)	48.8	ホルンフェルス	
129	486	磨製石斧	I36	V	33256	(5.0)	(3.3)	(0.8)	10.6	頁岩	
129	487	敲石	G32	VI	40927	9.1	5.2	2.3	155.5	ホルンフェルス	
129	488	敲石	K34	VI	34312	(5.9)	(5.5)	(4.5)	145.7	ホルンフェルス	
130	489	磨石類	F35	V	17593	9.6	8.2	6.7	671.0	安山岩	
130	490	磨石類	H37	V	40606	9.4	4.9	2.6	161.5	玄武岩	
130	491	磨石類	F37	VI	17119	8.0	6.9	5.0	404.5	安山岩	
130	492	磨石類	K33	V	34284	9.7	6.6	5.3	434.2	花崗岩	
130	493	磨石類	G37	V b	17074	9.9	6.9	5.5	488.4	花崗閃緑岩	
130	494	磨石類	L33	VI	34285	(6.3)	(5.5)	(4.8)	125.4	安山岩	
130	495	磨石類	K33	V	34283	(4.3)	(7.8)	(4.0)	153.9	砂岩	
130	496	磨石類	I37	VI	37713	7.1	5.8	3.8	265.8	安山岩	
130	497	磨石類	K36	VI	33650	(6.6)	(9.4)	5.0	362.1	安山岩	
131	498	磨石類	L33	VI	34287	7.7	4.4	3.0	159.5	安山岩	
131	499	石皿類	J37	VI	33700	(9.9)	(14.4)	(4.4)	895.5	花崗岩	
131	500	石皿類	G33	VI	40926	(9.5)	(8.2)	(2.9)	326.3	砂岩	
133	501	打製石鏃	K29	V	34362	(2.6)	(1.9)	0.5	1.9	黒色安山岩	
133	502	打製石鏃	F26	V	30121	2.0	1.4	0.4	0.8	玉髄	
133	503	打製石鏃	I24	VI	29673	(1.6)	(1.4)	0.4	0.6	黒曜石	針尾・淀姫系
133	504	打製石鏃	I27	VI	34275	2.7	1.9	0.3	0.9	黒曜石	針尾・淀姫系
133	505	打製石鏃	H26	VI	23171	(3.0)	(1.9)	0.4	1.3	黒色安山岩	
133	506	打製石鏃	E22	V	23056	(3.5)	(2.1)	0.6	2.8	チャート	
133	507	磨製石鏃	I29	VI	34273	2.1	(1.5)	0.2	1.0	頁岩	
133	508	尖頭状石器	I20	V	22889	2.4	3.4	0.9	7.4	黒色安山岩	
133	509	石錐	I21	VI	22912	3.1	2.3	0.9	5.4	黒曜石	日東・五女木系
133	510	二次加工剥片	I20	V	22896	3.6	1.5	1.0	2.9	黒曜石	姫島産
133	511	石核	J21	V	22281	3.1	2.8	1.5	8.7	黒曜石	姫島産
133	512	磨製石斧	K20	V	22295	(3.9)	(5.6)	(0.8)	21.6	ホルンフェルス	
133	513	磨製石斧	H21	V	22860	(4.6)	(7.7)	(0.8)	21.2	頁岩	
134	514	磨石類	K22	V	22334	7.8	6.6	4.3	289.0	安山岩	
134	515	磨石類	F27	VI	30021	11.3	9.5	(4.3)	613.8	砂岩	
134	516	磨石類	K23	VI	33628	(11.4)	(8.2)	(6.3)	718.3	安山岩	
134	517	石皿類	K19	V	22293	(13.0)	12.4	4.6	800.5	花崗岩	
134	518	石皿類	F24	V	30123	30.1	17.2	10.0	8420.0	砂岩	

第3節 縄文時代後期の調査

1 調査の概要

縄文時代後期の調査は、永吉天神段遺跡の全調査範囲で行った。包含層は、池田降下軽石層に該当するⅢb層と、弥生時代・古代・中世の包含層であるⅡ層との間に挟まれた黒色土のⅢa層である。

この調査では、縄文時代後期相当の遺構は確認できなかった。

遺物については、土器がⅡ層～Ⅲ層で混在して出土する状況であったため、形式的に該当時期と判断したものを取り上げることとした。石器についても同様だが、形式的に該当時期を分類することが困難であるため、今後刊行予定である縄文時代晩期編で一括して取り扱う予定である。遺物量は少なく、散在して出土する状態であった。その中でも遺跡中央部のE～G-41～43区付近にある程度の集中が見られる。図化したものは22点である。

2 出土土器

XIV類土器 (第136図 519～521)

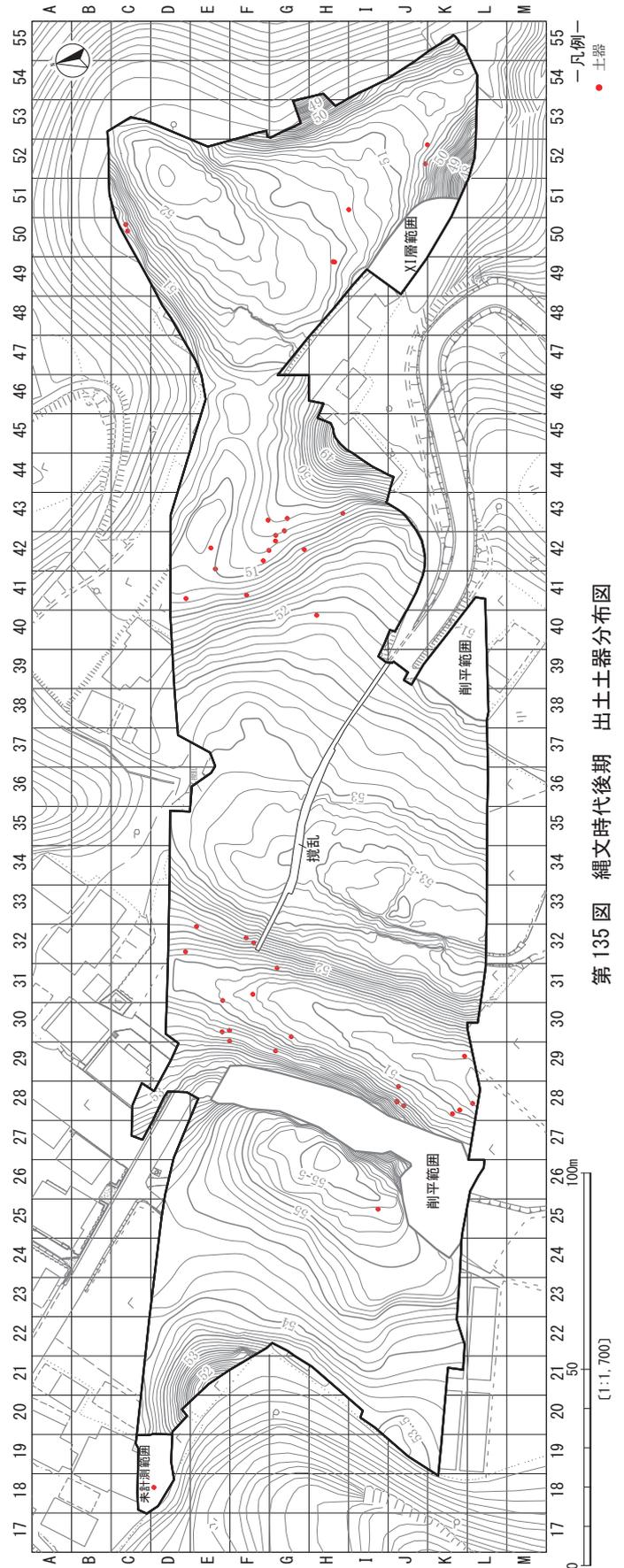
519は、肥厚させた口縁に押圧による刻目突帯を施す。口縁下に径4mm程度の穿孔がある。口唇部はナデにより平坦に調整され、その上に瘤状突起が付着している。520は、口縁部を肥厚させ、ヘラ状工具を用いて、幅広で深い凹線を斜位に施している。口唇部はナデにより平坦に調整されている。内面は貝殻腹縁による斜位のナデ調整が施されている。521は、胴部に2条の浅い凹線を屈曲させながら施文している。色調は外面が黒褐色、内面が暗赤褐を呈する。胎土に雲母の含有が目立つ。

XV類土器 (第136図 522～527)

522～524は肥厚させた口縁部文様帯に、ヘラ状工具により、連続してくの字状に短い凹線を押圧し、その後くの字の屈曲部に凹線を1条巡らせている。525はわずかに内湾する口縁部文様帯に深い凹線を横位に2条、その間に浅い凹線を1条施す。その上下に縦位の刻目を連続して押圧している。526・527は、525と同様の文様を胴部に施す。525～527は、同様の施文方法であることや近接した地点から出土していることから、同一個体である可能性が高い。

XVI類土器 (第136図 528～537)

528～530は、肥厚させた口縁部文様帯に、浅く幅広の凹線を2条巡らせている。531は、口縁部に凹線を2条巡らせた後、その凹線間に棒状工具による楕円形の押圧文を、ほぼ等間隔に連続して施している。532は、口縁部に凹線を2条巡らせた後、凹線上に楕円形の押圧文を施している。533は、口縁下部を肥厚させている。無文である。内面、外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。胎土に金雲母が認められる。534は、わずかに肥



第135図 縄文時代後期 出土土器分布図

厚させた口縁部文様帯に1条の凹線を巡らせ、胴部にも2条の凹線を巡らせている。535・536は、胴部の張り出し部に凹線を2条施している。537は、胴部の張り出し部に1条の凹線を巡らせ、その直下に三日月文を連続して施文している。

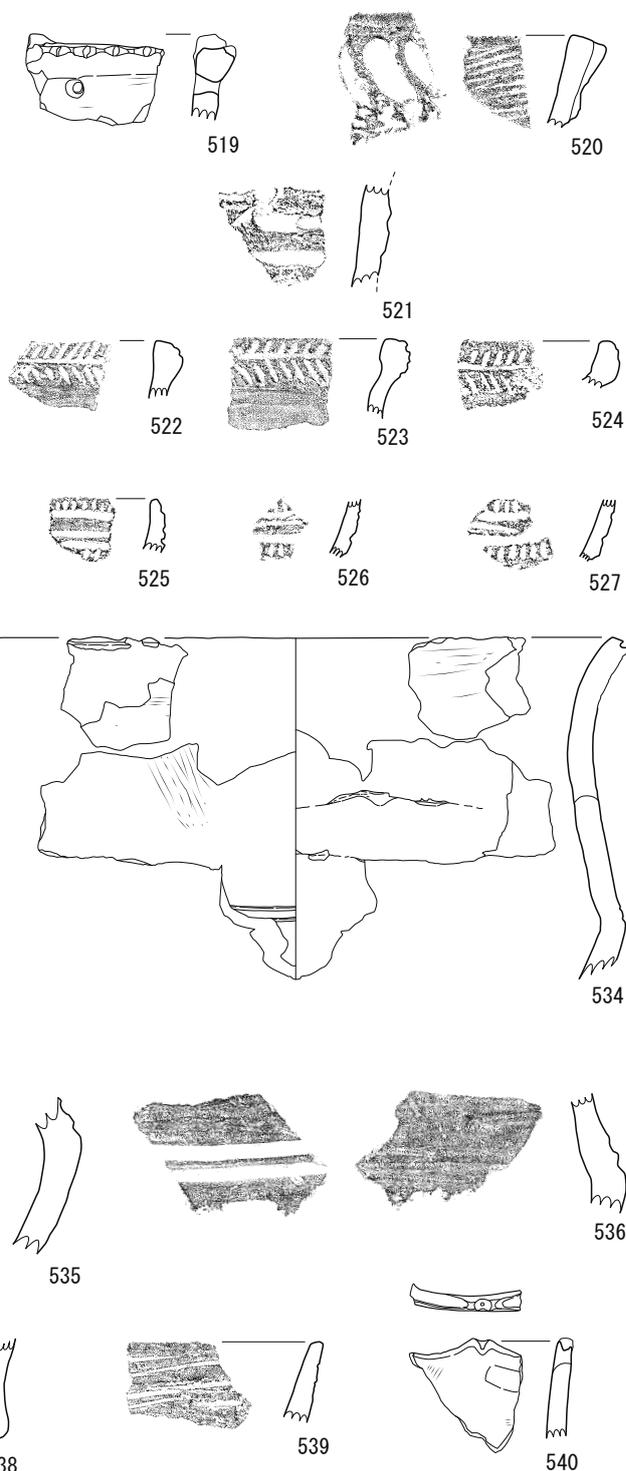
XVII 類土器 (第136図 538～540)

XVII類土器は詳細不明の土器を一括して掲載した。

538は、色調が黄褐色を呈し、内面は横ナデ、外面下部は縦位の貝殻条痕による調整が見られる。胎土は石英に富む。

539は、口縁部文様帯に横位の凹線が6条施文されている。口唇部を平坦に成形し、内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。

540は波状口縁の最頂部に刺突を施し、口唇部に凹線を巡らせている。色調は外面が黒褐色、内面が褐色を呈する。



第136図 縄文時代後期 出土土器

第8表 縄文時代後期出土土器観察表

挿 図 番 号	掲 載 番 号	出 土 区	層	取 上 番 号	部 位	分 類 番 号	器 種	調整		文 様	色調		胎土										備 考						
								外 面	内 面		外 面	内 面	白 石	茶 石	黄 白 石	雲 母	石 英	灰 石	黒 石	長 石	角 閃 石	焼 成							
136	519	G43	II b	11769	口縁	XIV	深鉢	ナデ	ナデ	口縁：押圧刻目突帯	橙	橙	○	○												普			
136	520	C52	I	—	口縁	XIV	深鉢	—	貝殻条痕	貼付肥厚部：凹線＋ 巻貝殻頂刺突文	にぶい橙	赤橙	○												○	普	後期初頭		
136	521	D52	I	—	肩	XIV	深鉢	横ナデ	横ナデ	矩形凹線	赤褐	赤褐	○	○	○	○											良	内外スス	
136	522	G30	III a	—	口縁	XV	鉢	横ミガキ	ミガキ	口縁肥厚部：横位凹 線，上下斜位凹線	赤褐	黒褐		○													良		
136	523	E30	III a	38006	口縁	XV	深鉢	—	—	口縁：斜位凹線， 沈線	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○														良		
136	524	G29	III a	—	口縁	XV	深鉢	—	ナデ	口縁：斜位凹線， 沈線	赤褐	赤褐	○	○													良		
136	525	F32	III b	16226	口縁	XV	鉢	ナデ	ナデ	沈線，刻目	褐灰	褐灰	○														普		
136	526	E31	II	—	胴	XV	鉢	ナデ	ナデ	沈線，刻目	褐灰	褐灰	○														普		
136	527	E32	III b	16717	胴	XV	鉢	ナデ	ナデ	沈線，縦位刻目	にぶい褐	褐灰	○														普		
136	528	F31	III a	38869	口縁	XVI	鉢	横ナデ	横ナデ	口縁：凹線	赤褐	赤褐	○														良		
136	529	H50	III	6009	口縁	XVI	深鉢	横ナデ	丁寧な横 ナデ	口縁端：横線＋縦短 絡線	橙・一部に 黒褐	橙・一部に 黒褐		○	○												良		
136	530	C51	I	—	口縁	XVI	深鉢	横ナデ	横ナデ	口縁端：凹線	にぶい褐	褐灰	○	○												○	普		
136	531	K29	III a	34238	口縁	XVI	深鉢	横ナデ	—	口縁：凹線＋球状工 具による押圧文	黒褐・一部 褐	黒褐	○	○													普		
136	532	J28	II b	27090	口縁	XVI	鉢	口縁ナ デ、頭部 縦ミガキ →横ナデ	横ナデ	口唇：凹線→刺突	褐	褐	○														良		
136	533	E31	III a	38802	口縁	XVI	深鉢	丁寧な横 ナデ	丁寧な横 ナデ	—	橙	にぶい褐	○	○														良	
136	534	J28	II b, III a	27091 他	口縁～ 胴	XVI	深鉢	ミガキ様 ナデ	—	口唇：凹線，胴部： 凹線	褐	橙・灰褐	○														良		
136	535	C50	II	7160	胴	XVI	深鉢	貝殻条痕 →ナデ	貝殻条痕 →ナデ	凹線	にぶい橙	黒褐	○	○													良	536と同一個 体	
136	536	C50	II	7165	胴	XVI	深鉢	貝殻条痕 →ナデ	貝殻条痕 →ナデ	凹線	にぶい橙	黒褐	○	○													良	535と同一個 体	
136	537	G30	III a	33578	胴	XVI	深鉢	ナデ	ナデ	沈線	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○													普		
136	538	L28	II, III a	33840 他	底	XVII	鉢	貝殻条痕	横ナデ	—	黄褐・一部 に橙	黄褐・一部 に橙	○	○													普	底径(13.4)cm	
136	539	E42	II a	9938	口縁	XVII	鉢	ナデ，口 唇丁寧な ナデ	丁寧なナ デ	条痕	茶褐	茶褐	○														良		
136	540	H43	II a	13397	口縁	XVII	深鉢	ナデ	ナデ	口縁最頂部に刺突	黒褐	褐	○	○													普		

第5章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の種類と目的

本報告書に関する自然科学分析は、平成25年度に「永吉天神段遺跡における植物珪酸体分析」を、平成28年度に「永吉天神段遺跡出土の炭化物分析」を行った。

炭化物分析では、集石75号から検出された炭化物の年代を測定することにより、遺構の年代を知る手がかりとすることを目的とした。

植物珪酸体分析では、F-44区の土層内に残存している植物珪酸体（プラント・オパール）を検出・分析し、古植生・古環境を推定することを目的とした。

なお、今回は本報告書に関わる、第2地点の縄文時代早期に関する科学分析のみを掲載する。第2地点の縄文時代晩期以降と、第3地点については今後刊行の報告書において報告する予定である。このため、納品された報告書を基に、第2地点の縄文時代早期の分析結果のみ再編を行い、体裁を整えて掲載している。

第2節 永吉天神段遺跡出土の炭化物分析

株式会社 パレオ・ラボ

1 はじめに

鹿児島県大崎町に位置する永吉天神段遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

試料は、集石遺構である集石75号出土の1点（試料No. 1: PLD-32481）の炭化材である。試料No. 1は最終形成年輪は残っていなかった。測定試料の情報、調製データは第9表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3 結果

第10表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年代較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を第137図に暦年代較正結果をそれぞれ示す。暦年代較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年代較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年代較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD 1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代（y r B P）の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、

付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。なお、暦年代較正の詳細は以下のとおりである。

暦年代較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期5730 \pm 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年代較正にはOxCal 4.2（較正曲線データ: IntCal 13）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。（）内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年代較正曲線を示す。

4 考察

集石75号から出土した試料No. 1（PLD-32481）は、 ^{14}C 年代で8120 \pm 2514 C B P、 2σ 暦年代範囲（確率95.4%）で7175 - 7056 c a l B C（95.4%）の暦年代を示した。これは、小林（2008）、工藤（2012）、八木澤（2008）を参照すると、縄文時代早期後半に相当する。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.

小林謙一(2008)縄文時代の暦年代. 小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさし」: 257-269, 同成社.

工藤雄一郎(2012)旧石器・縄文時代の環境文化史—高精度放射性炭素年代測定と考古学—. 373p, 神泉社.

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

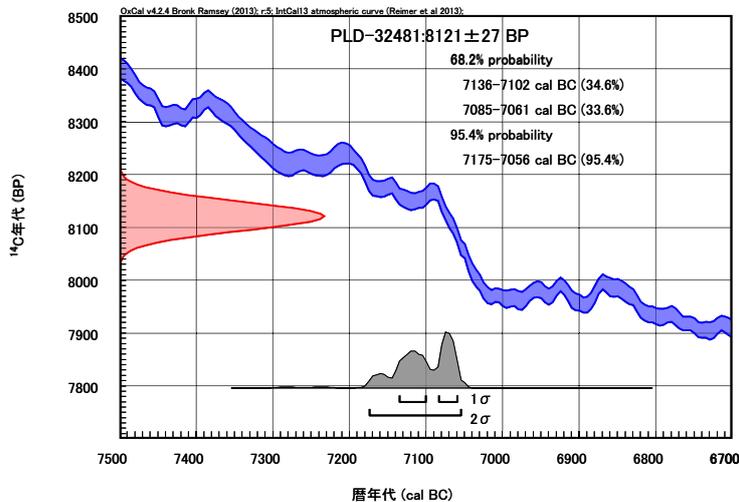
Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J. (2013)

第9表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-32481	試料 No. 1 調査区：第2地点 グリッド：G・H27 遺構：SS75 層位：VI層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

第10表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年較正した年代範囲	
				1 σ 暦年較正範囲	2 σ 暦年較正範囲
PLD-32481 SS75 試料 No. 1	-25.17 \pm 0.15	8121 \pm 27	8120 \pm 25	7136-7102 cal BC (34.6%) 7085-7061 cal BC (33.6%)	7175-7056 cal BC (95.4%)



第137図 暦年較正結果

第3節 永吉天神段遺跡出土の植物珪酸体分析 株式会社 古環境研究所

1 はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

ここでは、当時の周辺の植生や環境および農耕に関する情報を得る目的で、植物珪酸体分析を行った。

2 試料

分析試料は、F-44区の土層断面から採取された8点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3 分析法（土壌試料）

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥（絶乾）試料約 1 g に

対し直径約 40 μm のガラスビーズを約 0.02g 添加（0.1mg の精度で秤量）

- 2) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 3) 超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散
- 4) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去
- 5) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 6) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で層厚 1 cm

あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4 分析結果

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第11表および第138・139図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科] イネ, ヨシ属, キビ族型, ススキ属型(おもにススキ属), ウシクサ族A(チガヤ属など), ウシクサ族B(大型)

[イネ科-タケ亜科]メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節, ヤダケ属), ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節), チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など), ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など), マダケ属型(マダケ属, ホウライチク属), 未分類等

[イネ科-その他] 表皮毛起源, 棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来), 未分類等

[樹木] ブナ科(シイ属), クスノキ科, マンサク科(イスノキ属), その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

1) F-44区(土層断面)

下位のV a層(試料10)では、ススキ属型, ウシクサ族Aが比較的多く検出され, キビ族型, ウシクサ族B, メダケ節型, ネザサ節型, チマキザサ節型, ミヤコザサ節型なども認められた。また, 樹木起源のクスノキ科, 樹木(その他)なども検出された。K-Ah混のIV a層(試料8, 9)では、イネ科は各分類群とも大幅に減少しているが, 樹木起源のクスノキ科, 樹木(その他)は大幅に増加し, ブナ科(シイ属)も出現している。Ik混層(試料7)ではススキ属型, ウシクサ族Aが増加し, III b層(試料4, 5)ではメダケ節型, ネザサ節型も増加している。なお, III b層上部(試料4)では樹木起源のクスノキ科や樹木(その他)が減少している。

5 考察

鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 約7,300年前)直下のV a層の堆積当時は、ススキ属やウシクサ族(チガヤ属など)を主体として、キビ族, メダケ属(メダケ節やネザサ節)なども生育する日当たりの良い草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺にはクスノキ科などの樹木(照葉樹)が分布していたと推定される。

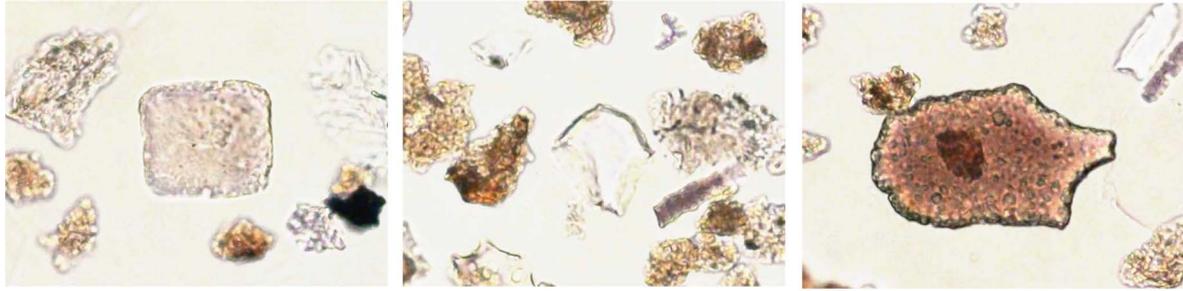
その後、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 約7,300年前)の堆積によって、当時の植生は一時的に大きな影響を受けたと考えられるが、K-Ah混のIV a層の時期にはクスノキ科をはじめシイ属なども生育する森林植生(照葉

樹林)が分布拡大したと推定される。鬼界アカホヤ噴火に伴う幸屋火砕流が及ばなかった鹿児島県中部以北では、鬼界アカホヤ火山灰の直上で照葉樹林が分布拡大する傾向が認められるが(杉山, 2002)、このことの原因として、テフラ降灰が生態系の秩序を攪乱することによって生態的順位の交代が誘発され(辻, 1993)、結果的に照葉樹林の分布拡大が促進された可能性が考えられる。また、照葉樹林の分布拡大には、年平均気温が現在よりも約2℃前後高かったとされる当時の温暖湿潤な気候環境も影響したと考えられる。

池田湖テフラ(Ik, 約6,400年前)混のIII b層では、ススキ属やウシクサ族(チガヤ属など)を主体としてキビ族, メダケ属(メダケ節やネザサ節)なども生育する草原植生に移行したと考えられ、同層上部ではクスノキ科などの照葉樹林は減少したと推定される。また、III a層ではメダケ属(メダケ節やネザサ節)が増加したと考えられる。これらのイネ科植物は陽当たりの悪い林床では生育が困難であり、ススキ属やチガヤ属の草原が維持されるためには定期的な刈り取りや火入れが必要である(堀田, 1991, 近藤, 1995)。このことから、当時は火入れなど人間による植生干渉が行われていた可能性が考えられる。また、このような植生環境下で土壌中に多量の有機物が供給され、炭素含量の高い黒色土壌(黒ボク土)が形成されたと推定される(杉山ほか, 2002)。

文献

- 近藤錬三(1995)日本における植物珪酸体研究とその応用。近堂祐弘教授退官記念論文集刊行会:p.31-56。
- 杉山真二・藤原宏志(1986)機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-。考古学と自然科学, 19, p.69-84。
- 杉山真二(1999)植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究, 38(2), p.109-123。
- 杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学。同成社, p.189-213。
- 杉山真二(2001)テフラと植物珪酸体分析。月刊地球, 23, p.645-650。
- 杉山真二・渡邊真紀子・山元希里(2002)最終氷期以降の九州南部における黒ボク土発達史。第四紀研究, 41(5), p.361-373。
- 杉山真二(2010)更新世の植生と環境。旧石器時代。講座日本の考古学第1巻。青木書店, p.156-177。
- 藤森照信(2012)茅、その一。第4回建築の素。小雑誌「熱風」2012年10号。スタジオジブリ, p.91-95。
- 堀田満(1991)日本列島の植物。カラー自然ガイドII, 保育社:p.68-69。
- 町田洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス-日本列島とその周辺-。東京大学出版会, 336p。



ウシクサ族 A
F-44 9

マダケ属型
F-44 1

ヨシ属
F-44 5

50 μm

第 138 図 永吉天神段遺跡の植物珪酸体

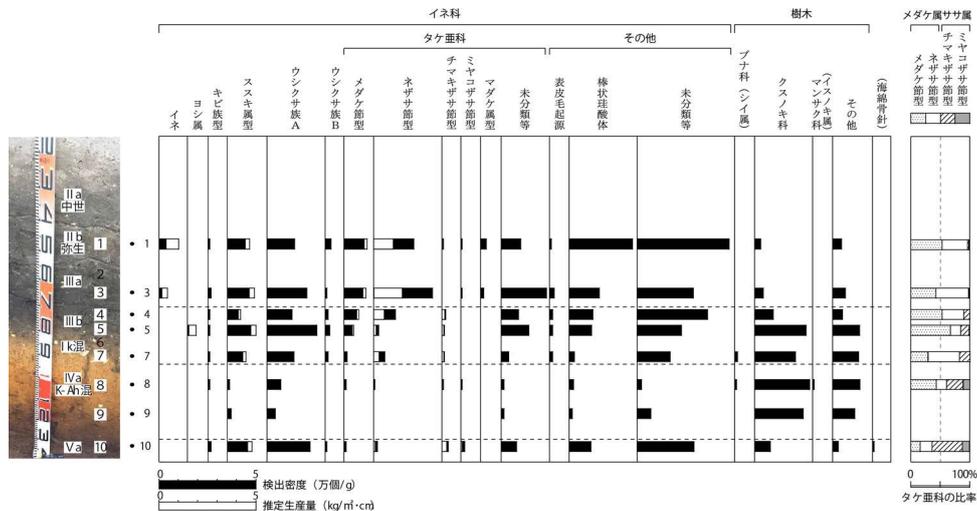
第 11 表 永吉天神段遺跡における植物珪酸体分析結果 (1)

検出密度 (単位: ×100個/g)		F-44区土層断面								
分類群	地点・試料 学名	1	3	4	5	7	8	9	10	
イネ科	Gramineae									
イネ	<i>Oryza sativa</i>	35	14							
ヨシ属	<i>Phragmites</i>				7	7	7			
キジ族型	Panicaceae type	7	14	7	7	7	7		13	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	92	113	54	121	78	7	14	104	
ウシクサ族 A	<i>Andropogoneae</i> A type	142	204	128	256	137	69	41	221	
ウシクサ族 B	<i>Andropogoneae</i> B type	28	7	13	21	13			7	
タケ亜科	Bambusoideae									
マダケ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	106	99	67	43	13	7		7	
ネザサ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	213	310	115	28	59	7		20	
チャマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	7	7	20	14	13	7		33	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	7	7				7		20	
マダケ属型	<i>Phyllostachys</i>	28	14							
未分類等	Others	99	232	88	142	39	14	14	78	
その他のイネ科	Others									
表皮毛起源	Husk hair origin	7	21	13	14	13				
棒状珪酸体	Rodshaped	326	155	121	114	26	21	14	111	
未分類等	Others	475	289	364	228	170	21	69	293	
樹木起源	Arboreal									
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>					13	7			
クスノキ科	Lauraceae	28	42	94	263	209	282	248	78	
マンサク科(イスノキ属)	<i>Distylium</i>								7	
その他	Others	43	63	47	135	131	138	110	26	
(海綿骨針)	Sponge spicules								7	
植物珪酸体総数	Total	1645	1583	1133	1395	922	599	510	1008	

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出										
イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.04	0.41							
ヨシ属	<i>Phragmites</i>			0.45						
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	1.14	1.40	0.67	1.50	0.97	0.09	0.17	1.29	
マダケ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	1.23	1.14	0.78	0.50	0.15	0.08		0.08	
ネザサ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	1.02	1.49	0.55	0.14	0.28	0.03		0.09	
チャマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.05		0.15	0.11	0.10	0.05		0.24	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.02	0.02						0.06	
タケ亜科の比率 (%)										
マダケ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	53	43	53	67	29	43		16	
ネザサ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	44	56	37	18	53	18		20	
チャマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	2	10	14	18	28	52		52	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	1	1				11		12	
マダケ率	Medake ratio	97	99	90	86	82	61	0	36	

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出										
イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.04	0.41							
ヨシ属	<i>Phragmites</i>			0.45						
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	1.14	1.40	0.67	1.50	0.97	0.09	0.17	1.29	
マダケ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	1.23	1.14	0.78	0.50	0.15	0.08		0.08	
ネザサ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	1.02	1.49	0.55	0.14	0.28	0.03		0.09	
チャマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.05		0.15	0.11	0.10	0.05		0.24	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.02	0.02				0.02		0.06	

タケ亜科の比率 (%)										
マダケ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	53	43	53	67	29	43		16	
ネザサ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	44	56	37	18	53	18		20	
チャマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	2	10	14	18	28	52		52	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	1	1				11		12	
マダケ率	Medake ratio	97	99	90	86	82	61		36	



第 139 図 永吉天神段遺跡における植物珪酸体分析結果 (2)

第6章 総括

第1節 旧石器時代

旧石器時代の遺構・遺物については、持留川に近接する遺跡東部の舌状台地上に集中して検出された。礫群1基、ブロック7か所が検出され、その周辺から石器・剥片等の遺物が出土した。遺跡中央部・西部でそれぞれ1点ずつ石器が出土したが、全体としては調査面積に比べて少ない状態であった。遺物はすべてX層で出土しており、ナイフ形石器の時期の遺物である。

第2節 縄文時代早期

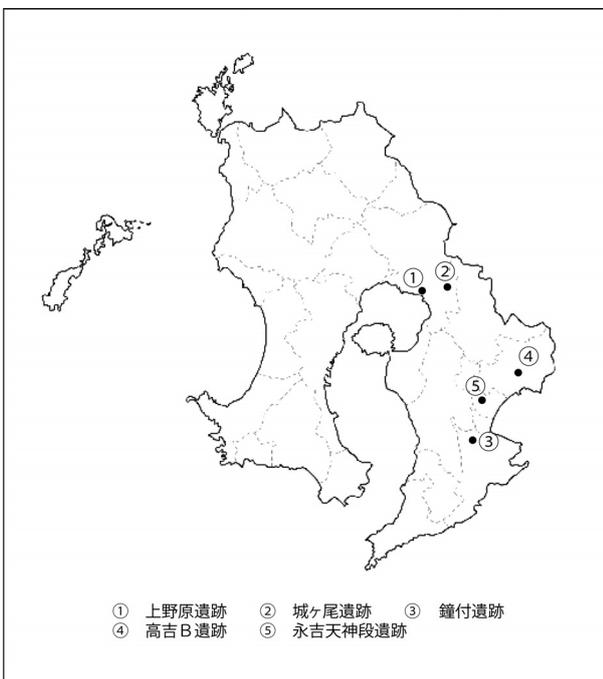
1 遺構

(1) 土器埋設遺構

永吉天神段遺跡第2地点では、縄文時代早期後葉の土器埋設遺構が1基検出された。

土器埋設遺構は縄文時代後期に隆盛するが、一方で縄文時代早期の土器埋設遺構も少数ながら存在する。

土器埋設遺構は、土器埋納遺構とも呼ばれる遺構であり、両者は土器が埋められた目的・意図によって区別されるべきものであるが、ここでは一括して土器埋設遺構として取り扱うこととする。



第140図 県内の埋設土器検出遺跡位置図

県内において著名なものは、霧島市上野原遺跡で検出された一対の壺形土器の土器埋設遺構であるが、上野原遺跡ではそれを含めて11基12個体が検出されている。器種は壺形土器が11個体、深鉢が1個体である。型式は早期後葉に位置づけられる天道ヶ尾式土器と、平椀式

土器がそれぞれ6個体である。遺構は、遺跡内でも標高の高い場所で検出されている。

霧島市城ヶ尾遺跡では、4基の土器埋設遺構が検出され、壺形土器3個体、深鉢1個体が出土した。4個体とも早期後葉に位置づけられる塞ノ神A式土器である。遺構は遺跡内でも標高の高い位置に配されており、遺構周辺は遺物が極端に少ない状態であった。

肝付町鐘付遺跡では、5基の土器埋設遺構が検出され、壺形土器1個体、深鉢4個体が出土した。5個体とも早期後葉に位置づけられる、平椀様式の石板上式土器（いわゆる塞ノ神Aa式土器）である。遺構は、上野原遺跡、城ヶ尾遺跡と同様に遺跡内でも標高の高い場所で検出されている。

志布志市高吉B遺跡では1基の土器埋設遺構が検出され、壺形土器1個体が出土した。土器は、文様が菱形状になる山形押型文土器である。押型文土器は他遺跡の埋設土器より時期が古く、既知の県内の埋設土器の中では最も古いものになる。

これまでの発掘調査の例では、縄文時代早期の土器埋設遺構は薩摩半島側での検出例がなく、すべて大隅半島で検出されている。また、本遺跡のものを含めて、県内の土器埋設遺構はすべて早期後半のものと思われる。その中で高吉B遺跡の山形押型文土器が最も古く、次いで上野原遺跡の天道ヶ尾式・平椀式土器、城ヶ尾遺跡の塞ノ神A式土器、鐘付遺跡の石板上式土器が続き、その次に永吉天神段遺跡の塞ノ神B式土器となる。

第12表 県内の土器埋設遺構一覧表

遺跡名	遺構数	土器個数		土器型式	特記事項
		壺	鉢		
① 上野原遺跡	11	11	1	天道ヶ尾式土器 6 平椀式土器 6	遺跡内で標高の高い地点 周辺は遺物が少ない
② 城ヶ尾遺跡	4	3	1	塞ノ神A式土器 4	遺跡内で標高の高い地点 周辺は遺物が少ない
③ 鐘付遺跡	5	1	4	石板上式土器 (塞ノ神Aa式土器) 5	遺跡内で標高の高い地点
④ 高吉B遺跡	1	1	0	山形押型文土器 1	台地縁辺 西側に安楽川
⑤ 永吉天神段遺跡	1	0	1	塞ノ神B式土器 1	検出地点西側は急な崖 周辺は遺物が少ない
合計	22	16	7		

器種に着目すると、壺形土器が16個と全体の約72%を占める。また時期別に見ると、古い時期は壺形土器が多く埋設され、新しくなるにつれて深鉢が増加していく傾向がある。

本遺跡と各遺跡の埋設土器遺構を比較すると、共通点として遺構周辺では遺物の出土があまり見られないという点がある。これは土器埋設遺構の性格と関わる部分であると思われる。また、他の遺跡では遺跡内でも標高の高い地点で検出されている事例が多いが、本遺跡の遺構

は特に高い地点で検出されたというわけではない。ただ、周辺地形を考慮すると、遺構西側には急傾斜の崖があり、崖下から見ると標高の高い地点であるという見方もできる。これは高吉B遺跡の立地に似ている。

ここで問題となるのが、土器埋設遺構の性格である。上野原遺跡の土器埋設遺構の発見以来、それについては論じられてきている。

上野原遺跡の埋設土器については、八木澤一郎氏が、自然科学分析の結果より、棺・再葬墓・貯蔵具ではないと判断し、土器埋設遺構を含めた遺物出土希薄域を「特別な場」とし、祭祀を行う広場であったと述べている（八木澤 2003）。

また新東晃一氏は上野原遺跡・城ヶ尾遺跡の土器埋設遺構の立地は遺跡の中でも高所に位置し、埋設土器は精神的あるいは祭祀的行為で埋められたものであることが想定されるとしている（新東 2003）。

永吉天神段遺跡の土器埋設遺構の性格については、①埋設土器のサイズが小さく、棺・墓・貯蔵具としての機能を果たすのは難しいと考えられる。②遺構周辺に遺物が少ない。③周辺より標高の高い地点で検出された等、他の遺跡と共通する点があることから、上野原遺跡・城ヶ尾遺跡・鐘付遺跡と同様に、祭祀的行為の意味合いの強い遺構であったと思われる。

（2）集石

ここでは集石の各該当層ごとの分析と、形態分類別の分析を述べる。層位・形態分類については57ページを参照してもらいたい。

該当層ごとの分析

本遺跡の縄文時代早期の遺物包含層は、V(a, b)層、VI層である。集石もV層、VI層上面で検出されているが、ここでは各層ごとについてまとめる。なおV層検出の集石の中にはa, b層の、検出面の判断ができなかったものが2基あるが、V層該当集石として取り扱う。

①V層該当集石（全2基）

I類集石1基、III類集石1基の計2基である。どちらも集石が集中して検出された、遺跡東側の台地縁辺部から離れた遺跡中央部に近い地点で検出されている。

②V a層該当集石（全3基）

II類集石1基、III類集石2基の計3基である。これらは遺跡中央部に近い地点から2基、遺跡西端から1基検出されている。

③V b層該当集石（全47基）

I類集石1基、II類集石17基、III類集石29基の計47基である。V b層検出の集石は全体の57%で、本遺跡の主体を占める。

掘り込みを持つものは1基で、それ以外は掘り込みを持たない。礫集中度が高いI・II類は、全体の約22%、

礫集中度の低いIII類は、全体の約35%を占める。これらは、遺跡東側の持留川に近い台地縁辺部から多く検出されている。

④VI層上面該当集石（全30基）

I類集石1基、II類集石6基、III類集石23基の計30基である。

掘り込みを持つものは1基で、それ以外は掘り込みを持たない。

礫集中度が高いI・II類は、全体の約9%、礫集中度の低いIII類は、全体の約28%を占める。

第13表 各層・形態別集石遺構分類

	I類集石	II類集石	III類集石	計
V層	1基（1.2%）	0基（0.0%）	1基（1.2%）	2基（2.4%）
V a層	0基（0.0%）	1基（1.2%）	2基（2.4%）	3基（3.7%）
V b層	1基（1.2%）	17基（20.7%）	29基（35.4%）	47基（57.3%）
VI層	1基（1.2%）	6基（7.3%）	23基（28.0%）	30基（36.6%）
計	3基（3.7%）	24基（29.3%）	55基（67.1%）	82基（100%）

形態分類別の分析

形態分類別の集計では、全82基中、I類集石は3基（3.7%）、II類集石は24基（29.3%）III類集石は55基（67.1%）である。本遺跡の集石のほとんどは、掘り込みを持たない、礫集中度の低い集石である。

I類集石（3基）

集石の集中する48区以東にはなく、3基が遺跡西部・中央部・東部に分散して検出されている。

II類集石（24基）

遺跡東端部に集中域が見られ、22基が検出された。中央部に2基検出されているが、西部では1基も検出されなかった。

III類集石（55基）

44区以東の遺跡東部に41基、中央部に6基、西部に8基検出された。遺跡東部に集中している。遺跡中央部、西部でも検出されたが、基数は少ない。

本遺跡の集石は、持留川に面した遺跡東側の台地縁辺部に集中して検出され、川からの距離が離れるにつれて減少する傾向にある。また、集石は多数検出されたものの、第2地点の調査区内からは住居跡は1軒も検出されていない。これらのことから、本遺跡第2地点は住居が周辺の調査区外に構築されていたか、または住居を構築しないキャンプサイトの役割を果たしていた可能性が考えられる。ただし、住居跡が薩摩火山灰層まで掘り込まれていなかった場合、遺構埋土と検出層との相違がほとんどみられず、検出できなかった可能性がある。

2 遺物

(1) 土器

土器分類について

ここでは縄文時代早期・後期の全17類の土器分類のうち、型式不明の土器を一括したⅫ・ⅩⅢ・ⅩⅦ類を除いた14分類について述べる。

I類

前平式土器に比定される土器群である。前平式土器は、鹿児島市前平遺跡出土土器を標識とする土器である。角筒形と円筒形、レモン形の3種類が存在する。本遺跡ではレモン形は出土していない。器壁は薄く、貝殻条痕を施した後、貝殻腹縁刺突により施文を行う。口縁部下には楔形突帯を貼り付ける。この土器はほぼ遺跡東部から出土している。他の型式と比較して出土数は多い。

さらに細分すると、66～70、72・73、75～85は小牧3Aタイプに比定される土器群である。楔形突帯を密に貼り付け、貝殻刺突文も密に施文される。前平式土器と後に続く吉田式土器の要素を併せ持つ。また、86～90は札ノ元Ⅶ類土器に比定される土器群である。札ノ元Ⅶ類土器は、宮崎市札ノ元遺跡において多数出土している土器で、二重施文を行わず、シャープさに欠ける楔形突帯を貼り付ける。71・74は加栗山式土器に比定される土器である。

II類

石坂式土器に比定される土器群である。石坂式土器は、南九州市石坂上遺跡出土土器を標識とする土器である。口縁部は外反するものと直行するものがあり、胴部には綾杉文が施される。本遺跡での出土数は少ない。

III類

下剥峯式土器に比定される土器群である。下剥峯式土器は、西之表市下剥峯遺跡出土土器を標識とする土器である。口縁部は直行またはわずかに内湾し、瘤状突起が付くものもある。文様は口縁部から底部まで貝殻刺突文のみで構成される。本報告書では、施文や器面調整の差異により、さらに6類に細分している。本遺跡では多数出土し、主体となる土器型式の1つである。出土地点も遺跡全体に広がっている。

IV類

桑ノ丸式土器に比定される土器群である。桑ノ丸式土器は、霧島市溝辺町桑ノ丸遺跡出土土器を指標とする土器である。口縁部は直行ないし内湾し、口縁部内面が肥厚するものが多い。文様は短い貝殻条痕や沈線により羽状文や流水文を施す。全域で出土しているが遺物数は少ない。

V類

押型文土器に比定される土器群である。押型文土器は木の軸に楕円や山形の文様を彫り、土器の表面にそれを回転させて施文する。東北地方から九州まで、日本の東

西へ分布圏が拡大した広域な土器型式である。本遺跡では山形押型文と楕円押型文があり、東部と西部で少数出土している。

VI類

手向山式土器に比定される土器である。手向山式土器は、伊佐市手向山遺跡出土土器を指標とする土器で、九州における押型文土器の終末型式である。胴部で内側に屈曲し、大きく外反しながら口縁部に至る。平底を呈するものが多い。文様は押型文と、ミミズ腫れ突帯や沈線文などそれ以外の施文が施される。本遺跡では西部で1個体に接合できる破片が出土している。

VII類

妙見式土器に比定される土器である。妙見式土器は、宮崎県えびの市妙見遺跡出土土器を指標とする土器である。口縁に横位の突帯を数条巡らせ、縄文を押圧する。本遺跡では西部で口縁部小片が2個出土している。

VIII類

平椀式土器に比定される土器である。平椀式土器は霧島市平椀貝塚出土土器を指標とする土器である。口縁部は外反し、やや肥厚する。外面に連点文や凹線による羽状文や山形文、波状文などを施し、その間に刻目突帯を巡らす。本遺跡では東部で小片が2個出土している。

IX類

塞ノ神式土器に比定される土器群である。塞ノ神式土器は伊佐市菱刈町塞ノ神遺跡出土土器を指標とする土器である。塞ノ神式土器は、河口貞徳氏により塞ノ神A(a, b)・B(c, d)式土器に細分され、南九州における縄文時代早期土器を代表する土器型式の一つである。塞ノ神A式土器は撚糸文を、塞ノ神B式土器は貝殻文を施すものと大別される。本報告書では、施文や器面調整の差異により、塞ノ神A式土器を1、塞ノ神B式土器を8、計9類に細分している。本遺跡では多数出土し、主体となる土器型式の1つである。出土地点も遺跡全体に広がっている。

X類

苦浜式土器に比定される土器群である。苦浜式土器は、中種子町苦浜貝塚出土土器を指標とする土器である。口縁下から突帯を垂下させ、刻み目を施す。底部は弱い張り出しを持つ。本遺跡では東部でのみ出土している。

XI類

条痕文土器に比定される土器である。259は、本遺跡最大の復元土器である。平底だが接地面が小さく、尖底土器に近い器形をしている。小山タイプに類似している。小山タイプの土器は、鹿児島市宮之浦町小山遺跡出土土器を標識とする土器である。東部で多く出土し、西部でも少数出土している。

XIV類

岩崎上層式土器に比定される土器である。岩崎上層土

器は、錦江町岩崎遺跡出土土器を標識とする土器である。同時期の指宿式土器との類似性が認められるが、口縁部の刻みがなく、頸部に平行曲線文が施される。本報告書掲載地点での出土は3点のみで、本遺跡第1地点で比較的多く出土した。

XV類

北久根山式土器に比定される土器である。北久根山式土器は、熊本市北久根山遺跡出土土器を標識とする土器である。口縁部が肥厚し、そこに文様が施される。深鉢形が多数である。本遺跡では中央部で7点出土した。

XVI類

中岳Ⅱ式土器に比定される土器である。中岳Ⅱ式土器は、曾於市末吉町中岳洞穴出土土器を標識とする土器である。口縁部を肥厚させ、そこに2～3条の凹線を施す。胴部でくの字に内側に屈曲し、頸部は外反しながら口縁部に至る。本遺跡では中央部で10点出土した。

札ノ元VII類土器について

86～90は札ノ元VII類土器に比定される土器群である。黒川忠広氏は、加栗山式土器や吉田式土器に類似するが、二重施文を行わず、シャープさに欠ける楔形突帯を貼り付けるなどの相違点に着目、札ノ元VII類土器の集成を行い、南九州貝殻文系土器における地域的な特徴を示す事例ではないかと述べている。(黒川2004)。

その後の都城志布志道路建設、東九州自動車道建設に伴う発掘調査により、志布志湾沿岸部において札ノ元VII類土器が出土している遺跡が増加している。

高吉B遺跡では1点が報告されている。口縁下には貝殻腹縁刺突が施され、器面調整は左上がりの貝殻条痕である。口唇部には短沈線状の刻みが斜位に施される。「縦に2段楔形突帯が施されているがシャープさはみられず、器面の色調が淡く胎土に透明な鉱物を含むことから、宮崎地方との関係が窺える。」としている。

次五遺跡でも出土しているとの報告があるが、報告書未刊行のため詳細は不明である。

永吉天神段遺跡では6点が出土している。どれも横位の貝殻条痕による器面調整を行う。楔形突帯が認められる土器は2点で、どちらもシャープさに欠ける楔形突帯が貼り付けられる。

黒川氏は、札ノ元VII類土器と同時期に東南九州で盛行していた別府原タイプの土器との比較を行い、両者がほぼ同時期であることや類似点が多数指摘できること、前平式から吉田式土器までは円筒・角筒・レモン形の器形が認められるが、札ノ元VII類・別府原タイプ土器は円筒形の器形しか出土していないことから、札ノ元VII類土器は、別府原タイプを主体とする集団と南九州貝殻文系土器を有する集団とが接触することで作り出されたと考えられ、それにより、南九州貝殻文系土器の主な分布圏と東南九州とでは異なった様相がみられ、地域性が存在す

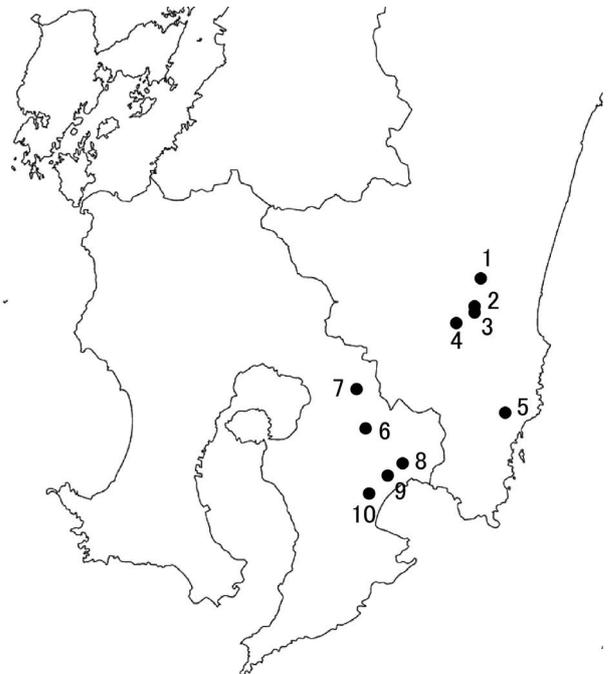
るとしている(黒川2004)。

一方で、札ノ元VII類土器が出土する東南九州地域内での土器伝播の可能性について考察する。

札ノ元VII類土器出土遺跡地図では、鹿児島・宮崎両県境付近に札ノ元VII類土器が検出されていない空白部があることが分かる。ここには標高900mを超える鱈塚山地の山々が連なっており、峻険な地形である。また、宮崎県日南市の上城跡遺跡は日向灘に比較的近い場所に立地している。同様に、高吉B・次五・永吉天神段遺跡は志布志湾岸に近接している。これらのことから、札ノ元VII類土器が峻険な鱈塚山地を迂回し、日向灘・志布志湾の海岸沿いをルートにして伝播した可能性が考えられる。そして、現在までの札ノ元VII類土器の出土量と別府原タイプとの類似性から、鹿児島側からの北上ルートより宮崎側からの南下ルートの可能性が高いと考える。

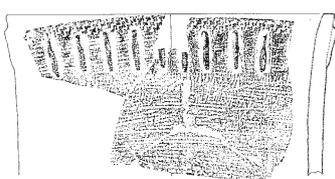
第14表 札ノ元VII類土器出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地
1	天ヶ城跡	宮崎県宮崎市高岡町大字内3003-56
2	権現原第2遺跡	宮崎県宮崎市清武町船引字安ヶ野
3	杉木原遺跡	宮崎県宮崎市清武町大字今泉字杉木原
4	札ノ元遺跡	宮崎県宮崎市田野町字札ノ元
5	上城跡遺跡	宮崎県日南市楠原字北平
6	宮田遺跡	鹿児島県曾於市大隅町月野岩元宮田
7	高篠坂遺跡	鹿児島県曾於市財部町南俣高篠坂
8	高吉B遺跡	鹿児島県志布志市志布志町安楽字宇都上
9	次五遺跡	鹿児島県志布志市有明町野井倉字次五
10	永吉天神段遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町永吉字天神

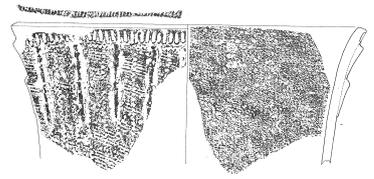


第141図 札ノ元VII類土器出土遺跡地図

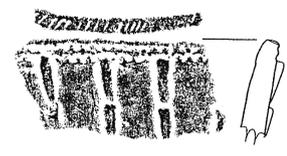
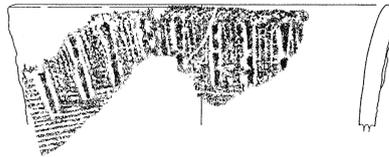
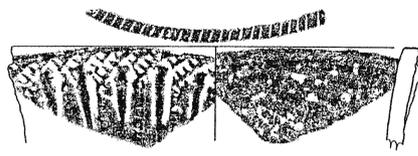
④ 札ノ元遺跡



⑤ 上城跡遺跡



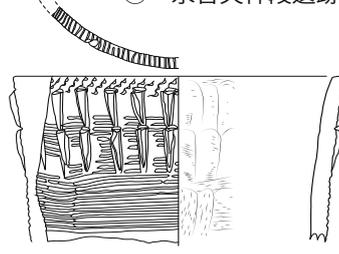
⑤ 上城跡遺跡



⑧ 高吉B遺跡



⑩ 永吉天神段遺跡



第 142 図 各遺跡出土の札ノ元Ⅶ類土器（縮尺不同）

(2) 石器

石器の器種別数と割合

本遺跡の縄文時代早期石器の器種別割合は以下のとおりである。

第 15 表 縄文時代早期石器の器種別数と割合

磨石	65 (34.6%)	磨製石斧	8 (4.3%)	石錐	3 (1.6%)
石鏃	42 (22.3%)	石核	6 (3.2%)	剥片	3 (1.6%)
石皿	24 (12.8%)	石匙	4 (2.1%)	敲石	3 (1.6%)
削器・掻器類	10 (5.3%)	二次加工剥片	4 (2.1%)	その他	5 (2.7%)
打製石斧	8 (4.3%)	尖頭状石器	3 (1.6%)		

石皿、磨石・敲石等の、調理具としての石器の比率が高い。集石と近接した位置に石皿が配置され、その脇に磨石が置かれていたものもあり、調理施設と調理道具のセットとして考えられる例である。

黒曜石製石器の産地割合

第 16 表 黒曜石製石器別の産地割合

	姫島	上青木・ 桑ノ木津留	針尾・ 淀姫	三船	日東・ 五女木	計
打製石鏃	4 (17.4%)	2 (8.7%)	7 (30.4%)	0 (0.0%)	1 (4.3%)	14
二次加工剥片	1 (4.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (4.3%)	1 (4.3%)	3
微小剥離痕剥片	1 (4.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1
削器・掻器類	0 (0.0%)	1 (4.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1
石核	1 (4.3%)	2 (8.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3
石錐	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (4.3%)	1
計	7 (30.4%)	5 (21.7%)	7 (30.4%)	1 (4.3%)	3 (13.0%)	23

第 16 表は黒曜石製石器の産地割合である。姫島産、針尾・淀姫産の黒曜石がそれぞれ 7 点、30.4%である。鹿児島・熊本の上青木・桑ノ木津留、日東・五女木、三船産が合計 9 点、39.1%である。比較的近距离にある鹿

児島北部・熊本南部産の黒曜石より、遠隔地の黒曜石を多く使用しており、当時の広範な黒曜石流通の様子が窺える。

引用・参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2000『上野原遺跡(第 10 地点)』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (27)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2001『上野原遺跡(第 10 地点)』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (28)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003『城ヶ尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (60)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2013『船迫遺跡・高吉 B 遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (180)

肝付町教育委員会 2012『鐘付遺跡』肝付町埋蔵文化財発掘調査報告書 (12)

八木澤一郎 2003「上野原遺跡第 10 地点検出の『環状遺棄遺構』について」『研究紀要 縄文の森から』創刊号 鹿児島県立埋蔵文化財センター

新東晃一 2003「縄文時代早期の壺形土器出現の意義」『研究紀要 縄文の森から』創刊号 鹿児島県立埋蔵文化財センター

黒川忠広 2004「南九州貝殻文形土器に見られる地域性について」『研究紀要 縄文の森から』第 2 号 鹿児島県立埋蔵文化財センター

写 真 图 版



① C~F-50~53区 X層完掘状況 ② G-50~53区 X層遺物出土状況



① 第1礫群と第2ブロック 遺物出土状況（西から） ② 第4ブロック 遺物出土状況（南西から）



① 第1礫群 (東から) ② 敲石出土状況 (15) ③ 台形石器出土状況 (16) ④ ナイフ形石器出土状況 (20)
⑤ 槍先形尖頭器出土状況 (25) ⑥ H・I-40・41区 X層完掘状況 (北から)
⑦ G-23・24区 X層完掘状況 (南東から) ⑧ G-23区 削器・搔器類出土状況 (45)



① G～I－48～51区 V b層遺物出土状況（西から）

② G～I－48～51区 VI層上面完掘状況（西から）



① I・J-49～51区境 III b～VI層上面の土層断面と集石群（南西から） ② 石匙出土状況（359）
③ 石皿出土状況（443） ④ 棒状礫出土状況（465） ⑤ 打製石斧出土状況（379）